

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第228集

お お さ き い せ き
大 崎 遺 跡

2025

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

愛知県北東部の奥三河地域は、寒狭川など県下でも屈指の清流が流れる自然豊かなところで、その一部は天竜奥三河国定公園に指定されています。そして、急峻な地形でありながら、数少ない平坦地をうまく活かして、人々は古くから生活を営んできました。

この奥三河地域の一角をなす設楽町では、豊川で幾度となく繰り返されている洪水氾濫と、頻発する渇水の被害から人々の暮らしを守るため、そして活力に満ちた東三河地域の発展に貢献するために、設楽ダムの建設が進められています。

この設楽ダムによって水没する区域には多くの遺跡があり、またさまざまな工事の影響を受ける遺跡も存在します。これら遺跡の記録保存を実施するために、愛知県埋蔵文化財センターでは平成 26 年度から本格的に発掘調査を進めてまいりました。今回報告する大崎遺跡も、令和 3 年度と 4 年度に発掘調査が行われ、縄文時代から江戸時代までの人々の活動の痕跡が明らかになりました。

本書は、この大崎遺跡の調査成果をまとめたものであり、今後は学術的な資料として広く活用されることが期待されます。

最後になりましたが、発掘調査につきまして、地元住民の方々をはじめとする多くの方々にご協力をいただきました。また、関係各機関および関係者のご指導とご支援をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

令和 7 年 3 月 31 日

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 岡本 範重

例言

1. 本書は、北設案部設案町田口字大崎に所在する大崎遺跡（おおさきいせき：県遺跡番号 700195）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、設案ダムの事前調査として、国土交通省中部地方整備局から愛知県県民文化局を通じて、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが、管理委託を受けて実施した。調査対象面積は11,085㎡である。
3. 発掘調査は、令和3年度は令和3年8月から令和4年2月にかけて、令和4年度は令和4年5月から令和4年10月にかけてそれぞれ実施した。
4. 調査担当者は、令和3年度は樋上昇（主任専門員、現調査課長）、川添和暁（調査研究専門員）、酒井俊彦（調査研究主任）、河嶋優輝、社本有弥（調査研究主事）、宮腰健司（調査研究嘱託員）、令和4年度は永井宏幸（主任専門員）、川添和暁、社本有弥である。
5. 発掘調査は、令和3年度は株式会社イビソク名古屋支店、令和4年度は株式会社アコード名古屋営業所の調査支援を受けて実施した。令和3年度の主要なスタッフは現場代理人：小林俊之、現場代理人補：鷺板有吾、川元康民、吉田哲也、調査補助員：高橋理恵、生駒昌史、杉山敬亮、測量士：白木宏幸、舟橋哲郎、宮本亮太である。令和4年度の主要なスタッフは現場代理人：大倉崇、現場代理人補：中嶋竜也、調査補助員：菅原政徳、測量士：田畑徹也である。
6. 遺物整理、製図などの整理作業は社本有弥が行い、川添和暁が補佐した。また、次の方々のご協力を受けた。阿部裕恵・鈴木好美・瀧 智美・時田典子・堀田祐美・前田弘子・山田亜紀子・山田有美子・山本孝枝（整理補助員）
7. 出土遺物の実測トレース作業は株式会社アルカと株式会社文化財サービスと国際文化財株式会社に、土壌選別作業とプラント・オパール分析と花粉分析と土器付着炭化物などの放射性炭素年代測定分析と黒曜石の産地同定分析は株式会社パレオ・ラボに、報告書の印刷製本刊行発送業務は西濃印刷株式会社に、それぞれ業務を委託した。出土遺物の写真撮影は有限会社写真工房遊（金子知久）に依頼した。
8. 発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室、愛知県埋蔵文化財調査センター、国土交通省中部地方整備局、設案町教育委員会、設案町立奥三河郷土館（五十音順、敬称略）
9. 発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々からご教示・ご協力をいただいた。増子康眞、山田昌久、綿田弘実（五十音順、敬称略）
10. 本書の執筆は、鈴木正貴（主任専門員）川添和暁、蔭山誠一、永井邦仁（以上調査研究専門員）、社本有弥が担当した。詳細は下記の通りである。第1章と第2章と第3章第5節と遺構図版は鈴木正貴、第3章第1節と第5章と写真図版は川添和暁、第3章第2節は蔭山誠一、第3章第3節は社本有弥、第3章第4節と第5章第3節の一部は永井邦仁、第4章第1節と第2節は森将志（株式会社パレオ・ラボ）、第3節と第4節はパレオ・ラボ AMS年代測定グループ（伊藤茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・小林克也・中村賢太郎）、第5節は竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）、第5節はバンダリ・スダルシャン（株式会社パレオ・ラボ）がそれぞれ担当した。
11. 本書の編集は鈴木正貴が行い、川添和暁が補佐した。
12. 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。ただし、新基準で表記してある。
13. 調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センター（愛知県豊田市前ケ須町野方 802-24 電話 0567-67-4161）で保管している。
14. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センター（愛知県豊田市前ケ須町野方 802-24 電話 0567-67-4164）で保管している。

目次

序・例言・目次

第1章 環境と立地

第1節 遺跡の位置	1
第2節 調査の経緯	1
第3節 地理的環境	2
第4節 歴史的環境	3

第2章 遺構

第1節 調査方法と基本層序	5
第2節 縄文時代から弥生時代の遺構	8
第3節 古代から江戸時代の遺構	43

第3章 出土遺物

第1節 縄文土器	51
第2節 弥生土器	101
第3節 石器・石製品	113
第4節 古代～近世の土器・陶磁器類	133
第5節 金属関連遺物	144

第4章 自然科学分析

第1節 大崎遺跡におけるプラント・オパール分析、花粉分析	145
第2節 大崎遺跡のプラント・オパール分析	149
第3節 放射性炭素年代測定（1）	152
第4節 放射性炭素年代測定（2）	154
第5節 大崎遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定	160
第6節 大崎遺跡から出土した炭化種実	164

第5章 総括

第1節 大崎遺跡の土地利用変遷	
-----------------	--

169

第2節 大崎遺跡の先史時代の様相	172
第3節 古代以降の遺物出土状況と水田関連遺構について	177

抄録

遺構図版

写真図版

挿図目次

第1図 大崎遺跡の位置図	1
第2図 大崎遺跡周辺の地形図	2
第3図 大崎遺跡周辺の遺跡分布図	4
第4図 基本層序土層断面図(1) 21区東壁土層断面	5
第5図 基本層序土層断面図(2) 南北トレンチ T04 東側	6
第6図 1230SI 遺構図	7
第7図 5001SI・5300SI 遺構図(1)	8
第8図 5001SI 遺構図(2)	9
第9図 5004SI・5361SI・5449SI 遺構図(1)	11
第10図 5004SI・5361SI・5449SI 遺構図(2)	12
第11図 5044SI・5303SI 遺構図(1)	13
第12図 5044SI・5303SI 遺構図(2)	14
第13図 5050SI・5451SI 遺構図	15
第14図 5052SI・5320SI 遺構図	16
第15図 5054SI 遺構図	17
第16図 5055SI・5450SI 遺構図	18
第17図 5057SI 遺構図	19
第18図 5090SI 遺構図	20
第19図 5321SI 遺構図	21
第20図 5324SI・5356SI 遺構図	22
第21図 5425SI 遺構図	24
第22図 5425SI・5440SI 遺構図	25
第23図 6004SI・6015SI 遺構図	26
第24図 6045SI・6048SX 遺構図	27
第25図 6047SI 遺構図	28
第26図 6049SI 遺構図	29
第27図 6051SI 遺構図	30
第28図 6052SI 遺構図	31
第29図 6068SI・6069SI 遺構図	32
第30図 6077SI 遺構図	33
第31図 6113SI 遺構図	34
第32図 6114SI 遺構図(1)	35
第33図 6114SI 遺構図(2)	36
第34図 0209SK・0215SK・0216SK・5130SK・5131SK・5135SK 遺構図	37
第35図 6159SK 遺構図	38
第36図 縄文時代の土坑遺構図	39
第37図 20001SL 遺構図	40
第38図 水田関連遺構図(1)	44
第39図 水田関連遺構図(2)	45
第40図 水田関連遺構図(3)	46
第41図 5454SA・5455SA・5456SA 遺構図	47
第42図 1001OSS 遺構図	48
第43図 10011SS 遺構図	49
第44図 0245SY 遺構図	50
第45図 縄文土器1	55
第46図 縄文土器2	56
第47図 縄文土器3	57
第48図 縄文土器4	58

第49 國 縄文土器 5	59
第50 國 縄文土器 6	60
第51 國 縄文土器 7	61
第52 國 縄文土器 8	62
第53 國 縄文土器 9	63
第54 國 縄文土器 10	64
第55 國 縄文土器 11	65
第56 國 縄文土器 12	66
第57 國 縄文土器 13	67
第58 國 縄文土器 14	68
第59 國 縄文土器 15	69
第60 國 縄文土器 16	70
第61 國 縄文土器 17	71
第62 國 縄文土器 18	72
第63 國 縄文土器 19	73
第64 國 縄文土器 20	74
第65 國 縄文土器 21	75
第66 國 縄文土器 22	76
第67 國 縄文土器 23	77
第68 國 縄文土器 24	78
第69 國 縄文土器 25	79
第70 國 縄文土器 26	80
第71 國 縄文土器 27	81
第72 國 縄文土器 28	82
第73 國 縄文土器 29	83
第74 國 主要縄文土器出土分布図	100
第75 國 弥生土器 1	104
第76 國 弥生土器 2	105
第77 國 弥生土器 3	106
第78 國 弥生土器 4	107
第79 國 弥生土器 5	108
第80 國 弥生土器 6	109
第81 國 弥生土器 7	110
第82 國 弥生土器出土分布図	112
第83 國 5001SI 出土石器	114
第84 國 5004SI 出土石器 1	115
第85 國 5004SI 出土石器 2	116
第86 國 5044SI・5050SI 出土石器	117
第87 國 5300SI・5320SI・5321SI・5324SI 出土石器	118
第88 國 5361SI・5425SI 出土石器	119
第89 國 6004SI・6069SI・6113SI・6115SL 出土石器	120
第90 國 6015SI 出土石器	121
第91 國 6047SI・6049SI・6051SI・6052SI 出土石器	122
第92 國 土坑内出土石器	123
第93 國 検出時など出土石器 1	124
第94 國 検出時など出土石器 2	125
第95 國 検出時など出土石器 3	126
第96 國 検出時など出土石器 4	127
第97 國 検出時など出土石器 5	128
第98 國 検出時など出土石器 6	129

第99図 石製品	130
第100図 石器図面補遺1	131
第101図 石器図面補遺2	132
第102図 古代～近世の遺物実測図1	139
第103図 古代～近世の遺物実測図2	140
第104図 古代～近世の遺物実測図3	141
第105図 遺物出土分布傾向【古代】	142
第106図 遺物出土分布傾向【中世】	143
第107図 金属関連遺物	144
第108図 分析試料採取層準	145
第109図 植物珪酸体分布図	146
第110図 産出した植物珪酸体	147
第111図 花粉化石のプレパラート写真	148
第112図 植物珪酸体分布図	150
第113図 d-1180から産出した植物珪酸体	151
第114図 土器449 付着炭化物の暦年校正の結果	153
第115図 炭素・窒素安定同位体比	157
第116図 炭素安定同位体比とC/N比の関係	157
第117図 暦年校正結果	159
第118図 黒曜石産地分布図（東日本）	161
第119図 黒曜石産地推定判別図	161
第120図 大崎遺跡から出土した炭化種実	168
第121図 大崎遺跡 基本土層模式図による土地利用変遷状況	169
第122図 21A区・21B区・22B区 南西側に展開する縄文時代～弥生時代の集落跡	171
第123図 縄文～弥生時代集落跡B地区の堅穴建物跡時期相関図	173
第124図 大崎遺跡およびマサノ沢遺跡出土の部分磨製石鏃	176
第125図 大崎遺跡周辺で確認された湧水の位置	180
第126図 大崎遺跡22A区東壁 土層断面状況写真	180

挿表目次

第1表 縄文土器・弥生土器主要遺構出土点数一覧	96-99
第2表 分析試料一覧	148
第3表 試料1g当りのプラント・オパール個数	148
第4表 分析試料一覧	150
第5表 試料1g当りのプラント・オパール個数	150
第6表 測定試料および処理	153
第7表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	153
第8表 放射性炭素年代測定の測定試料および処理（1）	156
第9表 放射性炭素年代測定の炭素・窒素安定同位体比測定結果	157
第10表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果（1）	158
第11表 放射性炭素年代測定の測定試料および処理（2）	159
第12表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果（2）	159
第13表 黒曜石産地推定分析対象	162
第14表 東日本黒曜石産地の判別群	162
第15表 黒曜石の測定値と産地推定結果	163
第16表 大崎遺跡から出土した炭化種実	165
第17表 縄文・弥生時代 小地域別遺構と形成時期一覧	172
第18表 石器石材別出土器種点数・総重量一覧	174,175

第1章 環境と立地

第1節 遺跡の位置

愛知県北設楽郡設楽町は、愛知県の北東山間部に所在し、東西約22.4km・南北19.7km・総面積約273.94km²の範囲を占める。旧三河国設楽郡に属する設楽町は、北から時計回りに、豊田市稲武地区、長野県根羽村、豊根村、東栄町、新城市鳳来地区、新城市作手地区、豊田市下山地区、豊田市足助地区と接している。稲武地区を挟んで北側には、岐阜県恵那市上矢作町が、一方で東側には東栄町を挟んで、静岡県浜松市天竜区佐久間町が位置しており、当地はまさに美濃・信濃・遠江と接する境界地域である。

大崎遺跡は、設楽町内のほぼ中央にある田口地区の西端部に所在する。設楽大橋から大きく蛇行して遺跡の西側を南へ流れる境川は、遺跡の南側で寒狭川と合流し最終的に豊川となる。遺跡の西側はこの境川で侵食されて段丘崖となっており川

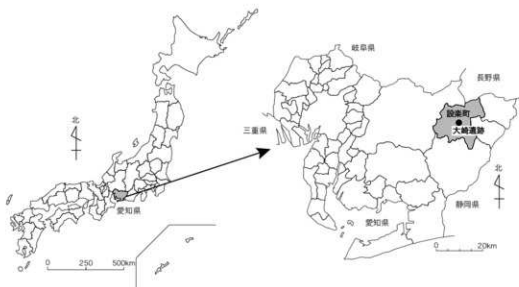
との比高は約8mを測る。大崎遺跡の境川を挟んで西側の段丘面は狭く遺跡は存在しないが、蛇行する境川を少し上流に行くと川向かいに川向東貝津遺跡があり、その北側の丘陵上に大畑遺跡が分布する。一方、下流に向かうと谷が狭く急峻となり遺跡は全く認められなくなる。北から東側には標高約500mの山塊があり、現在は田口集落から山塊頂部に至る道路は存在するが、そこから先は大崎遺跡に至る陸路と呼べる道は存在しない。

大崎遺跡が所在する段丘面は南北約130m、東西約90mを測る台形状の平面形を呈しており、北から南に緩やかに傾斜している。境川はこの段丘面の南西端で東側に鍵の手状に屈曲しており、現在は西側の段丘崖よりも南側の段丘崖は傾斜が緩やかで、川岸に容易に至ることができる。遺跡はこの段丘面のほぼ全面に展開している。

第2節 調査の経緯

大崎遺跡の発掘調査は、設楽ダムに伴う事前調

査として国土交通省中部地方整備局から、愛知県



第1図 大崎遺跡の位置図

県民文化局を通じた委託事業として愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

大崎遺跡は、『愛知県遺跡分布地図Ⅲ（東三河地区）』（愛知県教育委員会 1996）に記載された周知の遺跡である。また、その後刊行された『詳細遺跡分布調査報告書』（愛知県教育委員会 2007）にも事前調査の必要な遺跡として掲載されている。

この大崎遺跡は標高約 363m から約 378m の河岸段丘上に所在しており、設楽ダムの湛水域（標高 437m 以下）に該当する。まずは、水没する河岸段丘面を対象に平成 19（2007）年度に愛知県埋蔵文化財センターにより範囲確認調査（現在の本発掘調査 A に相当）が実施され、29 ヶ所

のトレンチを掘削した結果、河岸段丘の全面に遺跡の範囲が広がることが判明した。これを受けて県教育委員会により本調査（現在の本発掘調査 B に相当）の範囲約 11000m²が確定された。

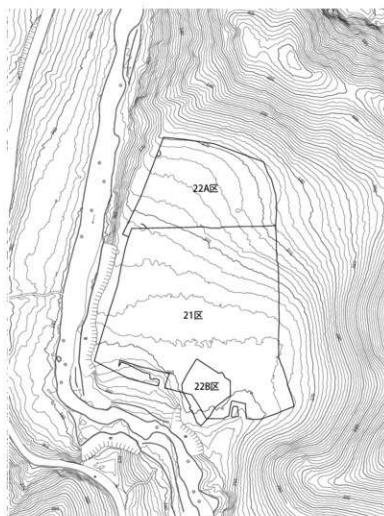
本調査は、まず令和 3（2021）年度に北端部を除く部分（8100m²）が愛知県埋蔵文化財センターにより実施された。発掘調査は便宜上 2 区に区分し、西側を A 区、東側を B 区と設定し調査を実施した（なお、本報告書では両者を合わせて 21 区と呼称している）。調査の結果、南端部で分布調査や範囲確認調査では認識できていなかった下層の遺跡が存在することが疑われ、同時に下層確認調査を実施した結果追加調査を行うこととなった。令和 4（2022）年度は北端部の 22A 区

（2835m²）と追加調査となった南端部の 22B 区（160m²）を設定し調査を実施した。

令和 4 年 2 月と 3 月および令和 5 年 2 月と 3 月に遺構図を中心とした二次整理作業を、令和 5（2022）年度に、愛知県埋蔵文化財センターで図面の整理および出土遺物の分析・記録などの整理報告書作成業務を行い、令和 6 年度末に発掘調査報告書が刊行された。

第 3 節 地理的環境

設楽町内には、豊川水系と矢作川水系と天竜川水系の三本の河川水系が存在する。設楽ダムは豊川水系に設置されるもので、これに関わって発掘調査される遺跡は全て豊川水系に所在する。豊川水系は寒狭川（豊川）に境川や野々瀬川などが合



第 2 図 大崎遺跡周辺の地形図 (S = 1 / 2000)

流するもので、概ね町域中央から南流する。また、設楽町は高低差が激しく豊川と当貝津川との合流地点付近で標高約200mであるのに対し、北東端の茶臼山高原付近で標高約1,320mを測る。

大崎遺跡は、標高約363～378m、寒狭川（豊川）支流の境川左岸の河岸段丘上に立地する。当地は田口地区の西端に位置しており、陸路から見れば田口地区の西奥に相当する。遺跡の立地する段丘は、北から南に向かって緩かに傾斜しており、ここに縄文時代以来、古代・中世・近世までさまざまな活動がなされてきた。境川を隔てた川向地区には段丘面に川向東貝津遺跡などがあり、丘陵上には大畑遺跡などが存在する。大崎遺跡は境川水面との比高は最短で約8mで、河川資源の利用にも便利であった。

設楽地域では地質学的な環境も複雑である。中

第4節 歴史的環境

ここでは、設楽町内で知られている遺跡などについて、整理しておく（第3図）。

後期旧石器時代では、設楽町津具地区に接した豊根村域には、茶臼山遺跡の所在が知られ、ナイフ形石器・掻器や剥片石核が良好な状態で出土した。川向坂の上にある市場口遺跡では、ナイフ形石器のほか、剥片・石核が出土している。

縄文時代草創期では、川向東貝津遺跡で木葉形尖頭器やその製作に関わる剥片石核類など多量の石器群が確認された。後期旧石器時代末の細石器（細石刃・細石核）が出土しており、石器群の一部は後期旧石器時代にさかのぼるものの可能性がある。また、八橋地区の滝瀬遺跡では、縄文時代草創期末から早期初頭に遡る可能性のある竪穴建物跡10基以上で構成された集落跡が確認された。

縄文時代早期では、名倉地区の星野神田遺跡で

央構造線は天竜川から豊川沿いにかけて走っていることが知られ、その東側・南側は三波川変成帯、西側・北側は領家変成帯が分布しており、地質構造が大きく異なる。設楽地域は領家変成帯が分布範囲であるが、それに加えて新生代第三紀の火山活動による設楽層群が鳳来湖を中心に同心円状に分布している。設楽層群には、設楽火山岩類を含む南設楽層群と堆積岩類由来の北設楽層群があり、設楽町内では、北設楽層群が境川東側を沿って、津具地区・豊根村へと延びている。笹平遺跡はこの設楽層群の外周傍の地点に位置している遺跡であり、このような多様な岩帯が近接地域に存在する当地において、設楽火山岩類や南設楽層群由来の安山岩・溶結凝灰岩や、三波川変成帯由来の塩基性岩類、領家変成帯由来の花こう岩や片麻岩などが、利用可能な石材環境となっている。

は押型文土器の出土が古くから知られ、川向東貝津遺跡・滝瀬遺跡でも集石炉跡が発見されている。滝瀬遺跡や大名倉遺跡では、早期前半に属するトロトロ石器も出土し、川向地区の大栗遺跡では、早期前半に多く知られる煙道付炉穴が1基確認された。また、万瀬遺跡では、竪穴建物跡と炉穴群からなる早期前半の集落跡が調査されている。

縄文時代前期では、津具地区の鞍船遺跡や胡桃窪遺跡では前期後半の竪穴建物跡が確認された。これ以外にも遺物が点的に確認されている。

縄文時代中期前半では、川向地区の石原遺跡では山田平式期頃を主体とする竪穴建物跡群が確認された。中期後半になると、笹平遺跡をはじめ滝瀬遺跡、川向東貝津遺跡と大畑遺跡などの集落遺跡がある。

縄文時代後期では大名倉遺跡、マサノ沢遺跡、笹

平遺跡、杉平遺跡、豊邦貝津の神谷沢遺跡などで古くから遺物が採集され、マサノ沢遺跡では後期前葉～中葉の埋葬遺構群などが、笹平遺跡では、後期初頭～中葉の竪穴建物跡 30 基以上が発見された。

縄文時代晩期の遺物は、大名倉遺跡・笹平遺跡・滝瀬遺跡・大崎遺跡などで散発的に確認される。マサノ沢遺跡では晩期後葉の良好な遺物包含層が、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡では竪穴建物跡があり、石原遺跡では自然流路内に土器集積が見つかっている。

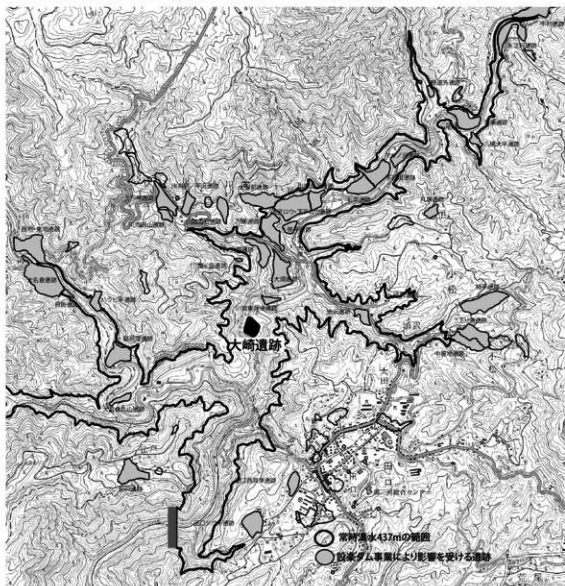
弥生時代前期では条痕文土器が各遺跡で散在的にみつき、笹平遺跡やマサノ沢遺跡で土器棺墓

が検出された。弥生時代中期では上ヲロウ・下ヲロウ遺跡などで竪穴建物跡が良好な状態で発見されている。

古墳時代の様相は設楽ダム関連の調査では不明瞭だが、名倉地区では古墳時代後期から古代にかけて遺跡がまとまって確認されている。

古代以降では、南ヶ岳遺跡で清郷甕が出土し、滝瀬遺跡では、灰釉陶器とともに古代の土坑・柱穴やカマドを伴う竪穴建物跡が見つかった。

中世では、西地・東地遺跡で竪穴状遺構が、滝瀬遺跡で大型の倉庫と思われる掘立柱建物跡などの遺構や遺物が発見されている。



第3図 大崎遺跡周辺の遺跡分布図 (S=1/900)

第2章 遺構

第1節 調査方法と基本層序

1 調査区の設定と調査の方法

平成19年度の範囲確認調査（現在の本発掘調査A）の結果、本調査（現在の本発掘調査B）の対象となったのは、遺跡が所在する段丘面のほぼ全域で、その調査面積11085㎡である。調査対象地は境川の東側左岸の川に対して西に張り出す段丘上に立地し、東側と北側に山塊が控える。この段丘は南側が標高365m前後と低いのに対し、北側が標高378m前後と緩やかに高くなっている。発掘調査は令和3年度に南側のやや低い段丘部分を2区に分けて行い（実際には西側を21A区、東側を21B区と称して調査したが、本書では両者を合わせて21区と略す）、翌令和4年度に北側の標高が高い段丘部分を22A区、南端部の下層遺構の追加調査分を22B区と称して実施した。

発掘調査にあたっては、調査区全域に世界測地系の国土座標測定値による10mグリッドを設定し、グリッド毎に出土遺物の取り上げ、遺構の整理を行っている。特に縄文時代の遺構・遺物が多く出土した区域に関しては、必要に応じて5mグリッドによる調査を行った。

調査は、重機による表土掘削および人力による包含層掘削を実施した後に、平面と壁面を精査して遺構検出を行い、これらの略測図を記録し写真を撮影した。検出された遺構は、土層断面を記録できるように遺構の形状に合わせ半截またはベル

トを設定して掘削を進め、必要に応じて遺物出土状態や土層断面の測量や写真撮影などの記録作業を実施した。そして、概ね全ての遺構を完掘し終えた状態で空中撮影など全体撮影を実施した。撮影後は遺構の断ち割り調査や基盤層を確認するための深掘り調査などの補足調査を実施した。調査終了後は堺川に濁水が流出しないよう埋め戻し作業を実施し、調査区域を事業者に引き渡した。

大崎遺跡の発掘調査成果の情報公開としては、発掘調査期間中に毎月刊行される設案発掘通信(64号～74号)に調査成果速報を掲載したほか、令和3年12月19日と令和4年8月20日に地元説明会を開催した。また、「令和3年度設案ダム関連発掘調査成果報告会『新設案発見伝8』」では令和3年3月12日から調査成果の概要を解説した動画を公開した。これは新型コロナウイルス感染症の拡大を受けた措置である。翌年は令和5年3月4日に「令和4年度設案ダム関連発掘調査成果報告会『新設案発見伝9』」を開催し、大崎遺跡については2年分の調査成果を公表した。

整理作業については、発掘調査時から遺物洗浄も並行して実施しており、令和3年と4年の2月から3月の2ヶ月間は図面整理を中心とした二次整理作業を実施した。本格的な二次整理作業は令和5年度に実施した。報告書印刷刊行は令和6年度に実施した。



第4図 基本層序土層断面図(1) 21区東壁土層断面 (S=1/500)

2 調査日誌抄録

現地調査の経過について、調査区別に概要を記述する。

(1) 21 区の調査経過

月日	調査内容
2021 年	
8 月 30 日	A 区表土掘削開始。
9 月 13 日	A 区遺構検出を開始。
10 月 1 日	A 区遺構掘削を開始。
10 月 28 日	ラジヘリにより遺構撮影 (A 区南西部)。下層遺跡確認のための補足調査開始。4箇所にて2m×2mのトレンチを掘削した。
11 月 8 日	B 区表土掘削を開始。
11 月 16 日	B 区遺構検出を開始。
11 月 25 日	ラジヘリにより遺構撮影 (A 区北中部)。下層遺跡確認のための補足調査開始。9箇所にて2m×2mのトレンチを掘削した。
12 月 16 日	遺跡検討会。山田久氏の指導。
12 月 19 日	地元説明会を開催。23名参加。
12 月 22 日	ラジヘリにより遺構撮影 (B 区南半)。
2022 年	
1 月 19 日	B 区表土掘削を全部終了。
1 月 28 日	ラジヘリにより遺構撮影 (B 区全景とA区竪穴建物群)。
1 月 29 日	下層遺跡確認のための補足調査開始。8箇所にて2m×2mのトレンチを掘削。
2 月 4 日	調査を終了し撤収作業。

(2) 22A 区の調査経過

月日	調査内容
5 月 31 日	石換遺構の調査を開始。
6 月 24 日	石換遺構の調査を完了。表土掘削開始。
8 月 8 日	表土掘削を終了し、切株周囲の清掃など遺構検出準備を開始。
8 月 8 日	1面遺構検出を開始。
8 月 19 日	1面遺構検出状況の撮影。
8 月 20 日	地元説明会。調査区西側の1面遺構の検出状況を見学してもらう。
8 月 30 日	ラジヘリにより1面遺構撮影。終了後に補足調査開始。
9 月 13 日	2面調査に向け包含層掘削を開始。
9 月 21 日	包含層掘削と同時に2面遺構検出を開始。
9 月 28 日	2面遺構掘削を開始。
9 月 30 日	ラジヘリにより2面遺構撮影。終了後に補足調査開始。
10 月 5 日	補足調査終了。

(3) 22B 区の調査経過

月日	調査内容
5 月 31 日	表土掘削開始。
6 月 7 日	1面遺構検出を開始。
7 月 11 日	1面遺構掘削を開始。
8 月 8 日	ラジヘリにより1面遺構撮影。終了後に補足調査開始 (～8月10日)。
8 月 20 日	地元説明会。1面遺構掘削状況を見学してもらう。
9 月 12 日	1面補足調査 (遺構掘削) を再開。
10 月 4 日	2面調査に向け包含層掘削開始。
10 月 6 日	2面遺構検出と遺構掘削を開始。
10 月 14 日	2面遺構撮影。
10 月 20 日	南西壁深部調査。
10 月 21 日	区域の戻し作業完了。

3 調査の概要と基本層序

(1) 調査成果の概要

大崎遺跡の発掘調査で確認された遺構は近代以降の可能性もあるものを含めて 1084 基を数える。また、この発掘調査で遺物は 27 リットル入りコンテナで 100 箱が出土した。出土遺物から推定される遺構の時期は、概ね 5 期に区分される。

縄文時代早期以前 土坑などがある。

縄文時代中期から弥生時代中期 竪穴建物 30 棟、土坑墓などがある。

古代から中世前半 水田関連遺構として水路や畦畔、沼地形やビット列などがある。

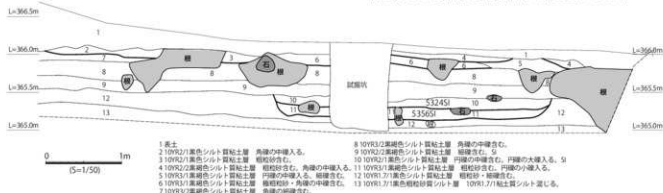
戦国時代から近世 水田関連遺構のほかビット列がある。

近世以降 積石遺構 8 基と炭焼窯 1 基がある。

(2) 大崎遺跡の土層堆積の概況

大崎遺跡は境川東岸、河岸段丘状の緩斜面地上に立地する。当地は現在の田口集落の西側にある丘陵根根が境川に向かって伸びる末端付近に当たり、遺跡の北と東には丘陵根根が迫っている。北東側はこれら根根に挟まれた谷地形で、調査前の段階では湧水などのため湿潤な環境となっていた。遺跡範囲内は北東から南西方向への傾斜地となっており、遺跡中央付近で傾斜角度の変換点があり、北側に比べて南側の傾斜はさらに緩やかとなっている。

本遺跡での基本的な堆積層序は、上位から 1 層:



第5図 基本層序土層断面図 (2) 南北トレンチ T04 東側 (S=1/50)

4図13層)である。Ⅱ層は古い段階の耕作土および遺物包含層、Ⅲ層上面が縄文時代中期以降の遺構検出面である。Ⅴ層が片麻岩由来の岩盤層あるいは旧境川河床由来の堆積層である。Ⅳ層の形成時期は不詳であるが、特に片麻岩由来の風化細礫を包含する層は、よりⅤ層に近いと考えられる。

1230SI平面図

1230SI B-B'土層断面図

1230SI A-A'土層断面図

1245SL C-C'土層断面図

1245SL D-D'土層断面図

1245SL E-E'土層断面図

1241SP F-F'土層断面図

1242SP G-G'土層断面図

1243SP H-H'土層断面図

1244SK I-I'土層断面図

第6図 1230Si 遺構図 (S=1/50)

第2節 縄文時代から弥生時代の遺構

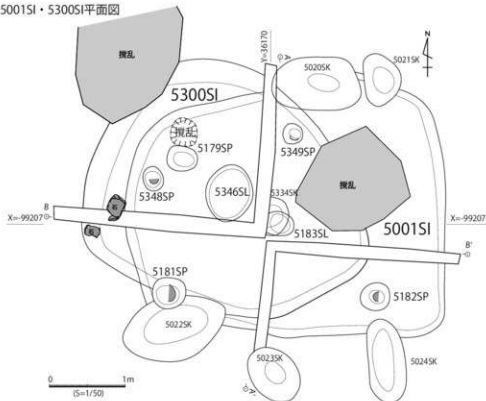
縄文時代から弥生時代の遺構としては竪穴建物跡が30棟、柱穴列1基、不定形土坑1基がある。

1 竪穴建物跡

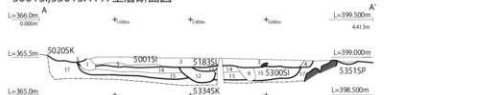
(1) 1230SI (第6図・遺構図版37)

22A区南西部1116と1216グリッドで黒褐色シルトを地山とする形で検出された竪穴建物跡

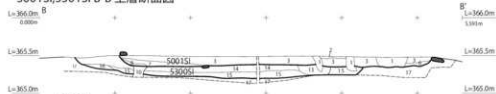
5001SI・5300SI平面図



5001SI, 5301SI A-A'土層断面図



5001SI, 5301SI B-B'土層断面図



- 1 植生面
- 2 10YR2/2黒褐色中粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。樹皮乱
- 3 10YR2/2黒褐色中粒砂少量含むシルト層 やや粗るい黒褐色シルトブロック含む。小礫少量含む。5001SI
- 4 10YR2/2黒褐色中粒砂質シルトと10YR3/3暗褐色中粒砂質シルトの混土層 小礫少量含む。5001SI
- 5 10YR2/1黒色中粒砂少量含むシルト層 5001SI
- 6 10YR2/1黒色中粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。5001SI
- 7 10YR2/2黒褐色中粒砂少量含むシルト層 やや粗るい黒褐色シルトブロック含む。小礫少量含む。5001SI
- 8 10YR2/1~2黒褐色中粒砂少量含むシルト層 黒褐色シルトブロック含む。小礫少量含む。5001SI
- 9 植生面
- 10 植生面
- 11 7.5YR2/1黒色細粒砂質シルト層 5183SL
- 12 10YR2/1黒褐色中粒砂質シルト層 黒色シルトブロック少量含む。小礫少量含む。5334SK
- 13 10YR2/1黒色中粒砂多く含むシルト層 小礫少量含む。
- 14 10YR3/2黒褐色中粒砂~細粒砂含むシルト層 黒色シルト小ブロック少量含む。小礫少量含む。5300SI
- 15 10YR2/2黒褐色細粒砂質シルト層 中粒砂少量含む。黒褐色シルトブロック少量含む。小礫少量含む。5300SI
- 16 10YR2/2黒褐色中粒砂多く含むシルト層 黒褐色シルト小ブロック含む。小礫・中礫少量含む。
- 17 10YR2/1~2黒褐色中粒砂少量シルト層 小礫少量含む。

第7図 5001SI・5300SI 遺構図 (1) (S=1/50)

である。長軸 4.09m、短軸 3.08m の隅丸長方形の平面プランで深さは 0.12m を測る。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色シルトである。

主柱穴は 1241SP～1244SP が該当し 1230SI の四隅に所在する。1241SP は長軸 0.32m、短軸 0.31m、床面からの深さ 0.19m、1242SP は長軸 0.37m、短軸 0.29m、深さ 0.23m、1243SP は長軸 0.39m、短軸 0.38m、深さ 0.20m、1244SP は長軸 0.40m、短軸 0.38m、深さ 0.08m で、いずれも平面形は円形を呈し規模が小さい。

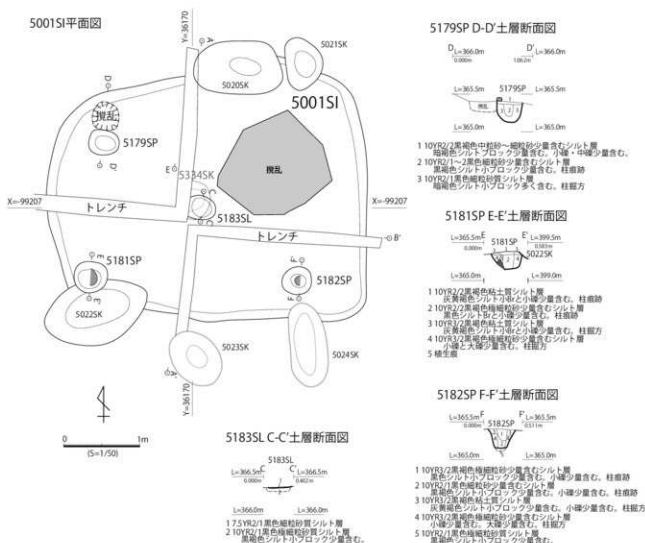
炉跡 1245SL は 1230SI の中央南寄りの床面に構築され、長軸 0.71m、短軸 0.65m、深さ 0.09m を測る。炉床付近では炭化物を含む黒褐

色シルトが堆積するが、被熱痕は認められない。内部から礫が数個出土したが床や壁を構築したものとは思われない。

出土遺物から竪穴建物跡 1230SI は縄文時代晩期以降に位置づけられる。

(2) 5001SI (第7図～第8図・遺構図版 25)

21 区西部南端の 2016 と 2017 グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸 4.24m、短軸 3.17m のやや台形に歪んだ隅丸長方形の平面プランで深さは 0.18m を測る。下位に位置を少しずらして竪穴建物跡 5300SI が構築されている。黒褐色中粒砂を含むシルトを地山とする形で検出された。埋土は小礫を少量に含む黒褐色シルトである。



第8図 5001SI 遺構図 (2) (S=1/50)

主柱穴は5179SP、5181SP、5182SPが該当し5001SIの四隅に所在するが北東隅の主柱穴は不明である。5179SPは長軸0.42m、短軸0.40m、床面からの深さ0.28m、5181SPは長軸0.46m、短軸0.42m、深さ0.26m、5182SPは長軸0.40m、短軸0.385m、深さ0.31m、で、いずれも平面形は円形を呈し、平面と断面ともに柱痕が認められる（第8図）。

炉跡の可能性のある5183SLは5001SIの中央西寄りの床面に構築され、長軸0.40m、短軸0.36m、深さ0.04mを測る。黒色シルトが堆積するが、被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡5001SIは縄文時代中期に位置づけられる。

（3）5300SI（第7図・遺構図版25）

21区西部南端の2016と2017グリッドで検出された竪穴建物跡で、5001SIに切られる。長軸3.81m、短軸3.17mの歪な隅丸方形の平面プランで深さは0.29mを測る。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。

主柱穴は5348SPと5349SPが該当すると思われるが、5300SIの四隅に位置しない。5348SPは長軸0.33m、短軸0.29m、床面からの深さ0.14mで、平面形は概ね円形を呈する。炉跡5346SLは1230SIの中央の床面に構築され、長軸0.76m、短軸0.63m、深さ0.04mを測る。炭化物や焼土が確認されず炉跡か否か不明。

出土遺物から竪穴建物跡5300SIは縄文時代中期後半に位置づけられる。

（4）5004SI（第9図～第10図・遺構図版25）

調査区北西端1916、1917、2016、2017グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸4.46m、短軸4.08mの概略隅丸正方形の平面プランで深さは0.14mを測る。同じ場所で竪穴建

物跡5361SIと5449SIが作り直されている。

主柱穴は5340SPが該当すると思われるが、他の柱穴は不明である。5340SPは長軸0.27m、短軸0.19m、床面からの深さ0.09mである。炉跡5355SLは5004SIの中央北寄りの床面に構築され、長軸0.50m、短軸0.33m、深さ0.07mを測る。この他に5332SKと5337SKがあるが、5004SIに伴う遺構ではないと思われる。

出土遺物から竪穴建物跡5004SIは弥生時代前期～中期前半に位置づけられる。

（5）5361SI（第9図～第10図・遺構図版25）

5004SIの下位に床面が検出された竪穴建物跡である。平面プランは5004SIと同一であるが、深さは0.46mを測る。

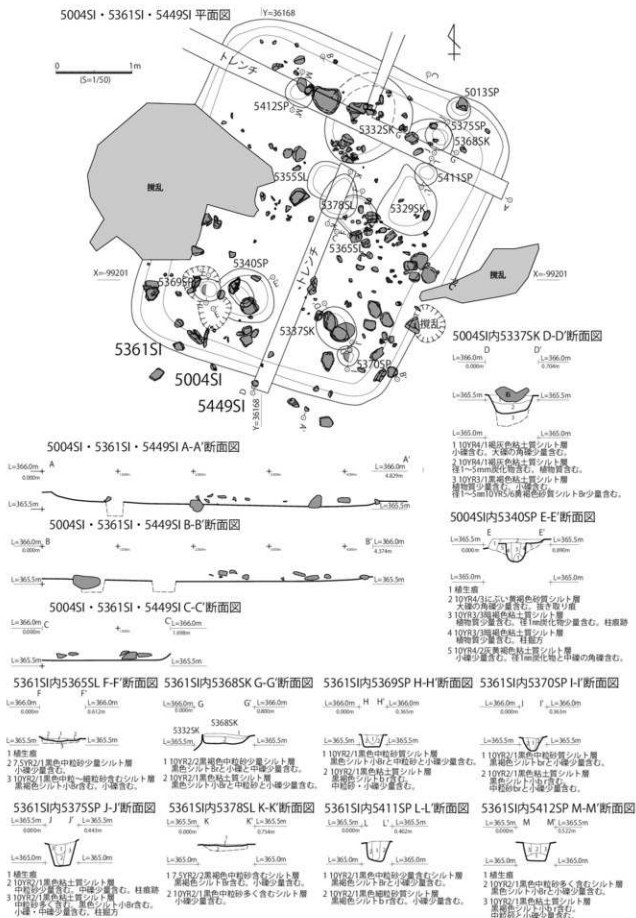
主柱穴は5369SP、5370SP、5411SP、5412SPが該当し5361SIの四隅に所在する。5369SPは長軸0.36m、短軸0.29m、床面からの深さ0.18m、5370SPは長軸0.29m、短軸0.26m、深さ0.17m、5411SPは長軸0.30m、短軸0.30m、深さ0.27m、5412SPは長軸0.40m、短軸0.38m、深さ0.31mで、いずれも平面形は円形を呈する（第10図）。

炉跡は5365SLと5378SLがあり、5361SIの中央北寄りの床面に構築されている。5365SLは長軸0.54m、短軸0.52m、深さ0.05mを、5378SLは長軸0.61m、短軸0.49m、深さ0.03mを測る。ともに炭化物や被熱痕は認められず、炉跡とすれば地床炉だったと思われる。

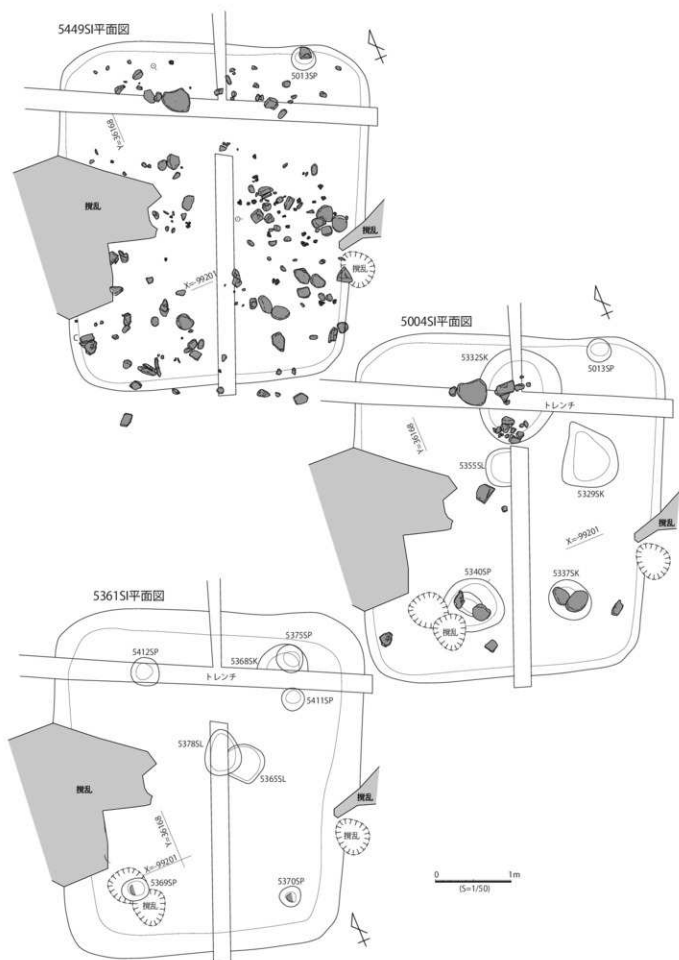
出土遺物から竪穴建物跡5361SIは弥生前期～中期に位置づけられる。

（6）5449SI（第9図～第10図・遺構図版25）

5004SIと5361SIの下位に床面が検出された竪穴建物跡である。平面プランは5004SIとほぼ同一で、深さは0.46mを測る。



第9図 5004SI・5361SI・5449SI 遺構図 (1) (S=1/50)



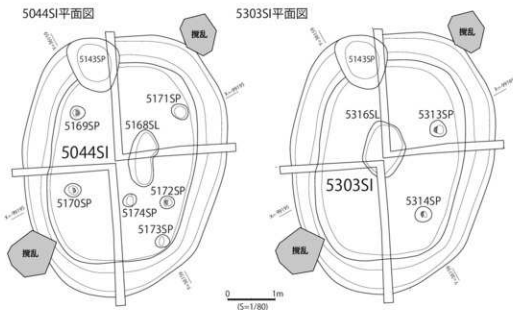
第10図 5004SI・5361SI・5449SI遺構図(2) (S=1/50)

Figure 1 is a stratigraphic correlation diagram of the upper part of the Tertiary in the Kurohara area. It consists of two main profiles, A and B, showing stratigraphic units and fossil locations. Profile A (top) shows units 1 to 10, with fossil locations 50449, 50305, and 53165L. Profile B (bottom) shows units 1 to 10, with fossil locations 51435P, 51685L, and 53165L. A detailed list of fossil locations and their associated units is provided below the profiles.

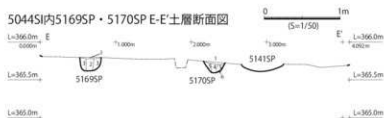
17.5YR3/2黒褐色細粒砂り少量含むシルト層 小砂り少量含む、焼土少量含む、51685L
2.10YR2/1黒褐色細粒砂り少量含むシルト層 黒色シルト小ブロック少量含む、小砂り・中砂り少量含む、
4.10YR2/1黒褐色土質シルト層 黒褐色シルト小ブロック少量含む、小砂り少量含む、
5.10YR3/2〜**2/2**黒褐色中粒砂り少量含むシルト層 小砂り・中砂り少量含む、
6.10YR2/1黒褐色細粒砂りシルト層 黒褐色シルト小ブロック含む、
7.5YR2/1黒褐色細粒砂り多く含むシルト層 黒褐色シルトブロック少量含む、53165L
8.10YR2/1黒褐色細粒砂り少量含むシルト層 黒褐色シルト小ブロック少量含む、小砂り少量含む、
9.10YR2/1黒褐色細粒砂り少量含むシルト層 小砂り少量含む、

S3135P
 110YR2/1黒色細粒砂質シルト層 黒褐色シルト小ブロック含む、小礫少量含む、柱状腐
 210YR2/2黒色細粒砂少量含むシルト層 黒色シルトブロック少量含む、小礫少量含む、柱状腐
 310YR2/2黒色細粒砂少量含むシルト層 黒色シルトブロック含む、小礫少量含む、柱状腐
 4礫を含む
 510YR2/2黒色細粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む、柱状腐
 610YR2/1黒色細粒砂少量含むシルト層 小礫含む、柱状腐
 710YR2/2黒色細粒砂質シルト層 小礫少量含む、柱状腐
 810YR2/1黒色細粒砂質シルト層 黒褐色シルトブロック含む、小礫少量含む、柱状腐

13

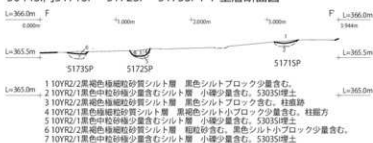


5044SI内5169SP・5170SP E-E'土層断面図



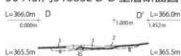
- 1 10YR2/1黒色シルト層 黒褐色シルト小ブロック含む。小礫少量含む。
- 2 7.5YR2/1黒色中粒砂少量含むシルト層 黒褐色シルト小ブロック少量含む。小礫少量含む。柱状跡
- 3 10YR2/2黒色中粒砂少量含むシルト層 黒褐色シルト小ブロック少量含む。小礫少量含む。柱状跡
- 4 10YR2/1黒色中粒砂少量含むシルト層 黒褐色シルト小ブロック少量含む。小礫少量含む。柱状跡
- 5 10YR2/2黒色中粒砂少量含むシルト層 土面片少量含む。黒褐色シルト小ブロック少量含む。小礫少量含む。柱状跡
- 6 10YR2/1黒色中粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。5303SI埋土

5044SI内5171SP・5172SP・5173SP F-F'土層断面図



- 1 10YR2/2黒褐色極細粒砂質シルト層 黒色シルト小ブロック少量含む。
- 2 10YR2/1黒色中粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。5303SI埋土
- 3 10YR2/2黒褐色極細粒砂質シルト層 黒色シルト小ブロック含む。柱状跡
- 4 10YR2/1黒色極細粒砂質シルト層 黒褐色シルト小ブロック少量含む。柱状跡
- 5 10YR2/1黒色中粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。5303SI埋土
- 6 10YR2/2黒褐色極細粒砂質シルト層 粗粒砂含む。黒褐色シルト小ブロック少量含む。
- 7 10YR2/1黒色中粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。5303SI埋土

5044SI内5168SL D-D'土層断面図



- 1 植生面
- 2 7.5YR3/2黒褐色極細粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。埋土少量含む。
- 3 10YR2/2黒褐色中粒砂少量含むシルト層 5YR4/6赤褐色の埋土を含む。小礫少量含む。
- 4 7.5YR2/2黒褐色中粒砂～細粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。中礫少量含む。5303SI埋土

5044SI内5174SK G-G'土層断面図



- 1 10YR2/2黒褐色極細粒砂少量含むシルト層 黒色シルト小ブロック少量含む。小礫少量含む。
- 2 10YR2/2黒褐色中粒砂～細粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。中礫少量含む。5303SI埋土

第12図 5044SI・5303SI 遺構図(2) (S=1/50)

主柱穴や炉跡は確認されず、床面に礫が大量に散布している。

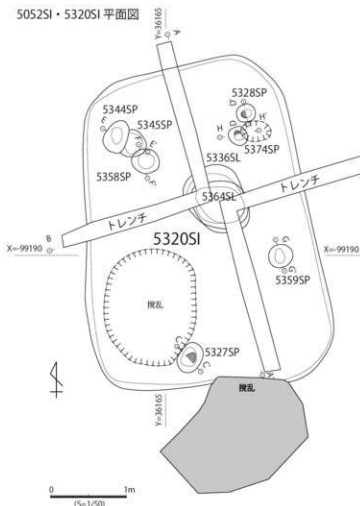
竪穴建物跡 5449SIは弥生時代前期～中期に位

置づけられる。

(7) 5044SI (第11図～第12図・遺構図版19)

21区中央部西寄りの1815と1916グリッド

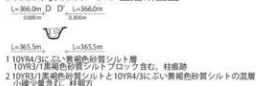
5052SI・5320SI 平面図



5052SI内5327SP C-C'土層断面図



5052SI内5328SP D-D'土層断面図



5052SI内5344SP E-E'土層断面図



5320SI内5358SP F-F'土層断面図



5320SI内5359SP G-G'土層断面図



5320SI内5374SP H-H'土層断面図



5052SI・5320SI A-A'土層断面図



5052SI・5320SI B-B'土層断面図



- 1 柱直
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。5052SI
- 3 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。5365SL
- 4 10YR4/3にふい黄褐色砂質シルト層 植物質少量含む。5365SL
- 5 10YR4/3にふい黄褐色砂質シルト層 植物質少量含む。5052SI
- 6 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 小礫少量含む。5320SI
- 7 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。5364SL
- 8 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。小礫含む。5364SL

第14図 5052SI・5320SI 遺構図 (S=1/50)

確認できる (第12図)。

炉跡 5316SLは5303SIのほぼ中央の床面に構築され、長軸1.20m、短軸0.91m、深さ0.08mを測る。炭化物や被熱痕は認められないので、炉跡か否かは確定できない。

竪穴の外周には5044SIと同様に浅い溝が存在

し、周堤の痕跡と推定される。

竪穴建物跡 5303SIは弥生時代中期前半に位置づけられる。

(9) 5050SI・5451SI (第13図・遺構図版25)

21区中央部西寄りの1916と2016グリッドで検出された竪穴建物跡で、上位に5050SI

が、下位に 5451SI がある。上位の竪穴建物跡 5050SI は長軸 4.21m、短軸 3.19m の歪な長方形の平面プランで深さは 0.21m を測り、埋土は黒色細粒砂質シルトである。一方、下位の竪穴建物跡 5451SI は長軸 4.22m、短軸 3.59m の歪な長方形の平面プランである。埋土はシルトブロックや小礫などを含む黒褐色シルトである。

ックを含む。

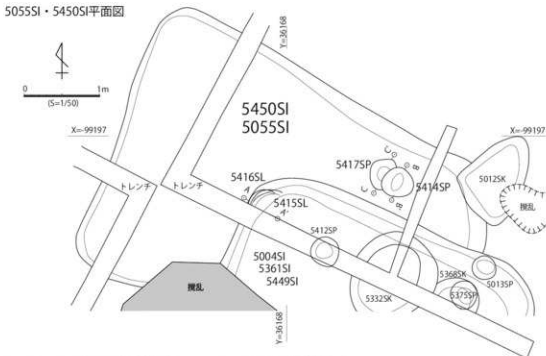
出土遺物から堅穴建物跡 5050SI・5451SI は
縄文時代後期後葉～晩期前半に位置づけられる。

(10) 5052SI (第 14 図・遺構図版 19)

21区中央部西寄りの1816と1916グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸4.42m、短軸2.96mの隅丸台形の平面プランで深さは0.18mを測る。埋土は炭化物を含む黒褐色粘土質シルトである。

主柱穴は5327SPと5328SPと5344SPが該当し5052SIの四隅に所在するが、南東隅の柱穴は不明。5327SPは長軸0.41m、短軸0.30m、床面からの深さ0.18m、5328SPは長軸0.26m、短軸0.25m、深さ0.15m、5344SPは長軸0.44m、短軸0.31m、深さ0.30mで、いずれも平面形は円形を呈する。

5055SI・5450SI平面図



5415SL・5416SLA-A'土層断面図

L=365.0m A' L=365.0m
0.00m 0.50m

L=365.5m 5415SL
5055SI 5416SL
5450SI

L=365.0m L=365.0m

- 1 10YR2/1黒色細粒砂少量含むシルト層
黒褐色シルト少量含む。小礫少量含む。5415SL
- 2 10YR2/1黒色細粒砂少量含むシルト層
黒褐色シルト少量含む。小礫少量含む。5416SL
- 3 10YR2/2黒褐色細粒砂質シルト層
黒褐色シルト少量と小礫少量含む。5055SI
- 4 10YR2/1黒色粘土質シルト層
黒褐色シルト少量含む。中粒砂と小礫少量含む。5450SI

5414SP B-B'土層断面図

L=365.0m B B' L=365.0m
0.00m 0.50m

L=365.5m L=365.5m

L=365.0m L=365.0m

- 1 10YR2/1黒褐色粘土質シルト層
やや明るい黒褐色シルト少量と小礫少量含む。
- 2 10YR2/1黒色細粒砂質シルト層
黒褐色シルト少量と小礫少量含む。柱面跡
- 3 10YR2/1黒色粘土質シルト層
黒褐色シルト少量含む。中粒砂少量含む。柱面方

5417SP C-C'土層断面図

L=365.5m C C' L=365.5m
0.00m 0.50m

L=365.0m L=365.0m

- 1 10YR2/1黒色細粒砂質シルト層
黒褐色シルト少量含む。小礫少量含む。
- 2 10YR2/1~2黒褐色細粒砂質シルト層
黒褐色シルト少量と小礫少量含む。柱面跡
- 3 10YR2/1黒色細粒砂質シルト層
黒褐色シルト少量含む。柱面方

第 16 図 5055SI・5450SI遺構図 (S=1/50)

炉跡 5336SL は 1230SI の中央北寄りの床面に構築された地床炉で、長軸 0.88m、短軸 0.77m、深さ 0.10m を測る。炉床付近では炭化物や焼土ブロックを含む。

出土遺物から竪穴建物跡 5052SI は縄文時代晚期前半にさかのぼる可能性がある。

(11) 5320SI (第 14 図・遺構図版 19)

5044SI の下位で検出された竪穴建物跡である。長軸 4.42m、短軸 2.96m の隅丸台形の平面プランで深さは 0.15m を測る。埋土は炭化物を含む黒褐色粘土質シルトである。

主柱穴は 5358SP、5359SP、5374SP が該当し、竪穴の北側に偏って所在する。5358SP は長軸 0.37m、短軸 0.33m、床面からの深さ 0.18m、

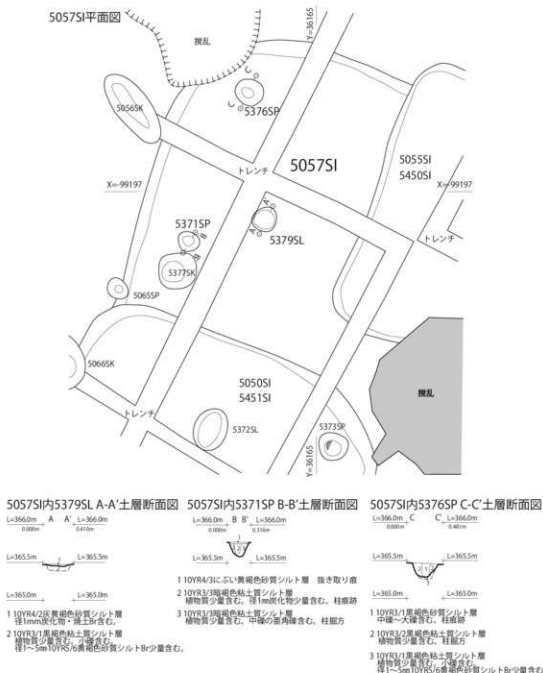
5359SK は長軸 0.33m、短軸 0.31m、深さ 0.29m、5374SP は長軸 0.27m、短軸 0.24m、深さ 0.23m で、いずれも平面形は円形である。

炉跡 5364SL は 5320SI の中央北寄りの床面に構築された地床炉で、長軸 0.83m、短軸 0.67m、深さ 0.14m を測る。埋土に炭化物と焼土ブロックを含む。

出土遺物から竪穴建物跡 5320SI は縄文時代後期初頭に位置づけられる。

(12) 5054SI (第 15 図・遺構図版 19)

21 区南西部の 1916 グリッドで検出された竪穴建物跡である。5321SI と 5055SI などに切られ全形は不明だが、長軸 3.70m、短軸 2.67m の隅丸方形の平面プランを呈していたと思われ、深



第 17 図 5057SI 遺構図 (S=1/50)

さは0.14mを測る。埋土は黒色シルトや黒褐色シルトである。残存状況が不良なため、堅穴建物に伴う内部施設は検出されなかった。時期は縄文時代中期後半から後期初頭に属すと思われる。

(13) 5055SI・5450SI (第16図・遺構図版25)

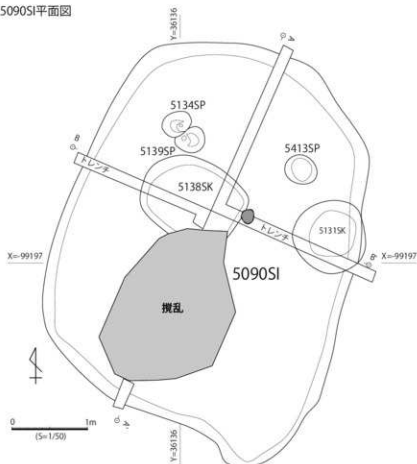
21区南西部の1916と1917グリッドで検出された堅穴建物跡で、南東隅部が5004SIに切られている。2基の堅穴建物跡が重複して存在し、上位の5055SIは長軸5.09m、短軸3.62mの隅丸方形の平面プランと推定され、深さは0.26m

を測る。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。一方、下位の5450SIは長軸5.12m、短軸3.68mの隅丸方形の平面プランと推定され、埋土は黒褐色粘土質シルトである。

主柱穴は北東隅部のみ確認でき、5055SIは5414SP、5450SIは5417SPが該当する。5414SPは長軸0.43m、短軸0.39m、床面からの深さ0.21m、5417SKは長軸0.44m、短軸0.23m以上、深さ0.21mである。

炉跡は中央部の床面で検出されたが、5004SI

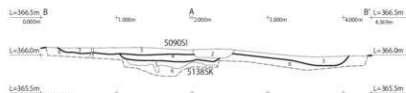
5090SI平面図



5090SI・5138SK A-A'土層断面図



5090SI・5138SK B-B'土層断面図



- 1 植生面
- 2 10VR3/2黒褐色細粒砂質シルト層 中礫の要角礫少量含む。植生面
- 3 10VR2/2黒褐色細粒砂質シルト層 小礫含む。中礫含む。5090SI
- 4 10VR2/1黒褐色細粒砂質シルト層 小礫含む。中礫含む。5138SK
- 5 10VR2/2黒褐色細粒砂質シルト層 粗粒砂～中粒砂含む。小礫含む。にぶい黄褐色細粒砂小ブロック少量含む。植生面
- 6 10VR5～4/4にぶい黄褐色シルト層 粗粒砂～中粒砂多く含む。小礫含む。

第18図 5090SI遺構図 (S=1/50)

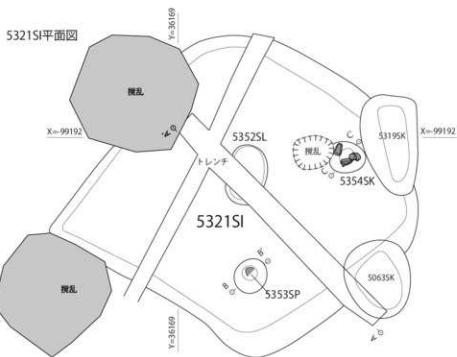
などで破壊され大部分は遺存していない。
5055SIに伴う炉跡は5415SI、5450SIに伴う炉跡は5416SLで、黒褐色シルトが埋積するが炭化物や被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡 5055SI と 5450SI は

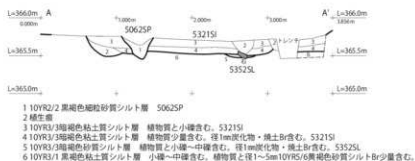
縄文時代中期後半に位置づけられる。

(14) 5057SI (第17図・遺構図版25)

21区南西部の1916グリッドで検出された竪穴建物跡で、5055SIと5050SIなどで切られ全形は不明である。長軸4.03m以上、短軸2.92m



5321SI A-A'土層断面図



5321SI内5353SP B-B'土層断面図



5321SI内5354SK C-C'土層断面図



第 19 図 5321SI 構構図 (S=1/50)

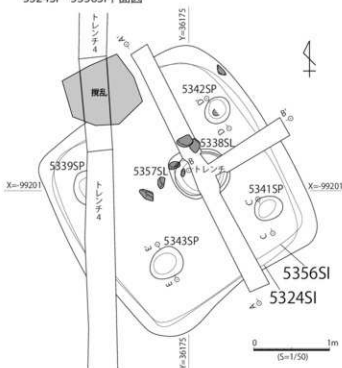
以上の隅丸方形の平面プランで深さは0.22mを測る。

主柱穴は5371SPと5376SPが該当し5057SIの西側の四隅に所在するが、東側の柱穴は不明である。5371SPは長軸0.30m、短軸0.27m、床面からの深さ0.16m、5376SKは長軸0.38m、

短軸0.35m、深さ0.34mで、いずれも平面形は円形を呈する。

炉跡5379SLは5057SIのほぼ中央の床面に構築された地床炉と思われる、長軸0.34m、短軸0.31m、深さ0.05mを測る。炉床付近では炭化物と焼土ブロックを含む黒褐色シルトが堆積する

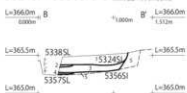
5324SI・5356SI平面図



5324SI・5356SI A-A'土層断面図



5324SI・5356SI B-B'土層断面図



- 1 10YR2/2黒褐色シルト層 黒色シルトブロックを含む。炭化物を極少量含む。5324SI。
- 2 10YR2/2黒褐色シルト層 中線の部角砂を少量含む。炭化物を極少量含む。5338SL。
- 3 10YR2/1黒色シルト層 黒褐色シルトブロックを少量含む。5356SI。
- 4 10YR2/1黒色シルト層 細砂少量含む。炭化物を少量含む。炭土を極少量含む。5357SL。
- 5 10YR2/1黒色シルト層

5324SI内5341SP C-C'土層断面図



- 1 10YR2/2黒褐色シルト層 黒色シルト砂を含む。炭化物を極少量含む。
- 2 粘土層
- 3 10YR2/2黒褐色シルト層 暗褐色シルト砂と細砂少量含む。炭化物を極少量含む。
- 4 10YR2/2黒褐色シルト層 暗褐色シルト砂を少量含む。掘り方。

5324SI内5342SP D-D'土層断面図



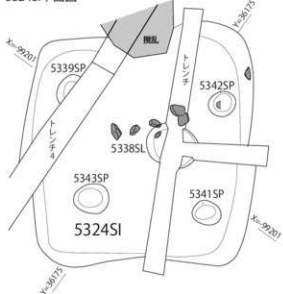
- 1 10YR2/2黒褐色シルト層 黒褐色シルト砂を少量含む。炭化物を極少量含む。
- 2 10YR2/2黒褐色シルト層 暗褐色シルト砂を少量含む。掘り方。
- 3 10YR2/2黒褐色シルト層 暗褐色シルト砂を含む。黒色シルト砂を少量含む。

5324SI内5343SP E-E'土層断面図

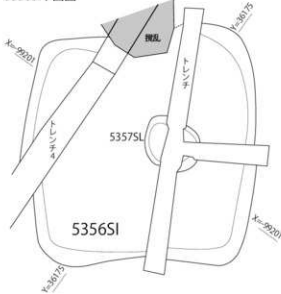


- 1 10YR2/2黒褐色シルト層 黒色シルト砂を含む。炭化物を極少量含む。
- 2 10YR2/2黒褐色シルト層 黒褐色シルト砂を少量含む。
- 3 10YR2/2黒褐色シルト層 黒色シルト砂を含む。細砂少量含む。

5324SI平面図



5356SI平面図



第 20 図 5324SI・5356SI 遺構図 (S=1/50)

が、被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡 5057SI は縄文時代後期～晩期に位置づけられる。

(15) 5090SI (第18図・遺構図版17・23)

21区西端部の1913グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸5.08m、短軸3.91mの歪な楕円形の平面プランで深さは0.26mを測る。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。

主柱穴は5134Pと5139SPと5413SPが候補としてあげられるが、南部の柱穴は確認できなかった。5134SPは長軸0.40m、短軸0.31m、床面からの深さ0.22m、5139SKは長軸0.40m、短軸0.32m、深さ0.21m、5413SPは長軸0.44m、短軸0.38m、深さ0.12mで、いずれも平面形は円形である。

5090SIの中央北西寄りの床面に土坑5138SKがあり、炉跡の痕跡の可能性が考えられる。長軸1.38m、短軸0.76m、深さ0.14mを測るが、炭化物や被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡5090SIは縄文時代後期～晩期に位置づけられる。

(16) 5321SI (第19図・遺構図版19)

21区南西部の1916と1917グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸3.70m、短軸3.68mの歪な隅丸方形の平面プランで深さは0.32mを測る。埋土は炭化物を微量に含む暗褐色粘土質シルトである。

主柱穴は5353SPと5354SKが該当し5321SIの四隅に所在する形となるが、西側の柱穴は遺存しない。5353SPは長軸0.47m、短軸0.42m、床面からの深さ0.14m、5354SKは長軸0.49m、短軸0.42m、深さ0.25mで礎を含む。

炉跡5352SLは5321SIの中央西寄りの床面に構築され、長軸0.78m、短軸0.52m、深さ

0.24mを測る。炉床付近では炭化物と焼土ブロックを含む。

出土遺物から竪穴建物跡5321SIは縄文時代後期に位置づけられる。

(17) 5324SI (第20図・遺構図版26)

21区南部の1917と2017グリッドで検出された竪穴建物跡で、下位に5356SIが存在する。長軸3.16m、短軸3.05mのやや歪な隅丸方形の平面プランで深さは0.31mを測る。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色シルトである。

主柱穴は5339SPと5341SP～5343SPが該当し5324SIの四隅に所在する。5339SPは長軸0.45m以上、短軸0.16m以上、床面からの深さ0.09m、5341SPは長軸0.39m、短軸0.31m、深さ0.26m、5342SPは長軸0.37m、短軸0.33m、深さ0.29m、5343SPは長軸0.47m、短軸0.40m、深さ0.30mで、いずれも平面形は円形を呈し断面で柱痕が観察される。

炉跡5338SLは5324SIの中央東寄りの床面に構築され、長軸0.68m、短軸0.52m、深さ0.06mを測る。炉床付近では炭化物を含む黒褐色シルトが堆積するが、被熱痕は認められない。内部から少量の礎が出土したが床や壁を構築したものとは思われない。

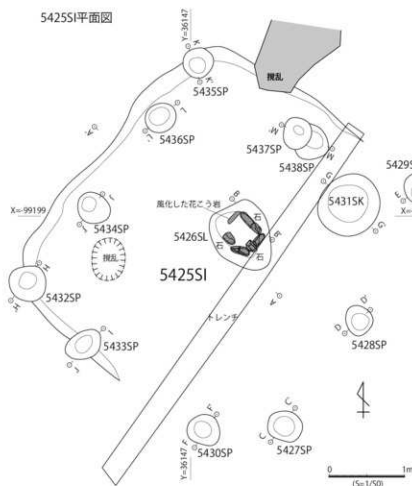
出土遺物から竪穴建物跡5324SIは縄文時代後期中葉に位置づけられる。

(18) 5356SI (第20図・遺構図版26)

21区南部の1917と2017グリッドで5324SIの下位で検出された竪穴建物跡である。長軸3.16m、短軸3.05mのやや歪な隅丸方形の平面プランで深さは0.23mを測る。埋土は黒色シルトである。

主柱穴は確認できなかったが、5321SIの主柱穴と同じ可能性も残る。炉跡5357SLは5338SL

5425SI平面図



5425SI内5426SL B-B'立面図



5425SI内5427SP C-C'土層断面図

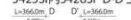


5425SI内5428SP D-D'土層断面図



- 1 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
10YR3/2黒褐色粘土質シルト層
中峰の部角峰少量含む。大峰の部角峰含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大峰の部角峰多く含む。
- 3 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大峰の部角峰多く含む。

5425SI内5428SP D-D'土層断面図



5425SI内5429SP E-E'土層断面図



- 1 10YR4/2灰黒褐色粘土質シルト層
中峰の部角峰少量含む。
- 2 10YR4/2灰黒褐色粘土質シルト層
径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。
- 3 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大峰の部角峰多く含む。
- 4 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大峰の部角峰多く含む。

5425SI内5429SP E-E'土層断面図



5425SI内5429SP E-E'土層断面図



5425SI・5440SI A-A'土層断面図



- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 植物質と径1mm炭化物・焼土Br少量含む。中峰含む。5425SI
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。中峰含む。5425SI
- 3 10YR3/1黒褐色砂質シルト層 径1~3mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。5425SI
- 4 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 中峰含む。径1mm炭化物・焼土Br含む。5426SL部
- 5 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。中峰~大峰含む。5440SI
- 6 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 小峰~中峰含む。径1mm炭化物・焼土Br含む。5444SL
- 7 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 中峰含む。径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。5440SI
- 8 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。大峰の部角峰多く含む。

5425SI内5430SP F-F'土層断面図



5425SI内5430SP F-F'土層断面図



5425SI内5430SP F-F'土層断面図



5425SI内5430SP F-F'土層断面図



5425SI内5430SP F-F'土層断面図



5425SI内5430SP F-F'土層断面図



5425SI内5430SP F-F'土層断面図



5425SI内5430SP F-F'土層断面図



5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425SI内5430SP F-F'土層断面図

5425Si内5434SP J-J'土層断面図

L=366.0m J J' L=366.0m
0.000m 0.500m

L=365.5m L=365.5m

- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層 中線の歪角減少量含む。抜き取り面
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。柱面跡
- 3 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。柱面跡
- 4 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。大線の歪角減少量含む。径1~5mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5425Si内5435SP K-K'土層断面図

L=366.0m K K' L=366.0m
0.000m 0.500m

L=365.5m L=365.5m

- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層 中線の歪角減少量含む。
- 2 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層 径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。
- 3 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。大線の歪角減少量含む。径1~5mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5425Si内5436SP L-L'土層断面図

L=366.0m L L' L=366.0m
0.000m 0.575m

L=365.5m L=365.5m

- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層 中線の歪角減少量含む。
- 2 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層 径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。
- 3 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。大線の歪角減少量含む。径1~5mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5425Si内5437SP・5438SP M-M'土層断面図

L=366.0m M M' L=366.0m
0.000m 0.742m

L=365.5m L=365.5m

- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層 中線の歪角減少量含む。抜き取り面。5437SP
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。柱面跡。5437SP
- 3 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。柱面跡。5437SP
- 4 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層 径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。5438SP
- 5 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 柱面跡。5438SP
- 6 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。柱面跡。5438SP
- 7 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。大線の歪角減少量含む。径1~5mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5440Si内5441SP N-N'土層断面図

L=366.0m N N' L=366.0m
0.000m 0.473m

L=365.5m L=365.5m

- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。大線の歪角減少量含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。大線の歪角減少量含む。径1~5mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5440Si内5442SP O-O'土層断面図

L=366.0m O O' L=366.0m
0.000m 0.376m

L=365.5m L=365.5m

- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。大線の歪角減少量含む。径1~5mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5440Si内5443SP P-P'土層断面図

L=366.0m P P' L=366.0m
0.000m 0.490m

L=365.5m L=365.5m

- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 中線含む。径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。大線の歪角減少量含む。径1~5mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5440Si内5445SP Q-Q'土層断面図

L=366.0m Q Q' L=366.0m
0.000m 0.466m

L=365.5m L=365.5m

- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 中線少量含む。径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。大線の歪角減少量含む。径1~5mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5440Si内5446SP R-R'土層断面図

L=366.0m R R' L=366.0m
0.000m 0.575m

L=365.5m L=365.5m

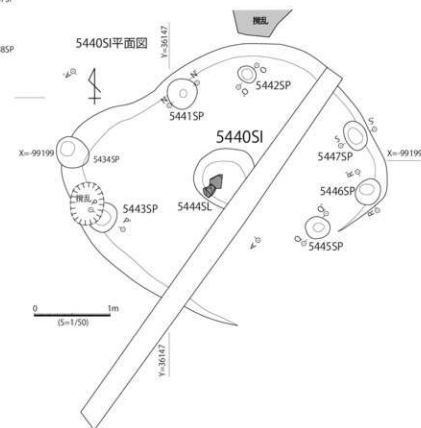
- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 中線少量含む。径1mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。大線の歪角減少量含む。径1~5mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5440Si内5447SP S-S'土層断面図

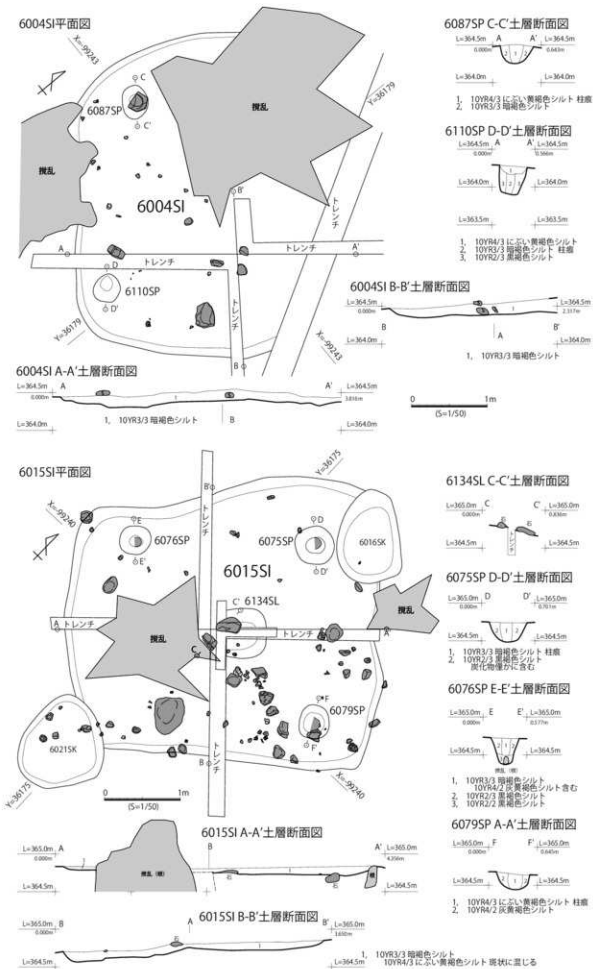
L=366.0m S S' L=366.0m
0.000m 0.490m

L=365.5m L=365.5m

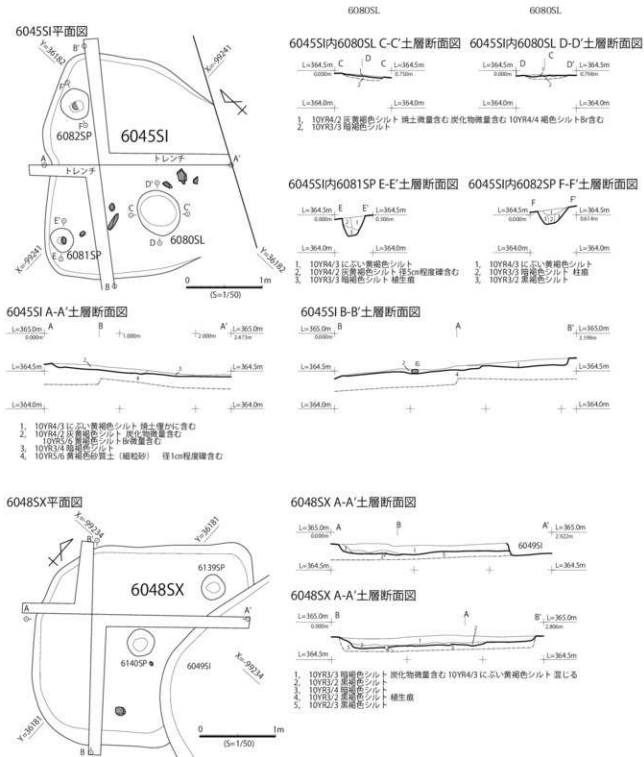
- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 中線少量含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。大線の歪角減少量含む。径1~5mm 10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。



第 22 図 5425Si・5440Si 遺構図 (S=1/50)



第 23 図 6004SI・6015SI 遺構図 (S=1/50)



第 24 図 6045SI・6048SX 遺構図 (S=1/50)

の下位で検出された地床炉で、長軸 0.73m、短軸 0.66m、深さ 0.06m を測る。炉床付近では炭化物和焼土を含む黒色シルトが堆積する。

竪穴建物跡 5356SI は縄文時代後期中葉以前に位置づけられる。

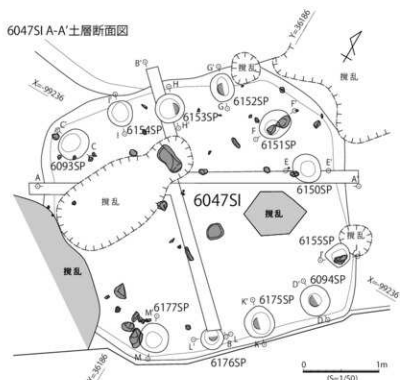
(19) 5425SI (第 21 図～第 22 図・遺構図版 24)

21 区南西部の 1914 と 2014 グリッドで検出

された竪穴建物跡で、東半部は斜面となつて削られて残存していない。4.51m × 2.61m 以上の隅丸方形の平面プランと推定され、深さは 0.15m を測る。埋土は炭化物和焼土を微量に含む黒褐色粘土質シルトである。

柱穴は 5427SP ～ 5438SP が該当すると思われ、5425SI の外周におおよそ所在する。

6047SI A-A'土層断面図



6047SI内6093SP C-C'土層断面図



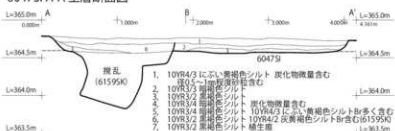
6047SI内6094SP D-D'土層断面図



6047SI内6150SP E-E'土層断面図



6047SI A-A'土層断面図



6047SI内6151SP F-F'土層断面図



6047SI B-B'土層断面図



6047SI内6152SP G-G'土層断面図



6047SI内6153SP H-H'土層断面図



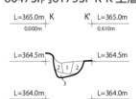
6047SI内6154SP I-I'土層断面図



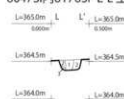
6047SI内6155SP J-J'土層断面図



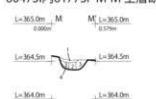
6047SI内6175SP K-K'土層断面図



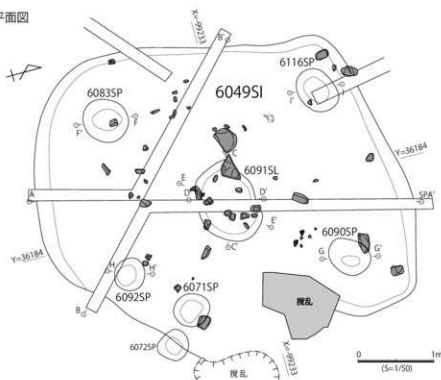
6047SI内6176SP L-L'土層断面図



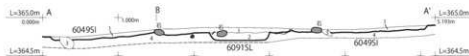
6047SI内6177SP M-M'土層断面図



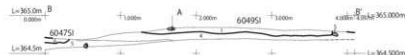
6049SI平面図



6049SI A-A'土層断面図



6049SI B-B'土層断面図

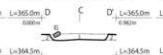


1. 10YR3/2黒褐色シルト 粘性ややあり 炭化物微量含む
2. 10YR3/4暗褐色シルト 粘性ややあり 10YR3/2黒褐色シルト混じる 炭化物微量含む
3. 10YR3/3黒褐色シルト 粘性カラシ
4. 10YR2/1黒褐色シルト 粘性ややあり
5. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性あり
6. 10YR4/2灰黄褐色シルト 炭化物微量含む 10YR4/3にふい黄褐色シルト多く混じる(6047SI)

6091SL C-C'土層断面図



6091SL D-D'土層断面図



6091SL E-E'土層断面図



1. 10YR3/4暗褐色シルト
2. 10YR3/2黒褐色シルト 粘性あり

6083SP F-F'土層断面図



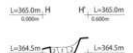
1. 10YR3/3暗褐色シルト 炭化物微量含む
2. 10YR2/2黒褐色シルト 柱状
3. 10YR2/1黒褐色シルト

6090SP G-G'土層断面図



1. 10YR3/3暗褐色シルト 炭化物微量含む
2. 10YR2/2黒褐色シルト
3. 10YR4/3にふい黄褐色シルトBr含む 柱状
4. 10YR2/2黒褐色シルト 下位に10YR3/6黄褐色シルトBr含む

6092SP H-H'土層断面図



1. 10YR2/3黒褐色シルト 柱状
2. 10YR2/2黒褐色シルト
3. 10YR2/1黒褐色シルト 2より明るい
4. 10YR3/4暗褐色シルト 粘性あり
5. 10YR5/4黄褐色シルト 混じる

6116SP I-I'土層断面図



1. 10YR2/3黒褐色シルト
2. 10YR2/2黒褐色シルト Br含む
3. 10YR2/1黒褐色シルト 粘性あり

第26図 6049SI 遺構図 (S=1/50)

5431SKを除くSPは、長軸が0.41m～0.51m、短軸が0.35m～0.49m、深さが0.11m～0.33mの範囲に分布する規模を持ち、いずれも平面形は円形を呈している。

炉跡5426SLは5425SIのほぼ中央の床面に構築され、長軸0.98m、短軸0.80m、深さ0.23mを測る。板状の石材を6石用いて方形に組み石囲いが作っている。北東辺に最も長い石材を用い、



北西辺には風化した花崗岩が使用されていた。炉床付近では炭化物や焼土を含む黒褐色粘土質シルトが堆積する。

出土遺物から竪穴建物跡 5425SI は縄文時代晩期前半に位置づけられる。

(20) 5440SI (第22図・構構図版24)

21区南西部の1914と2014グリッドで検出された竪穴建物跡で、南端部が残存していない。長軸3.87m、短軸2.96m以上の歪な隅丸長方形の平面プランで深さは0.15mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトである。

主柱穴は5441SP～5443SPと5445SP～5447SPが該当し5440SIの外周部に所在する。1241SPは長軸が0.25m～0.40m、短軸が0.21m～0.30m、深さが0.15m～0.31mの範囲に分布し、いずれも平面形はおおよそ円形である。

炉跡5444SLは5440SIのほぼ中央にあり、長軸0.82m、短軸0.63m、深さ0.13mを測る。内部に炭化物と焼土ブロックを含む黒褐色シルトが堆積する。

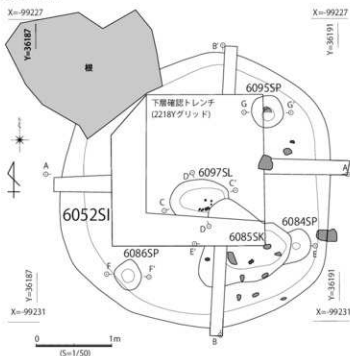
出土遺物から竪穴建物跡5440SIは縄文時代後期末に位置づけられる。

(21) 6004SI (第23図・構構図版39)

調査区南端に位置する22B区の南端部2317グリッドで検出された竪穴建物跡で、北東部が遺存していない。長軸4.32m、短軸3.19m以上の歪な隅丸長方形の平面プランで深さは0.14mを測る。埋土は暗褐色シルトである。

主柱穴は6087SPと6110SPが該当し東側の柱穴は検出できなかった。6087SPは長軸0.44m、短軸0.33m、床面からの深さ0.28m、6110SPは長軸0.37m、短軸0.35m、深さ0.43mである。炉跡は樹木根による攪乱で不明。

6052SI平面図



6052SI内6097SL C-C'土層断面図

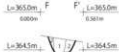


6052SI内6097SL D-D'土層断面図



- 10YR3/3 暗褐色シルト 炭化物微量含む 上位に遺物含む
- 10YR3/2 黒褐色シルト
- 10YR3/4 黒褐色シルト 焼土微量含む 炭化物微量含む

6052SI内6086SK F-F'土層断面図



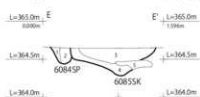
- 10YR3/3 暗褐色シルト
- 10YR5/4 に近い黄褐色シルト 遺る 柱痕
- 10YR2/3 黒褐色シルト 焼土微量含む 粘性あり

6052SI内6095SP G-G'土層断面図



- 10YR3/3 暗褐色シルト
- 10YR2/3 黒褐色シルト

6052SI内6084SP・6085SK E-E'土層断面図



- 10YR3/3 暗褐色シルト (6084SP)
- 10YR2/3 黒褐色シルト (6084SP)
- 10YR3/4 暗褐色シルト 焼土微量含む 炭化物微量含む (6085SK)
- 10YR3/2 黒褐色シルト (6085SK)
- 10YR2/3 黒褐色シルト 柱生痕

第28図 6052SI 遺構図 (S=1/50)

出土遺物から竪穴建物跡 6004SI は縄文時代中期前半に位置づけられる。

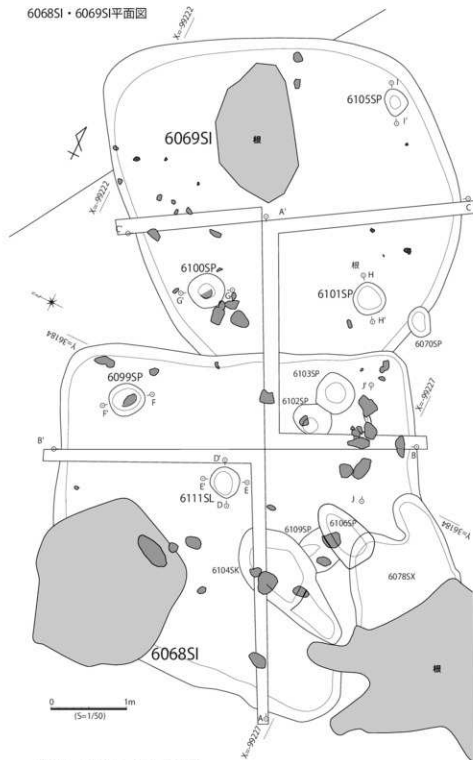
(22) 6015SI (第23図・遺構図版39)

22B区南部の2316と2317グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸4.30m、短軸3.87mのやや歪な隅丸長方形の平面プランで、一部の隅角部が土坑により破壊されているが、深さは0.10mを測る。埋土は暗褐色シルトで多くの礫を含む。

主柱穴は6075SP、6076SPと6079SPが該

当し6015SIの四隅に所在する。6075SPは長軸0.51m、短軸0.50m、床面からの深さ0.27m、6076SPは長軸0.40m、短軸0.38m、深さ0.36m、6079SPは長軸0.45m、短軸0.39m、深さ0.24mで、いずれも平面形は円形を呈する。が跡6134SLは6015SIの中央南寄りの床面に構築され、長軸0.66m、短軸0.53m以上、深さ0.14mを測る。炭化物や被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡 6015SI は縄文時代中期前半～後半に位置づけられる。



6068SI内6111SL D-D'土層断面図



6068SI内6111SL E-E'土層断面図



1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘土・腐葉石・炭化物等に含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 基盤層

6068SI内6099SP F-F'土層断面図



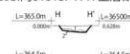
1. 10YR3/2 黒褐色シルト 上部に12.2cm程度の角礫含む 柱状
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 10YR4/2 灰黄褐色シルトに置ける

6069SI内6100SP G-G'土層断面図



1. 10YR3/2 黒褐色シルト 柱状
2. 10YR2/3 暗褐色シルト
3. 10YR3/3 暗褐色シルト
4. 10YR2/2 黒褐色シルト 1より強い 基盤層

6069SI内6101SP H-H'土層断面図



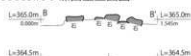
1. 10YR3/2 黒褐色シルト
2. 10YR2/2 黒褐色シルト

6069SI内6105SP I-I'土層断面図



1. 10YR3/3 暗褐色シルト
2. 10YR2/3 暗褐色シルト
3. 10YR2/2 黒褐色シルト

6068SI J-J'礫出土断面図



6068SI・6069SI A-A'土層断面図



6068SI B-B'土層断面図



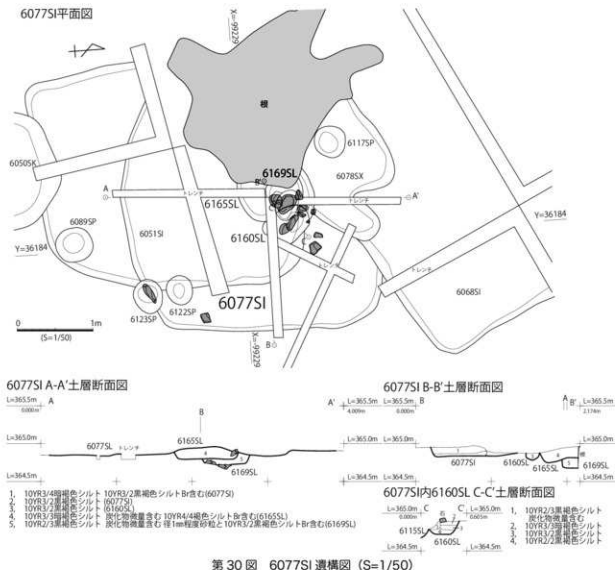
6069SI C-C'土層断面図



1. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性ややあり
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり (6068SI)
3. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性ややあり (6069SI)
4. 10YR3/2 暗褐色シルト
5. 10YR2/2 黒褐色シルト
6. 10YR3/3 暗褐色シルト

1. 10YR3/3 暗褐色シルト
2. 10YR3/2 暗褐色シルト 粘性ややあり
3. 10YR2/2 黒褐色シルト

第29図 6068SI・6069SI 遺構図 (S=1/50)



第30図 6077SI 遺構図 (S=1/50)

(23) 6045SI (第24図・遺構図版40)

22B区南部の2318と2418グリッドで検出された竪穴建物跡で、南東部が調査区外に広がる。長軸2.93m、短軸2.08m以上の歪な隅丸方形の平面プランと思われ、深さは0.1mを測る。埋土は炭化物を微量に含むにぶい黄褐色から暗褐色シルトである。

主柱穴は6081SPと6082SPが該当し南東側の柱穴は不目である。6081SPは長軸0.31m、短軸0.29m、床面からの深さ0.28m、6082SPは長軸0.40m、短軸0.36m、深さ0.20mで、平面形は円形を呈する。

炉跡6080SLは6045SIの南西寄りの床面に構築され、長軸0.60m、短軸0.55m、深さ0.09mを測る。炉床付近では微量の焼土と炭化物を含む

灰黄褐色シルトが堆積する。

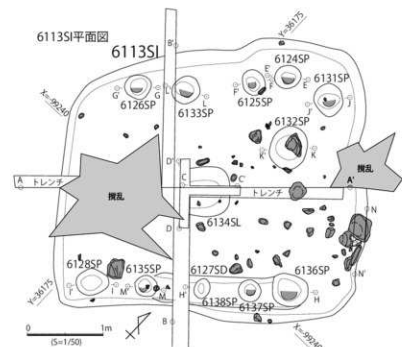
出土遺物から竪穴建物跡6045SIは縄文時代中期に位置づけられる。

(24) 6048SX (第24図・遺構図版40)

22B区中央部南東寄りの2317と2318グリッドで竪穴建物跡として検出された遺構で、東部が6049SIで切られ遺存していない。長軸2.24m以上、短軸2.63mの隅丸方形の平面プランで深さは0.12mを測るが、確実な付属施設は検出されず、竪穴建物跡とは認定できない。埋土は暗褐色シルトである。なお、柱穴の候補としては6139SPと6140SPがある。

出土遺物から竪穴建物跡6048SXは縄文時代中期前半に位置づけられる。

(25) 6047SI (第25図・遺構図版53)



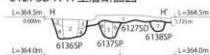
6113SI A-A'土層断面図



6113SI B-B'土層断面図



6127SD H-H'土層断面図



1. 10YR3/3 暗褐色シルト 炭化物微量含む(6127SD)
2. 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR4/2 灰黄色シルトに混じる 柱痕(6136SP)
3. 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR4/2 灰黄色シルトに混じる 柱痕(6136SP)
4. 10YR2/3 黒褐色シルト 炭化物微量含む(6137SP)
5. 10YR3/1 黒褐色シルト 柱痕(6137SP)
6. 10YR3/2 黒褐色シルト 炭化物微量含む(6137SP)
7. 10YR3/1 黒褐色シルト 柱痕(6137SP)

6132SP K-K'土層断面図



1. 10YR3/2 黒褐色シルト 1/2 30cm程度角礫含む
2. 10YR2/2 黒褐色シルト

6133SP L-L'土層断面図



1. 10YR3/2 黒褐色シルト 炭化物微量に含む 柱痕
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 柱痕
3. 10YR2/3 黒褐色シルト

6128SP I-I'土層断面図



1. 10YR3/2 黒褐色シルト
2. 10YR2/2 黒褐色シルト

6134SL C-C'土層断面図



6134SL D-D'土層断面図



1. 10YR3/4 暗褐色シルト 炭化物微量に含む
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 炭化物微量含む
3. 10YR4/4 暗褐色シルト 炭化物微量含む
4. 10YR2/3 黒褐色シルト
5. 10YR4/2 灰黄色シルト

6124SP E-E'土層断面図



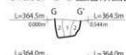
1. 10YR3/1 黒褐色シルト 柱痕
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 柱痕
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトに混じる

6125SP F-F'土層断面図



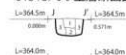
1. 10YR3/2 黒褐色シルト 柱痕
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 柱痕
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトに混じる

6126SP G-G'土層断面図



1. 10YR3/1 黒褐色シルト 柱痕
2. 10YR2/3 黒褐色シルト

6131SP J-J'土層断面図



1. 10YR3/2 黒褐色シルト 柱痕
2. 10YR3/2 黒褐色シルト
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトに混じる 柱痕

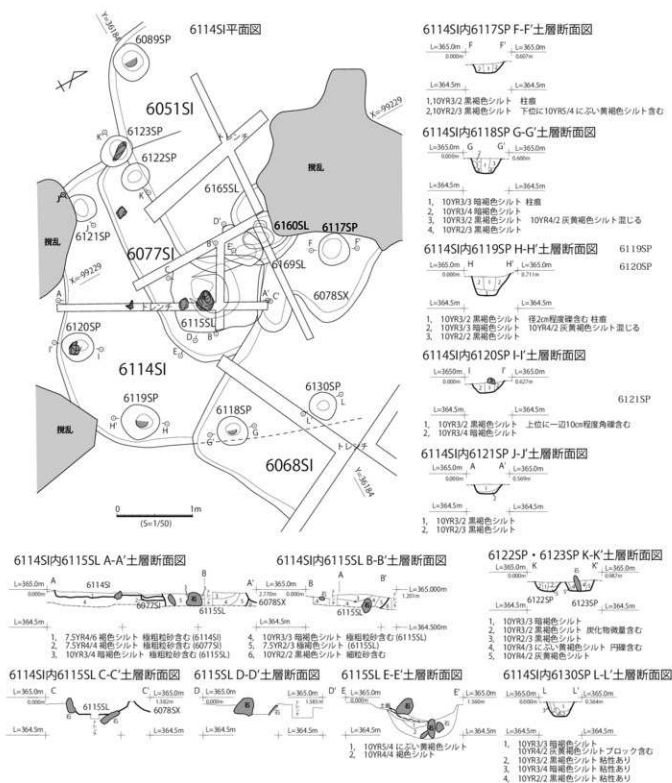
6113SI N-N'石列立面図



第31図 6113SI遺構図 (S=1/50, 1/20)

22B区南東部の2318グリッドで、調査時点では2面遺構(全体の3面)として検出された堅穴建物跡である。長軸4.08m、短軸3.64mの

隅丸方形の平面プランで深さは0.15mを測る。埋土は上位から炭化物を微量に含むにぶい黄褐色シルト、暗褐色シルト、黒褐色シルトの順で堆積



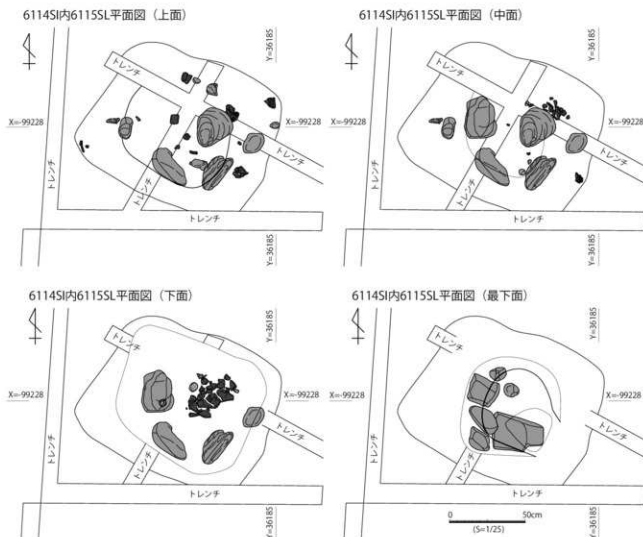
第32図 6114SI遺構図(1) (S=1/50)

する。

柱穴は6150SP～6155SP、6093SP、6094SP、6175SP、6177SPが該当し6047SIの外周部に並んで所在する。柱穴は長軸が0.30m～0.44m、短軸が0.29m～0.38m、深さが

0.11m～0.27mの範囲で分布する規模で、いずれも平面形は円形を呈する。一方、炉跡は不明である。

出土遺物から竪穴建物跡6047SIは縄文時代中期後半に位置づけられる。



第33図 6114SI遺構図(2) (S=1/50.1/20)

(26) 6049SI (第26図・遺構図版40)

22B区中央部南東寄りの2318グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸4.99m、短軸3.34m以上の隅丸五角形状の平面プランで深さは0.09mを測る。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色シルトである。

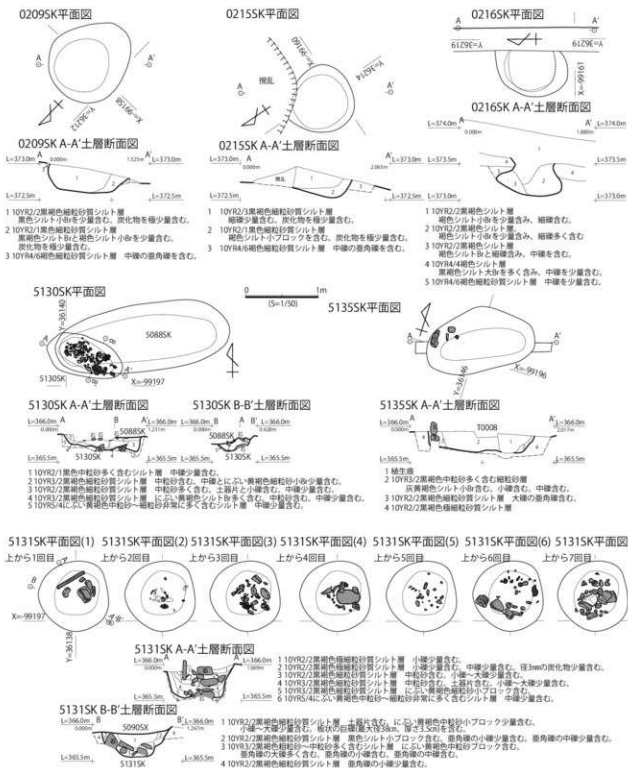
主柱穴は6083SP、6090SP、6092SPと6116SPが該当し6049SIの概ね四隅に所在している。6083SPは長軸0.61m、短軸0.55m、床面からの深さ0.22m、6090SPは長軸0.57m、短軸0.45m、深さ0.38m、6092SPは長軸0.44m、短軸0.42m、深さ0.12m、6116SPは長軸0.62m、短軸0.47m、深さ0.20mで、いずれも平面形は歪な円形である。

が跡6091SLは6049SIのほぼ中央の床面に構築され、長軸1.06m、短軸0.78m、深さ0.09mを測る。炉床付近では炭化物を含む黒褐色シルトが堆積するが、被熱痕は認められない。炉外周部で礫が残存する部分もあるが、床や壁を構築したものとは思われない。

出土遺物から竪穴建物跡6049SIは縄文時代後期中葉に位置づけられる。

(27) 6051SI (第27図・遺構図版40)

22B区中央部東寄りの2218と2318グリッドで検出された竪穴建物跡で北西部が樹木根により遺存していない。長軸3.26m、短軸3.12mの歪な隅丸方形の平面プランで深さは0.09mを測る。埋土は黒褐色シルトである。



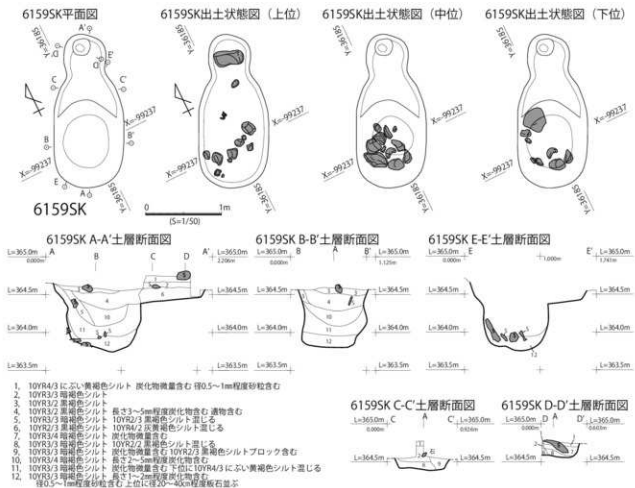
第34図 0209SK・0215SK・0216SK・5130SK・5131SK・5135SK 遺構図 (S=1/50)

主柱穴は6088SP、6089SPと6098SPが該当すると思われるが、6051SIの四隅に位置するとは言えない。6088SPは長軸0.41m、短軸0.39m、床面からの深さ0.36m、6089SPは長軸0.49m、短軸0.45m、深さ0.28m、6098SPは長軸0.94m、短軸0.57m以上、深さ0.07m

である。

炉跡6112SLは6051SIのほぼ中央の床面に構築され、長軸0.52m以上、短軸0.38m以上、深さ0.04mを測る。礫は存在するものの炭化物や焼土を含まず、炉跡か否かは確定できない。

出土遺物から堅穴建物跡6051SIは縄文時代中



第35図 6159SK 遺構図 (S=1/50)

期後半に位置づけられる。

(28) 6052SI (第28図・遺構図版40)

22B区東端部の2217から2318グリッドなどで検出された竪穴建物跡である。長軸3.64m、短軸3.56mの歪な隅丸六角形状の平面プランで深さは0.13mを測る。埋土は黒褐色シルトまたは暗褐色シルトである。

主柱穴は6084SP、6086SP、6095SPが該当すると思われ、6084SPは長軸0.43m、短軸0.26m以上、床面からの深さ0.28m、6086SPは長軸0.41m、短軸0.36m、深さ0.22m、6095SPは長軸と短軸が0.42m、深さ0.27mで、いずれも平面形は円形である。

炉跡6097SLは6952SIのほぼ中央の床面に構築され、長軸0.78m、短軸0.52m、深さ0.07mを測る。炉床付近では炭化物と焼土を含む黒褐色シルトが堆積する。

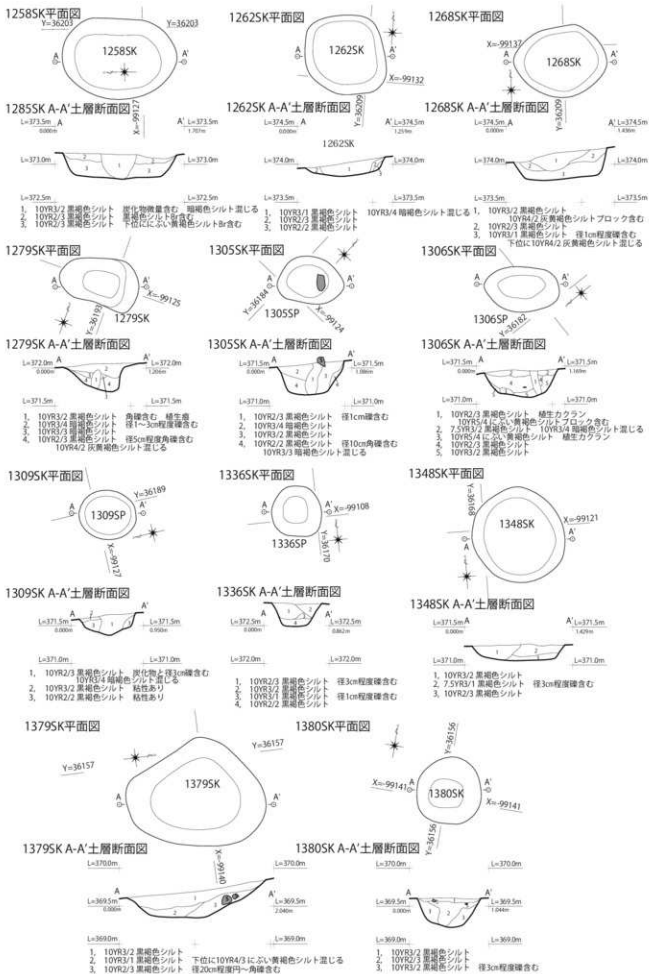
出土遺物から竪穴建物跡6052SIは縄文時代中期以降に位置づけられる。

(29) 6068SI (第29図・遺構図版40)

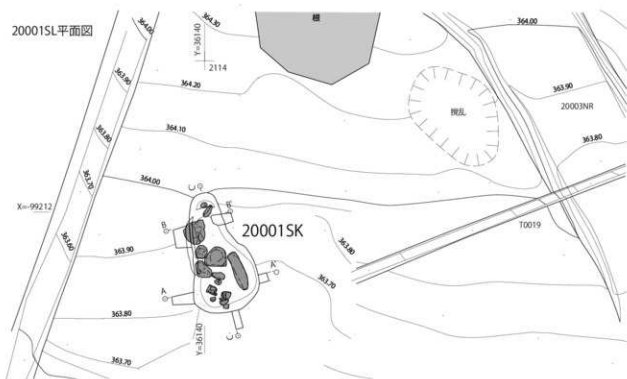
22B区北東部の2218グリッドで検出された竪穴建物跡で南西部の一部が樹木痕により遺存していない。長軸4.75m、短軸4.70mの隅丸方形の平面プランと思われるが、西部で形状が乱れている。深さは0.16mを測り、6069SIを切る。埋土は黒褐色粘土質シルトである。

主柱穴は不明瞭で確実なものは6099SPのみである。長軸0.47m、短軸0.42m、床面からの深さ0.15mで、平面形は円形を呈する。炉跡6111SLは6068SIの中央北寄りの床面に構築され、長軸0.41m、短軸0.39m、深さ0.13mを測り、わずかに炭化物を含むが、被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡6068SIは縄文時代中期以降に位置づけられる。



第 36 図 縄文時代の土坑遺構図 (S=1/50)



第37图 20001SK 构造图 (S=1/50)

(30) 6069SI (第 29 図・遺構図版 40)

22B区北東端部の2218グリッドで検出された堅穴建物跡で南西部が6068SIに切られ遺存していない。長軸4.32m、短軸4.17m以上の歪な隅丸方形の平面プランで深さは0.08mを測る。埋土は上位が暗褐色シルト、下位が黒褐色シルトである。

主柱穴は6100SP、6101SPおよび6105SPが該当し概ね6069SIの四隅の位置にある。6100SPは長軸0.49m、短軸0.46m、床面からの深さ0.39m、6101SPは長軸0.43m、短軸0.42m、深さ0.09m、6105SPは長軸0.34m、短軸0.27m、深さ0.25mで、いずれも平面形は

円形を呈する。炉跡は確認できなかった。

出土遺物から竪穴建物跡 6069SI は縄文時代中期以降に位置づけられる。

(31) 6077SI (第30図・遺構図版40)

22B区中央部東寄りの2218と2318グリッドで検出された堅穴建物跡で6051SIと6068SIに切られ西部の遺存状況は不良である。長軸2.90m以上、短軸0.64m以上の歪な隅丸方形の平面プランと思われ、深さは0.06mを測る。埋土は上位が暗褐色シルト、下位が黒褐色シルトである。

支柱穴は不明瞭で特定し難い。炉跡は 6160SL
と 6165SL と 6169SL が重なって検出され、一

部は礫を伴い、炉床付近では炭化物を含む黒褐色シルトが堆積する。

出土遺物から竪穴建物跡 6077SI は縄文時代中期以降に位置づけられる。

(32) 6113SI (第 31 図・遺構図版 39)

22B 区南部の 2317 と 2417 グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸 4.47m、短軸 3.45m の歪な隅丸長方形の平面プランで深さは 0.15m を測る。埋土は上位が暗褐色シルト、下位が炭化物を微量に含む黒褐色シルトである。

柱穴は 6124SP ～ 6138SP が該当し 6113SI の外周部に分布する。長軸は 0.34m ～ 0.57m、短軸は 0.29m ～ 0.48m、深さは 0.06m ～ 0.48m に分布し、概ね平面形は円形となる。

炉跡 6134SL は 6113SI の中央南西寄りの床面に構築され、長軸 0.66m、短軸 0.53m、深さ 0.14m を測る。炉床付近では炭化物を含む黒褐色シルトが堆積するが、被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡 6113SI は縄文時代中期前半～後半に位置づけられる。

(33) 6114SI (第 32 図～第 33 図・遺構図版 40)

22B 区中央部東寄りの 2218 と 2318 グリッドで検出された竪穴建物跡で、6051Si と 6068SI と 6077SI に切られて大部分が遺存していない。長軸 3.70m、短軸 1.15m 以上の隅丸方形の平面プランと思われ、深さは 0.04m を測る。埋土は褐色シルトである。

柱穴は 6118SP ～ 6122SP と 6130SP があり、6114SI の外周部に所在する。長軸は 0.36m ～ 0.51m、短軸は 0.29m ～ 0.46m、深さは 0.12m ～ 0.31m に分布する平面形は円形となる。

6114SI の中央の位置と思われる場所に炉跡 6115SL があり、長軸 1.20m、短軸 1.00m の長

方形で、深さ 0.49m を測る。壁面や炉床付近に礫が据えられた部分が残存しており、本来は石囲い炉であった可能性がある。

出土遺物から竪穴建物跡 6114SI は縄文時代後期中葉に位置づけられる。

2 土坑

(1) 0209SK (第 34 図・遺構図版 16)

21 区 1521 グリッドで検出された土坑である。長軸 1.21m、短軸 1.06m の歪な円形を呈し、深さは 0.41m を測る。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色シルトである。時期は縄文時代早期と推定される。

(2) 0215SK (第 34 図・遺構図版 16)

21 区 1521 と 1621 グリッドで検出された土坑で 0209SK の南西部に所在する。長軸 0.97m、短軸 0.90m のほぼ円形を呈しており、深さは 0.41m を測る。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色シルトである。時期は縄文時代早期と推定される。

(3) 0216SK (第 34 図・遺構図版 16)

21 区 1521 と 1621 グリッドで検出された袋状土坑で、半分は調査区外に広がる。長軸 0.97m、短軸 0.63m 以上のほぼ円形を呈し、深さは 0.52m を測る。埋土は褐色シルトで下半は袋状に挟れている。時期は縄文時代早期と推定される。

(4) 5130SK (第 34 図・遺構図版 18)

21 区 1913 と 1914 グリッドで検出された土坑である。長軸 1.08m、短軸 0.56m の楕円形を呈し、深さは 0.28m を測る。埋土は礫を多量に含む黒褐色シルトで、時期は縄文時代後期後葉と推定される。

(5) 5131SK (第 34 図・遺構図版 18)

21区 1913 グリッドで検出された土坑である。長軸 0.99m、短軸 0.98m の円形で深さは 0.5m を測る。埋土は炭化物を含む黒褐色砂質シルトで、礫を厚く多量に含む。時期は縄文時代晩期前半と推定される。

(6) 5135SK (第 34 図・遺構図版 18)

21区 1914 グリッドで検出された土坑である。長軸 1.50m、短軸 0.87m の歪な楕円形を呈し、深さは 0.32m を測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は縄文時代後期後葉と推定される。

(7) 6159SK (第 35 図・遺構図版 40)

22B区 2318 グリッドで検出された土坑である。長軸 2.01m、短軸 0.92m の瓢箪形を呈しており、南西半部が平面円形状に深くなっている。円形土坑部の深さは 0.75m で横断面は箱堀状となるが、北東部は深さが約 10cm と浅い。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトなどで、南半部の土坑には礫が多量に含まれていた。時期は縄文時代後期中葉と推定される。

(8) 1258SK (第 36 図・遺構図版 49)

22A区 1220 グリッドで検出された土坑である。長軸 1.52m、短軸 1.07m の楕円形を呈し、深さは 0.35m を測る。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(9) 1262SK (第 36 図・遺構図版 50)

22A区 1320 グリッドで検出された土坑である。長軸 1.05m、短軸 1.05m の隅丸方形を呈し、深さは 0.18m を測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(10) 1268SK (第 36 図・遺構図版 50)

22A区 1320 グリッドで検出された土坑である。長軸 1.24m、短軸 0.95m の楕円形を呈し、深さは 0.37m を測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(11) 1279SK (第 36 図・遺構図版 49)

22A区 1219 グリッドで検出された土坑である。長軸 1.06m、短軸 0.58m の楕円形を呈し、深さは 0.37m を測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(12) 1305SK (第 36 図・遺構図版 48)

22A区 1218 グリッドで検出された土坑である。長軸 0.89m、短軸 0.62m の楕円形を呈し、深さは 0.43m を測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(13) 1306SK (第 36 図・遺構図版 48)

22A区 1218 グリッドで検出された土坑である。長軸 0.98m、短軸 0.60m の楕円形を呈し、深さは 0.37m を測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(14) 1309SK (第 36 図・遺構図版 49)

22A区 1218 グリッドで検出された土坑である。長軸 0.76m、短軸 0.64m のほぼ円形を呈し、深さは 0.30m を測る。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトで、時期は縄文時代早期後半と推定される。

(15) 1336SK (第 36 図・遺構図版 42)

22A区 1016 グリッドで検出された土坑である。長軸 0.66m、短軸 0.66m の円形を呈し、深さは 0.31m を測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(16) 1348SK (第 36 図・遺構図版 42)

22A区 1216 グリッドで検出された土坑である。長軸 1.27m、短軸 1.23m の円形を呈し、深さは 0.21m を測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(17) 1379SK (第 36 図・遺構図版 47)

22A区 1315 と 1415 グリッドで検出された土坑である。長軸 1.86m、短軸 1.44m の歪な円形を呈し、深さは 0.35m を測る。埋土は黒褐色

シルトで、時期は縄文時代中期後半と推定される。

(18) 1380SK (第36図・遺構図版47)

22A区1415グリッドで検出された土坑である。長軸0.88m、短軸0.85mの円形を呈し、深さは0.39mを測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(19) 20001SK (第37図・遺構図版38)

第3節 古代から江戸時代の遺構

古代から江戸時代の遺構としては調査区全域で水田関連遺構と柱穴列3条、集石遺構2基などがある。

1 水田関連遺構 (第38図～第40図・遺構図版1～33)

水田関連遺構が検出されたのは、調査区西半分から南側、さらには南東部分にかけてである。水田関連遺構は、Ⅱ層(灰黄褐色から黒色粘土等)内で展開しており、Ⅲ層(にぶい黄褐色から黒色粘土等)直上では概ね擬似畦畔を検出することとなった。水田関連遺構は、畦畔(土手状)および溝と、畦畔による区画内に形成された作土で構成されている。畦畔に囲われた区画は、一辺4mほどを主体とする小区画の概略形状を呈している。遺構が展開する区域は緩やかに傾斜していることから、水田を造成するには、等高線に沿う形で小さい区画を小刻みな段差を持って構築することが、最も効率的であったと推測される。導水路と考えられる溝(1006SDと0145SD)は調査区西部北端から始まり、流路の両肩自体も畦畔として利用されていたとみられる。0145SD内には、水流を調整する施設であった可能性がある0144SKなども確認された。

水田関連遺構は部分的な補修・改変が継続して行われており、畦畔部分の土層断面をみると、複

21区2113と2114グリッド2面で当初は煙道付炉穴の可能性を考慮して検出された土坑である。長軸2.21m、短軸0.89mの楕円形を呈し、深さは0.52mを測る。埋土は炭化物を含む暗褐色から黒褐色砂質シルトで、礫を多量に含む。時期は縄文時代中期後葉以前と推定される。

数回にわたる造成が確認できる(第40図)。畦畔の堆積層から、山茶碗などの遺物が出土し、関連する土坑5140SKから南伊勢系土師器鍋が確認されており、水田関連遺構の時期は鎌倉時代を前後とする時期の可能性が高い。また、東半部では、これらの水田と重複する近世の水田跡(5282SXなど)が存在しているほか、灰陶器が多く出土していることから、水田は長期間にわたって機能していた可能性も考えられる。

(1) 0145SD・1006SD (第39図・遺構図版37)

0145SDは21区で検出された溝で北から南へ流下する。検出された長さは40.3mにおよび、幅は1.5m、深さは0.35mを測る。一方、北側の1006SDは21区で検出された溝で北から南へ流下する。検出された長さは43.4mにおよび、幅は1.5m、深さは0.35mを測る。平面形は地形に沿って緩やかに湾曲して蛇行し途中で溝は不明瞭となっている。

(2) 0144SK (第39図・遺構図版12)

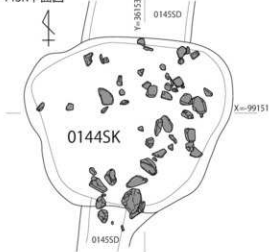
21区1515グリッドで検出された土坑である。長軸2.79m、短軸2.51mの歪な形状で、深さは0.19mを測る。0145SDの途中で設置され多量の礫を伴っていることから水量を調節する施設であった可能性が考えられる。

0 10m
(S=1/500)

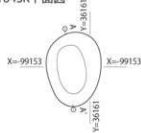


第 38 図 水田関連遺構図 (1) (S=1/500)

0144SK平面図



0164SK平面図

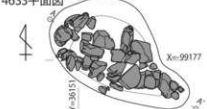


0164SK A-A'土層断面図



- 1 10YR3/1黒褐色粘土質シルトと 10YR3/2灰褐色粘土質シルトの混層
小礫含む。 中礫の角礫少量含む。
2 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。

0146SS平面図



0146SS A-A'土層断面図

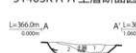


- 1 10YR4/1 褐灰色砂質シルト層 大礫～巨礫の角礫多く含む。
径1～5mm炭化物少量含む。
2 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト層 植物質含む。小礫少量含む。
径1mm炭化物含む。中礫の角礫含む。T0015_26層相当

5140SK平面図



5140SK A-A'土層断面図



5140SK B-B'断面図



- 1 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト層 径1mm炭化物・堆土少量含む。
植物質含む。中礫の角礫少量含む。
2 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。
3 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。
4 7.5YR4/1 褐灰色粘土質シルト層 植物質少量含む。
5 7.5YR4/1 褐灰色粘土質シルト層 径1mm炭化物・黒褐色砂質シルトブロック少量含む。
5.7.5YR4/1 褐灰色粘土質シルト層

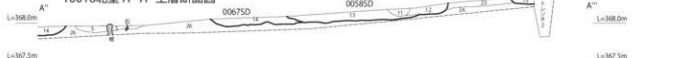
T0016北壁 A-A'土層断面図



T0016北壁 A'-A''土層断面図

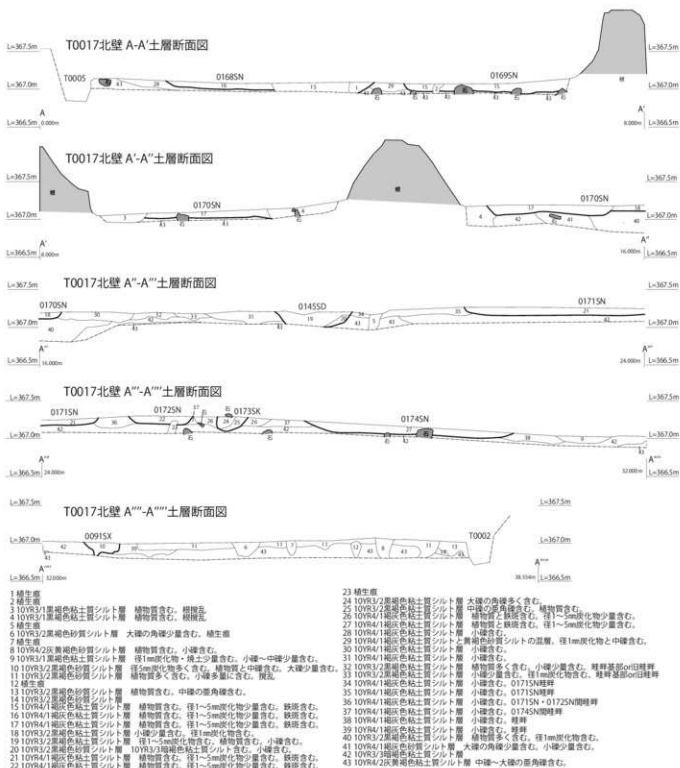


T0016北壁 A''-A'''土層断面図



- 1 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。結生痕
2 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。大礫の角礫含む。結生痕
3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト層 植物質含む。中礫の角礫少量含む。結生痕
4 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。結生痕
5 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質と鉄泥含む。小礫含む。
6 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト層 径1～5mm炭化物含む。植物質含む。小礫含む。
7 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト層 小礫含む。
8 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト層 径1mm炭化物微量含む。大礫の角礫少量含む。
9 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層 植物質と鉄泥含む。小礫～中礫と径5mm炭化物少量含む。
10 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層 植物質と鉄泥含む。小礫～中礫と径5mm炭化物少量含む。
11 10YR3/3 暗褐色砂質シルト層 小礫含む。0058SD
12 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト層 径1mm炭化物含む。小礫含む。0058SD
13 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。大礫の角礫含む。0058SD

- 14 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層 植物質と鉄泥含む。小礫～中礫と径1～5mm炭化物少量含む。
15 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層 植物質と鉄泥含む。小礫～中礫と径1～5mm炭化物少量含む。
16 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層 植物質多く含む。中礫の角礫少量含む。
17 10YR3/3 暗褐色砂質シルトと 10YR5/6 黄褐色砂質シルトの混層 植物質含む。
18 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。経時
19 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。経時
20 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。経時
21 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。経時
22 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。経時
23 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。経時
24 10YR3/1 黒褐色砂質シルト層 中礫の角礫少量含む。巨礫の角礫少量含む。径1mm炭化物微量含む。
25 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。経時
26 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト層 中礫～大礫の角礫含む。



第40図 水田関連連構(3) (S=1/50)

(3) 01465S (第39図・遺構図版18)

21区1715グリッドで0145SDの西側で検出された土坑である。長軸2.06m、短軸1.22mの楕円形を呈し、深さは0.33mを測る。内部から多量の礫が出土している。

(4) 5140SK (第39図・遺構図版18)

21区1915グリッドで検出された土坑である。

長軸0.91m、短軸0.88mの円形を呈し、深さは0.28mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトで、土師器南伊勢系鍋が出土し、時期は中世と推定される。

2欄別

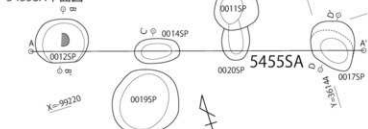
5454SA平面図



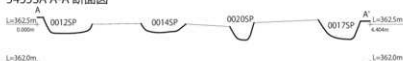
5454SA A-A'断面図



5455SA平面図



5455SA A-A'断面図



5455SA(0012SP) B-B'土層断面図



- 1 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト層
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト層

中礫含む。径1mm以上ブロック含む。

5455SA(0014SP・0019SP) C-C'土層断面図



- 1 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層
- 2 10YR4/1褐灰色砂質シルト層
- 3 10YR4/1褐灰色砂質シルト層
- 4 10YR5/6黄褐色砂質シルト層

植物質含む。中礫〜大礫の角礫少量含む。径1mm炭化物微量含む。

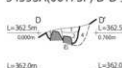
5454SA(5108SP) B-B'土層断面図



- 1 10YR3/1黄褐色粘土質シルト層
- 2 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層
- 3 10YR3/1黄褐色粘土質シルト層
- 4 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層
- 5 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層
- 6 10YR3/1黄褐色粘土質シルト層
- 7 10YR4/1褐灰色砂質シルト層
- 8 10YR5/6黄褐色砂質シルト層

小礫含む。径1mm炭化物少量含む。植生痕。径1mm 10YR7/6明黄褐色砂質シルトブロック含む。径1mm 10YR7/6明黄褐色砂質シルトブロック少量含む。径1mm炭化物微量含む。

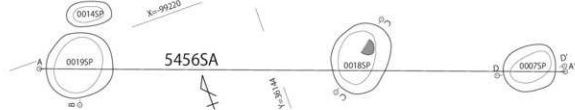
5455SA(0017SP) D-D'土層断面図



- 1 10YR3/2黄褐色粘土質シルト層
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト層
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト層
- 4 10YR6/4Cにふく黄褐色粘粒砂層

径1mm炭化物と中礫含む。大礫少量含む。中礫含む。目礫の角礫少量含む。目礫の角礫少量含む。中礫〜大礫多く含む。

5456SA平面図



5456SA A-A'断面図



5456SA(0014SP・0019SP) B-B'土層断面図



- 1 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層
- 2 10YR4/1褐灰色砂質シルト層
- 3 10YR4/1褐灰色砂質シルト層
- 4 10YR5/6黄褐色砂質シルト層

植物質含む。中礫〜大礫の角礫少量含む。径1mm炭化物微量含む。

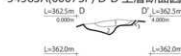
5456SA(0018SP) C-C'土層断面図



- 1 10YR3/1黄褐色粘土質シルト層
- 2 10YR3/1黄褐色粘土質シルト層
- 3 10YR4/1褐灰色砂質シルト層
- 4 10YR6/4Cにふく黄褐色粘粒砂層

植物質少量含む。小礫少量含む。中礫少量含む。径1mm炭化物微量含む。中礫〜大礫多く含む。

5456SA(0007SP) D-D'土層断面図

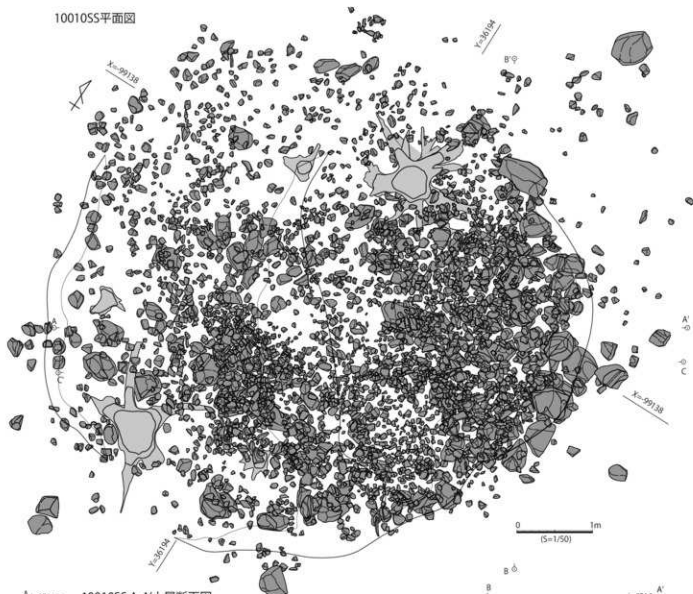


- 1 10YR3/3暗褐色砂質シルト層
- 2 10YR4/3黄褐色砂質シルト層
- 3 10YR5/6黄褐色砂質シルト層

植物質含む。

第41図 5454SA・5455SA・5456SA 選構図 (S=1/50)

10010SS平面図



10010SS A-A'土層断面図



10010SS B-B'土層断面図



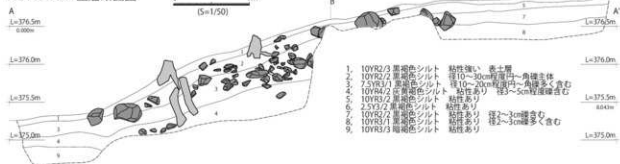
第 42 図 10010SS 遺構図 (S=1/50)

10011SS平面図

B'9

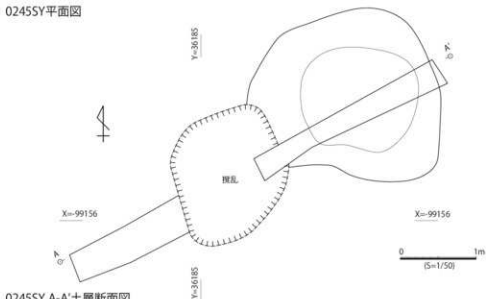


10011SS A-A'土層断面図

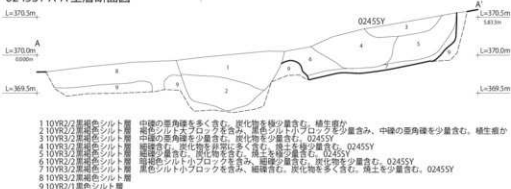


第43図 10011SS遺構図 (S=1/50)

0245SY平面図



0245SY A-A'土層断面図



第44図 0245SY 遺構図 (S=1/50)

(1) 5454SA (第41図・遺構図版24)

21区2114グリッドで検出された柵列で、5104SPと5108SPで構成される。長さは3.36mを測り、時期は戦国時代から江戸時代と推定される。

(2) 5455SA (第41図・遺構図版24)

21区2114と2214グリッドで検出された柵列で、0012SPと0014SPと0017SPと0020SPで構成される。長さは4.40mを測り、時期は戦国時代から江戸時代と推定される。

(3) 5456SA (第41図・遺構図版24)

21区2114と2214グリッドで検出された柵列で、0007SPと0018SPと0019SPと0020SPで構成される。長さは4.40mを測り、時期は戦国時代から江戸時代と推定される。

3 集石遺構

(1) 20010SS (第42図・遺構図版56)

22A区1319と1419グリッドで検出された塚状遺構で、長軸10.84m、短軸7.64mの円形を呈し、厚さは0.76mを測り、黒褐色から暗褐色シルトが堆積し角礫を多量に含み一部に円礫も確認される。時期は当初は江戸時代以降と推定されたが、出土遺物からこれよりも遡る可能性も考えられる。

(2) 20011SS (第43図・遺構図版56)

22A区1320と1321グリッドで検出された塚状遺構で、長軸9.84m、短軸7.73mの円形を呈し、厚さは1.12mを測り、黒褐色から暗褐色シルトが堆積し角礫を多量に含み一部に円礫も確認される。時期は当初は江戸時代以降と推定されたが、出土遺物からこれよりも遡る可能性も考えられる。

4 炭焼窯

(1) 0245SK (第44図・遺構図版14)

第3章 出土遺物

1. 出土遺物の概要

今回の大崎遺跡からの出土遺物は27 リットルコンテナで、総計 22 箱にのぼった。本章の節立ての通り、帰属時期をみると、弥生時代・古代以降の遺物も出土しているものの、縄文時代に属する遺物が圧倒的に多い。水田関連遺構を構成する堆積層は、元来縄文時代および弥生時代の遺物包含層であったと考えられ、水田関連遺構の畦畔および作土にも縄文土器・弥生土器および石器・石製品が包含していた。水田関連遺構の性質上、二次的攪乱を受けていない遺物包含層が残存している場合であっても、耕作土とそれとの境は不明瞭で漸移的であった。

遺物の種別を見ると、土器・陶器・石器・石製品・金属製品が確認されている。弥生時代以降の土器、古代以降の陶器、金属製品、さらに石器・石製品は別途報告するため、本節では縄文土器についてのみ報告していくこととする。

なお、報告では、すべての資料についての報告を本文中では行うことができない状況にある。個別の資料報告については、遺物一覧表で行うこと

とする。本報告に関する一覧表一式は令和7年3月現在開設されている、愛知県埋蔵文化財センターホームページからダウンロード可能となっており、こちらからのデータの利用をお願いしたい (<http://www.maibun.com/DownDate/newhouko.html>)。

2. 資料整理調査の経過

発掘調査から持ち込まれた出土遺物は、調査グリッド・遺構・取上日付けなどの単位別に一括取上されているものと、各資料別に座標値を測ったドット取上の資料とがある。一括取上された資料は、土器・土製品・石器・石製品・金属製品に分類したあと、各種で部位に分け、さらに接合などを通じて破片同士の同一個体の検討を行った。

今回は整理体制の方針により、これまでの整理方針とは異なる形で進行了。実測など図化可能な資料のみを任意抽出して、それに関してのみの一覧表が作成された。従って、資料選択には、文様のある有文土器の選択比率が高い可能性も考えられる。

第1節 縄文土器

上述した方針で選択された縄文土器は、登録番号E-1～E-509、E-1108の計510点である(以下、E-は省略し、番号のみを示す)。第45図～第73図に出土した縄文土器を図示した。図示の方針は、21A区遺構内出土資料、21B区遺構内出土資料、21A区・21B区遺構外出土資料、22A区

遺構内出土資料、22B区遺構内出土資料、22A区・22B区遺構外出土資料の順で提示した。本報告では、整理の方針として、水田関連遺構と縄文時代・弥生時代の遺構とを峻別することなく遺構順の掲載となっている。そのため、出土土器群全体を報告した上で、特に縄文時代遺構については再

度提示する形をとる。

縄文土器の時期別提示

上記の方針で掲載した土器は、以下の様に分類される。

第1群土器 縄文時代早期の土器

早期前半から後半にかけての土器群である。いずれの資料にも繊維が含まれることが特徴である。各図ではキャプション上に●印を付した。

第1群土器1 [165]

外面に楕円押型文が認められる。押型文はいわゆるボジ状態を呈するもので、網目状にはなっていないものの楕円形状が不鮮明な状態となっている。黄鳥式としても新相かもしれない。

第1群土器2 [164・486]

茅山下層式とか元野式といわれる土器群である。164は太沈線が平行して施されているもので、そのうちの1本は内に連続刺突が施されている。内面には二枚貝条痕が確認される。486は細い貼付隆帯上に刺突列が施されているもので、内面はナデ調整となっている。

第1群土器3 [392・449]

文様構成が刺突列文のみのものを集めた。

391・392は外面の横方向に爪形の連続刺突列が展開するものである。器面最終調整は内外面ともにナデである。これは粕畑式に属する可能性がある。

449は八ツ崎Ⅰ式とされる土器である。三単位波状の口縁形態をもち、口縁部から胴部下半まで直線的な器形を呈する。そのなかで、口縁部と胴部上半には若干の屈折形状が認められることが大きな特徴となっている。器面全体には二枚貝条痕が施されており、その上に口縁端部と口縁部と

胴部上半との屈折部分、さらには上部上半と、均等な間隔を保って3条の連続した刺突列文が施されている。さらに口縁部には結節縄文が横位に展開し、波頂部では粘土の貼付が垂下するように施されている。内面は二枚貝条痕が施されている。

第1群土器4 [450]

上ノ山式とか入海0式といわれる土器である。口縁部で波状を呈する。外面には交互押瓦のある粘土の貼付隆帯があり、器面最終調整としては表面はナデ、内面はナデ・オサエが主体である。口縁端部にも貼付隆帯同様の交互刺突列が認められる。

第1群土器5 [129・134・270・330・348・349・350・351・352・353・357・393・451・487・488・489・490]

その他、胎土に繊維が含まれているものを集めた。内外面に二枚貝条痕が施されている土器が圧倒的多数であり、早期後半（後葉～末葉）に知られている東海系の表裏条痕土器と言えよう。

第2群土器 縄文時代前期の土器

第2群土器1 [345・492]

大麦田式と考えられる土器口縁部で、器壁5mm程度と薄手である。345は器面表に刻目をもつ細い貼付文が2条横方向に平行して施されている。貼付文下には縄文RLが展開する。一方、口縁端部上面にも刻目が認められ、口縁端部に沿った内面には縄文RLが施されている。492は、器面表面には縄文LRの地文の上に、2条の細い貼付隆帯が施されている。裏面の口縁端部付近でも1条の細い貼付隆帯の下に縄文LRが施されている。

第2群土器2 [363]

口縁で内湾する器形の口縁部である。器面外側

には半截竹管状工具による文様が施されており、斜行する集合沈線や横長の楕円文が構成されている。口縁端部上面にも同様の半截竹管状工具による刺突列が施されている。内面はナデ・オサエ調整である。前期末頃の土器片であろうか。

第3類土器 縄文時代中期前半の土器

第3群土器 1

本土器群は、さらに第3群土器 1a と第3群土器 1b に分けられる。

第3群土器 1a [40・128・149・169・262・266]

爪形の刺突列のある貼付隆帯を特徴とするもので、北裏CⅡ式が主体となるものである。第3群土器 1の主体をなす。40は口縁直下で爪形刺突を伴うカマボコ状で低位の貼付隆帯が認められる。128は口縁部で、口縁端部外面に連続する爪形文をもつ貼付隆帯が併走する。149は40同様に爪形刺突を伴うカマボコ状で低位の貼付隆帯が認められる。169は口縁端部外面に爪形刺突を伴うカマボコ状で低位の貼付隆帯が認められる。262は外面に半截竹管状工具による刺突列の文様が施されている。266も40同様に爪形刺突を伴うカマボコ状で低位の貼付隆帯が認められる。

第3群土器 1b [77・343・401・439・500]

半截竹管状工具による沈線文様構成が加わるもので、北裏CⅢ式に属するものと思われる。77は器面外面には半截竹管状工具による沈線と刺突による文様が施されているもので、内面はナデ調整である。343は器面外面に半截竹管状工具による沈線複数条1単位で、多角形を形成するように構成されており、一部に三角の挟り入れが認められる。地文には縄文RLが認められる。401は

口縁端部上面には連続する半截竹管状工具による集合短沈線が、その直下からは半截竹管状工具による集合沈線が施されている。439は半截竹管状工具によるカマボコ状沈線、地文に縄文RLが施されている。457は口縁部片で口縁端部外面に爪形刺突をもつ貼付隆帯、その下には半截竹管状工具による沈線による区画が描かれている。縄文LRが地文として施されている。500は半截竹管状工具による区画内に、同工具による集合沈線と三角形状挟りが施されている。地文として縄文LRが施されている。

第3群土器 2 [281・329・344・370・406・407・408・409・416・456・459・491・493]

爪形の刺突列のある貼付隆帯に加えて、半截竹管状工具による沈線文様構成が主体となるもので、三角形状（三叉状）の挟り入れが見とれることが特徴である。これらは前畑式と考えられる。281は口縁端外面に工具による刺突列があり、下には半截半截竹管状工具による集合沈線が横位に展開する。329は口縁端部外面には半截竹管状工具による爪形刺突列をもつ隆帯と同工具によるカマボコ状沈線が認められる。344は半截竹管状工具による沈線により楕円文様などが描かれており、地文には縄文RLが施されている。370は波状口縁の波頂部から刻目をもつ貼付隆帯が垂下しており、半截竹管状工具による沈線が横に展開する。縄文RLを地文とする。406は粘土貼付の脇に半截竹管状工具によるカマボコ状の沈線が楕円形に重層的に施されており、縄文RLを地文とする。407は半截竹管状工具調整による細隆帯と、併走する形で半截竹管状工具による沈線があり、三角形状の挟りが等間隔で施されている。縄文LRを地文とする。408は半截竹管状工具による沈線と、地文縄文LRが施されている。409

は半截竹管状工具によるカマボコ状の沈線と縄文RL、三角の挟りが認められる。416は口縁部頂部に円状の突起が認められるものである。器面外面には半截竹管状工具によるカマボコ状沈線と刺突、刻み目のある貼付隆帯、連続した爪形文が展開する。また、口縁端部上面は突起部の内面に三叉状の挟りが施されている。456は口縁端部外面には、連続した爪形文、間隔を空けて爪形刺突をもつ貼付隆帯が横位に貼り付けられている。459は口縁端部外面に爪形の連続刺突が認められる。491は半截竹管状工具による貼付隆帯を中心に、カマボコ状の沈線による文様が構成されている。493は半截竹管状工具によるヘラ状刺突を持つ貼付隆帯により三叉状の文様展開となっており、口縁端部上面には小突起状に粘土貼付が2箇所施されている。

第3群土器 3

山田平式と考えられるが、施文の様相から、さらに以下の3群に分類される。

第3群土器 3a [6・125・163・251・338・360・445]

6は口縁端部外面には爪形の連続刺突列が展開し、その下位には平行して半截竹管状工具による集合沈線が展開する。125は器壁が5mm程度の口縁部から胴部への屈曲部付近と思われる。連続する爪形文のある貼付隆帯に沿って半截竹管状工具による沈線が展開する。163は口縁端部外面に半截竹管状工具による刺突列、その下に平行して半截竹管状工具による集合沈線が展開する。251は口縁端部をやや肥厚させ、その下では半截竹管状工具による沈線が認められる。口縁端部外面を含めて全体に文LRが地文となっている。338は半截竹管状工具によるカマボコ状の集合沈線が横位に、そして短めの集合沈線が縦位に施されてい

る。360は内湾する器形の口縁端部に粘土の貼付を行うことで、上面に三叉状の凹みが作られている。また、外面には貼付隆帯に爪形の連続刺突と半截竹管状工具によるカマボコ状の集合沈線が施されている。445は胴部屈曲部に爪形刺突列をもつ低位の貼付隆帯が施されている。

第3群土器 3b [339・340・361・430]

339は内湾する器形の口縁部で、貼付隆帯の上に口縁部直下に植物穂による擬縄文のほか、半円状の粘土貼付が施されている。340は口縁部に向かって屈曲するように外反する器形で、その屈曲部には植物穂による擬縄文が施されている。361は口縁端部外面には爪形の連続刺突列が展開し、その下位には平行して半截竹管状工具による集合沈線が展開する。430は内湾する器形の口縁部で、貼付隆帯の上に口縁部直下に縄文Iが施される。

第3群土器 3c [394・395]

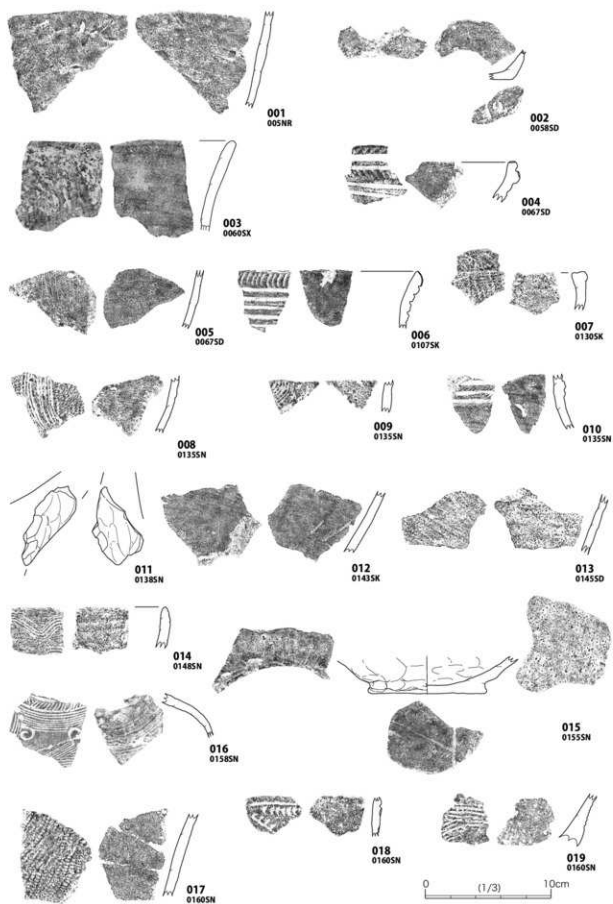
394・395は内側に屈折するような器形を呈しており、屈曲部には貼付隆帯が展開する。器形自体は、第3群土器 3bと同様といえる。口縁端部外面には連続する爪形文が施されている。器面調整は、外面・内面ともにナデ・オサエが主体となっている。

第3群土器 4

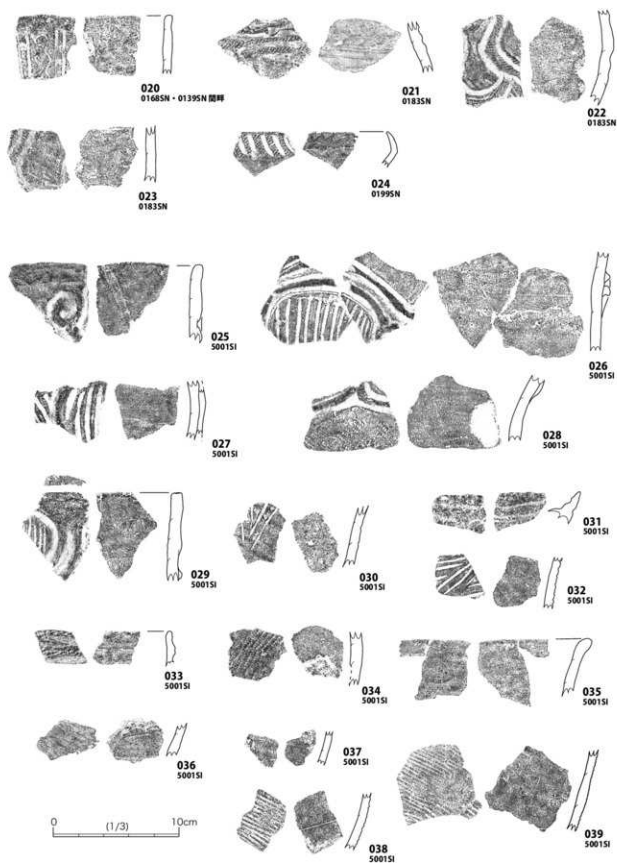
子種式に属するものと考えられるが、文様構成などから、さらに以下の4群に分類される。

第3群土器 4a [75・76・131・166・167・170・249・282・284・285・293・307・396・397・398・399・400・425・446・454・455・463・1108]

半截竹管状工具によるカマボコ状の隆帯および貼付隆帯が文様構成の主体となるものである。子種式に属するものと考えられる。75は口縁部から胴部上半にかけての大型破片である。貼付隆帯



第 45 図 縄文土器 1



第46図 縄文土器2

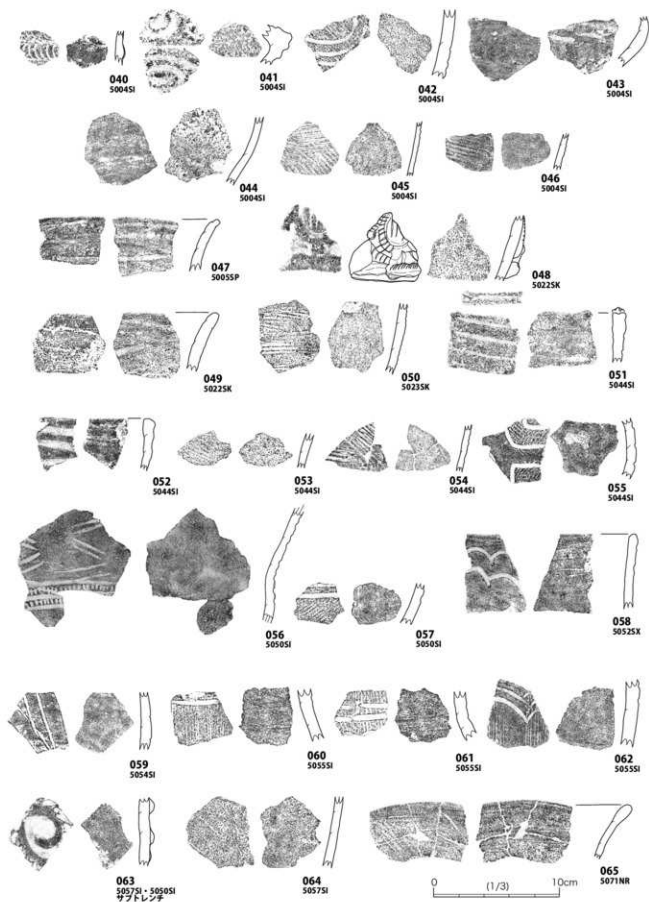
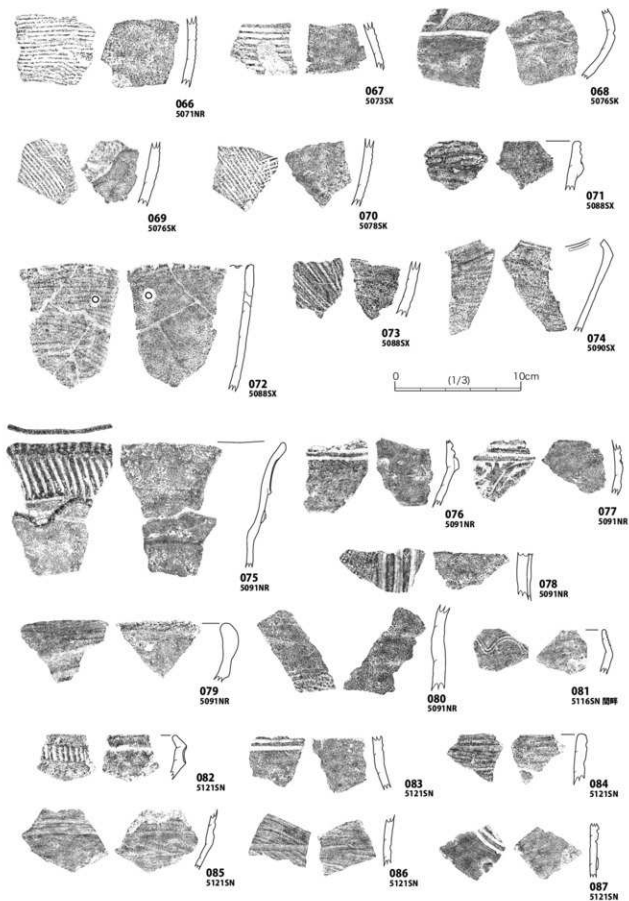
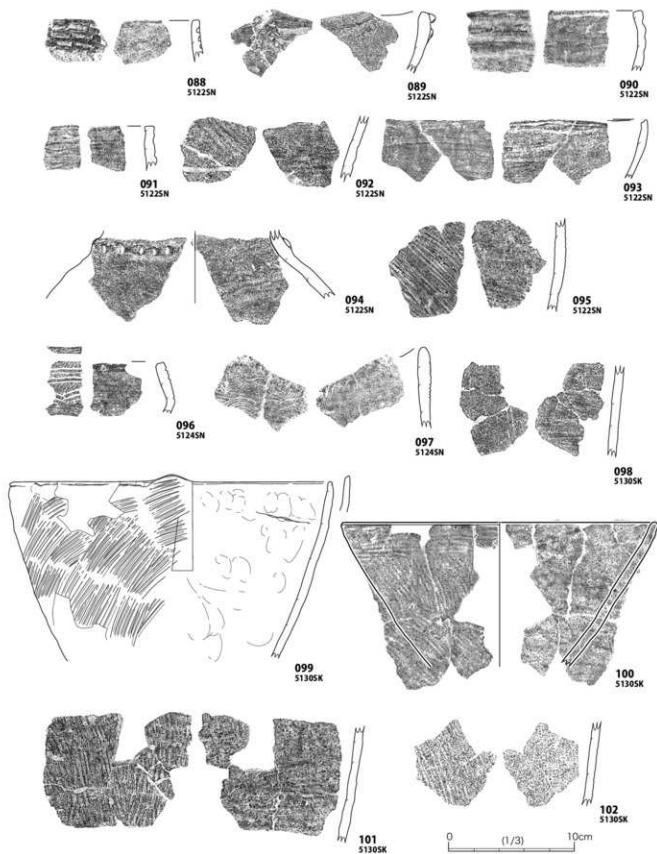


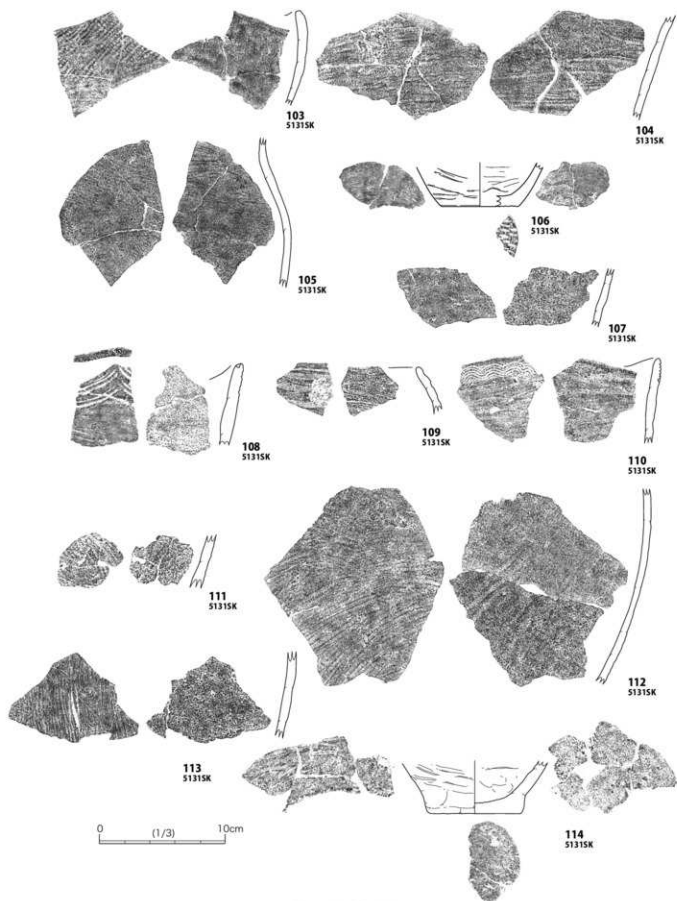
図 47 縄文土器 3



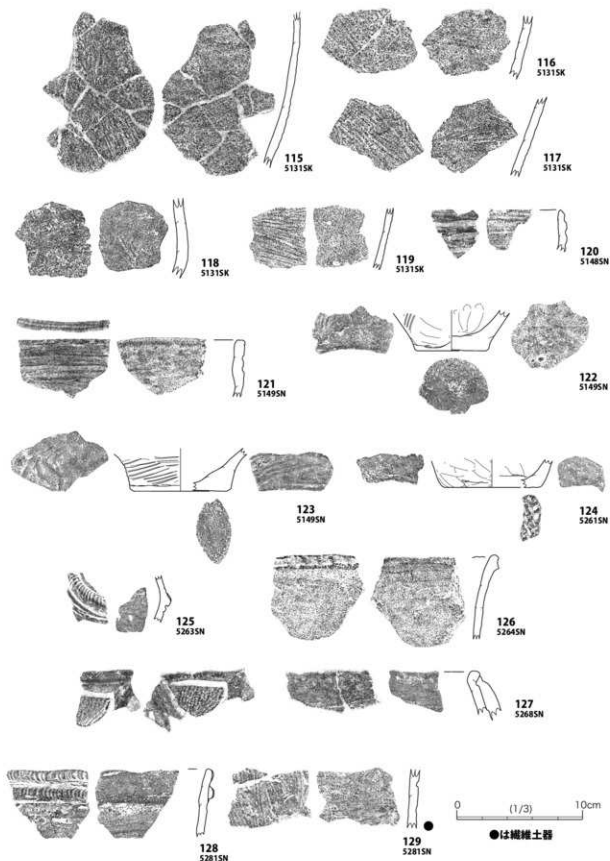
第48図 縄文土器 4



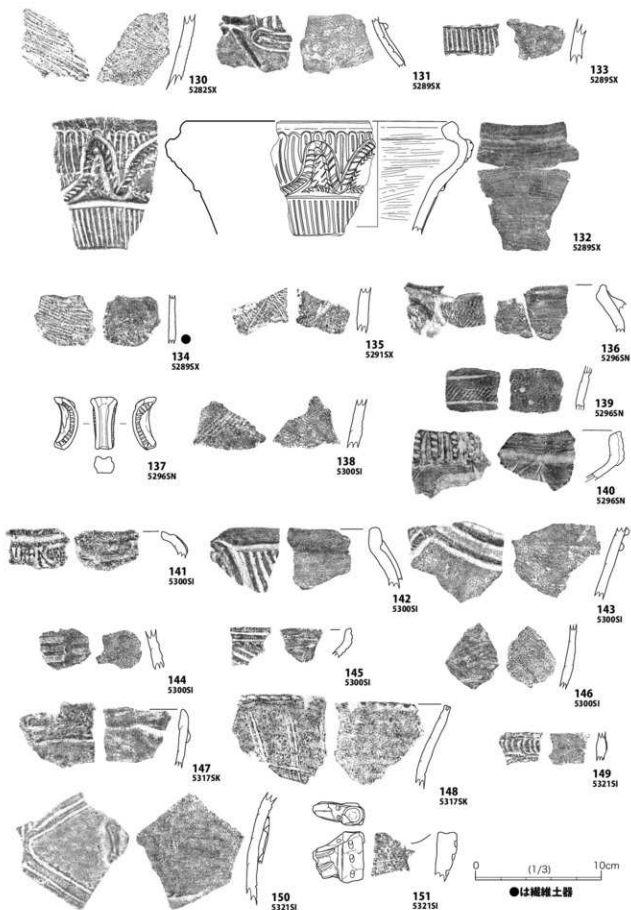
第 49 図 縄文土器 5



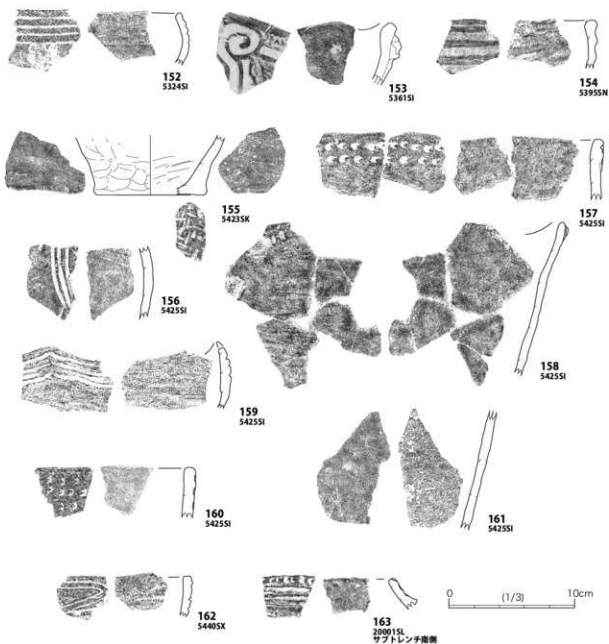
第 50 図 縄文土器 6



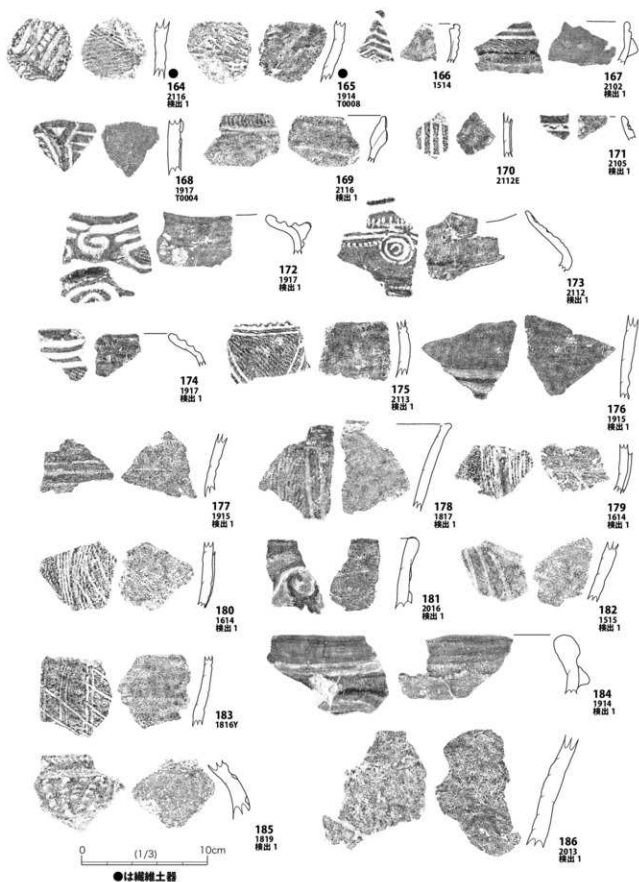
第 51 図 縄文土器 7



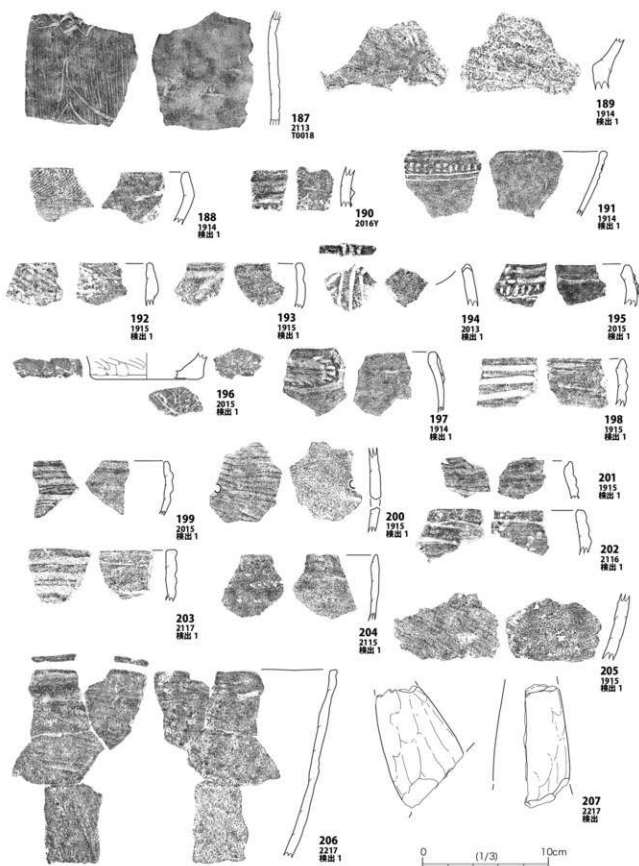
第 52 図 縄文土器 8



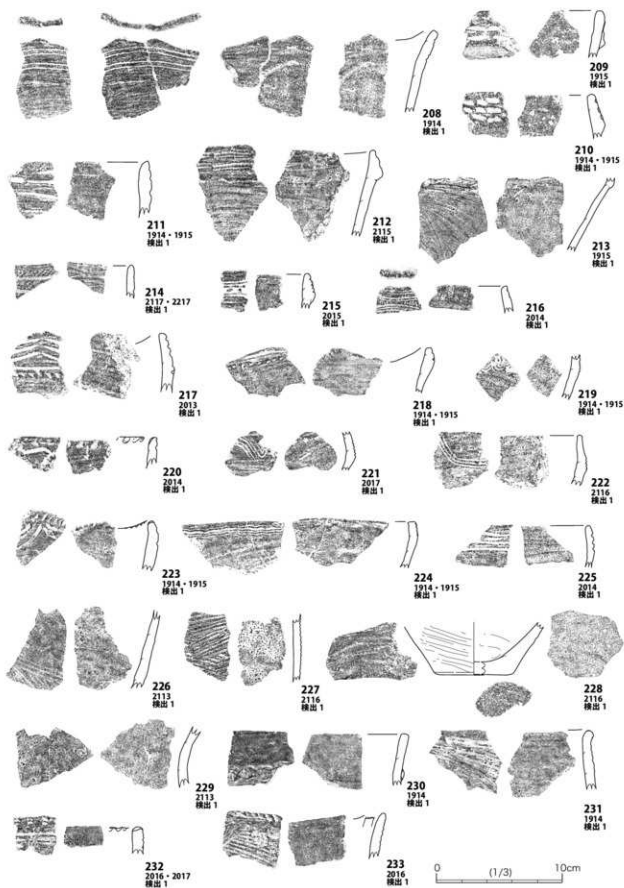
第 53 図 縄文土器 9



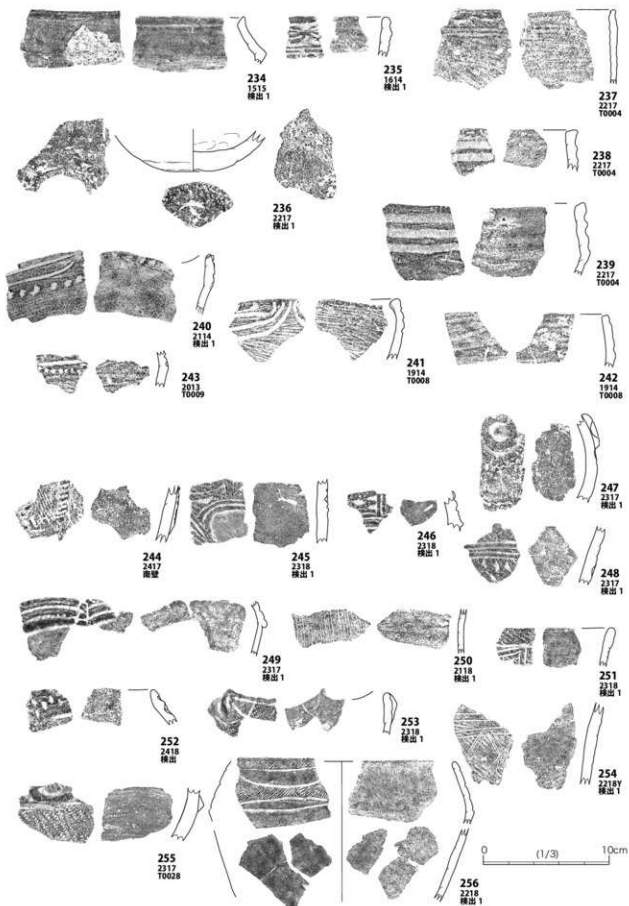
第 54 図 縄文土器 10



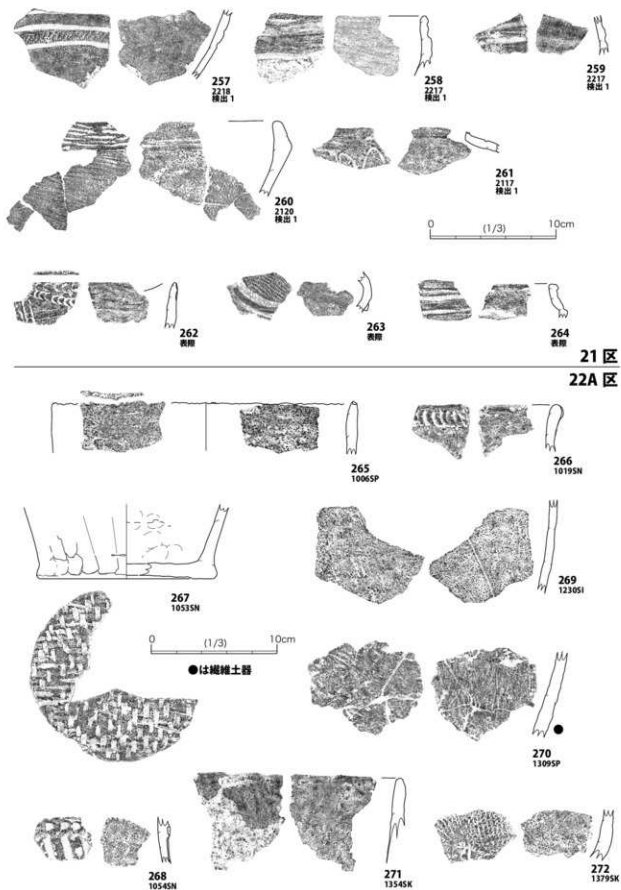
第 55 図 縄文土器 11



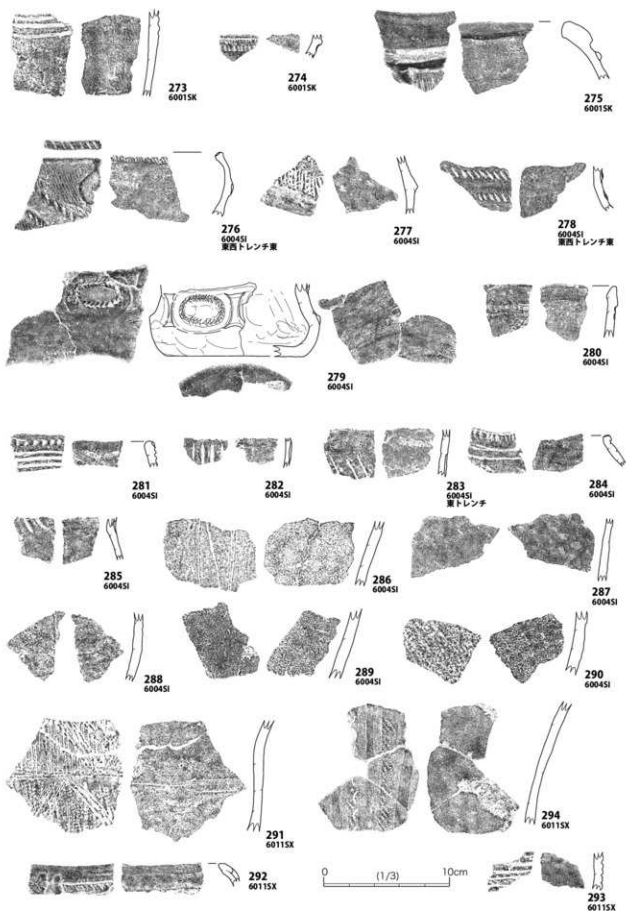
第 56 図 縄文土器 12



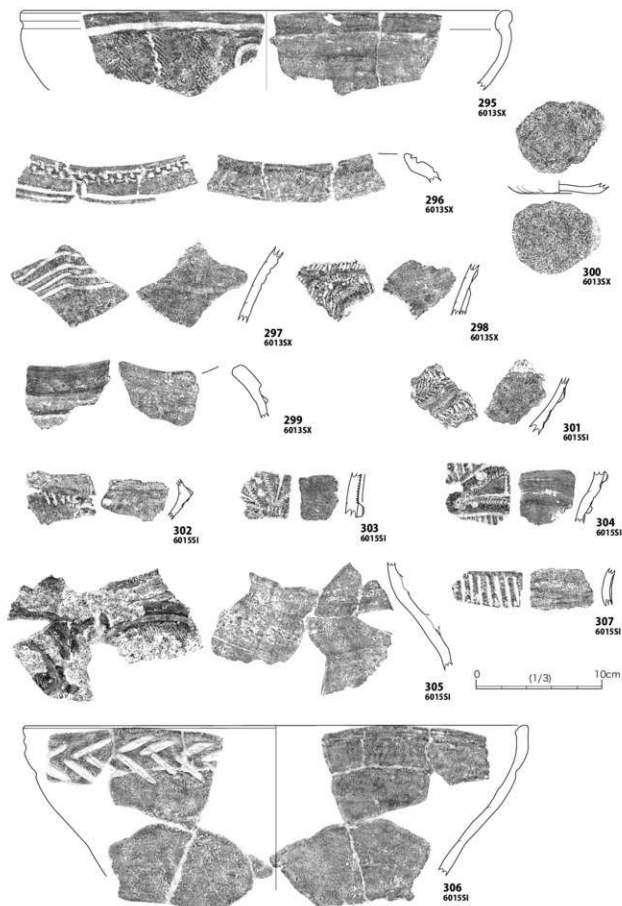
第 57 図 縄文土器 13



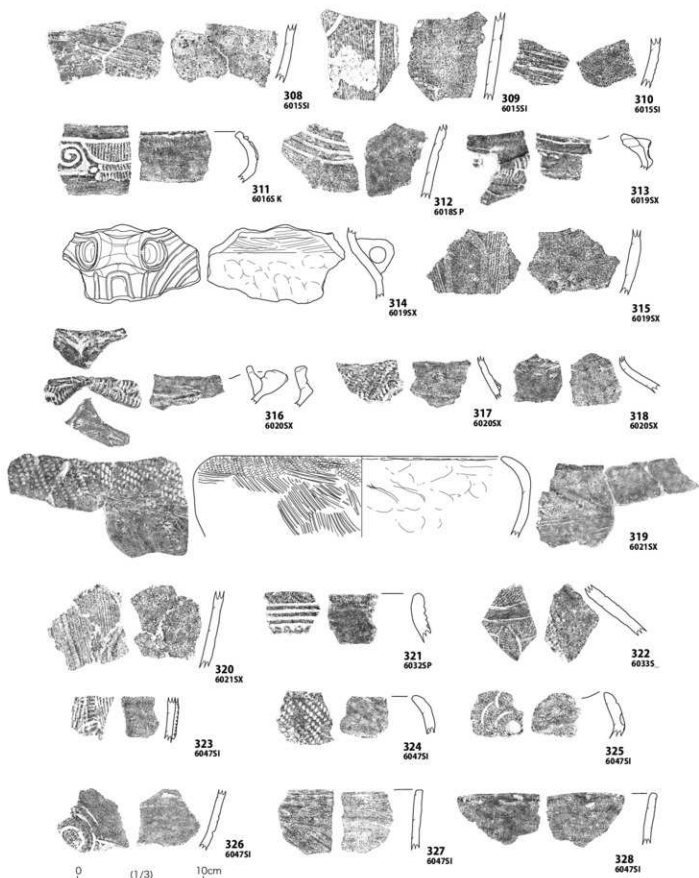
第 58 図 縄文土器 14



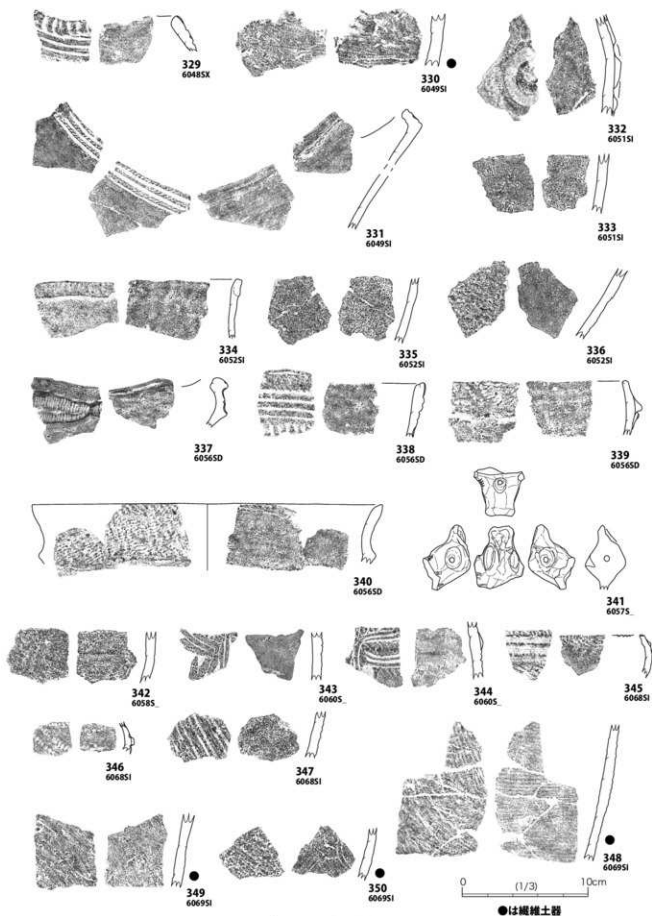
第 59 図 縄文土器 15



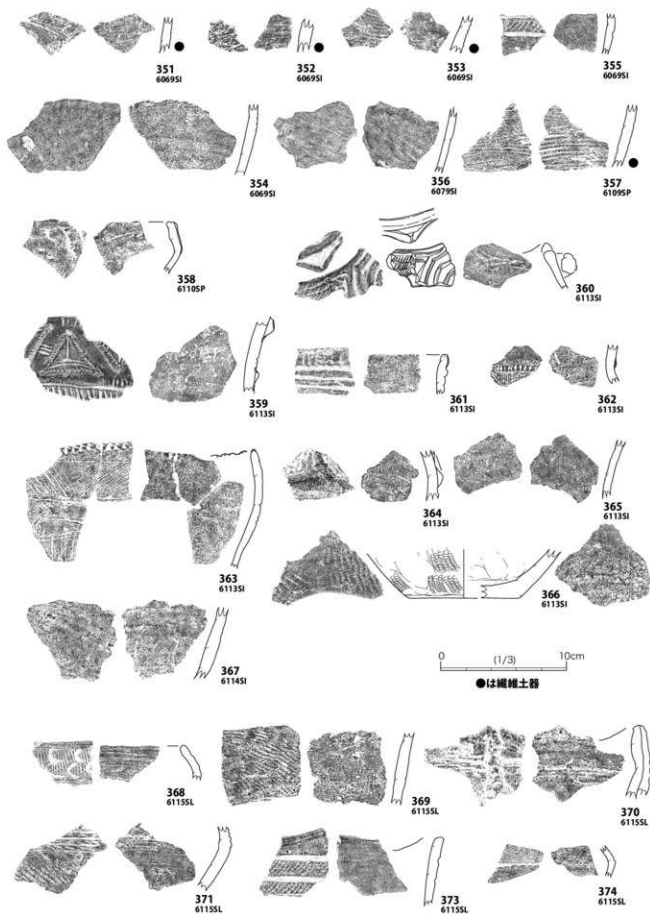
第 60 図 縄文土器 16



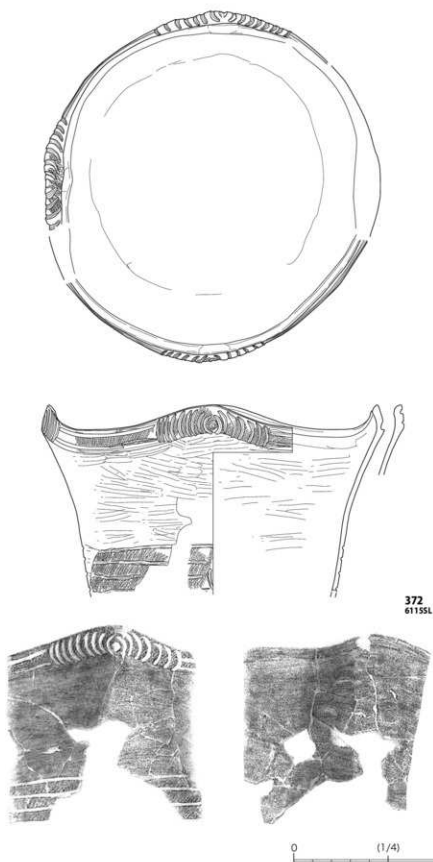
第 61 図 縄文土器 17



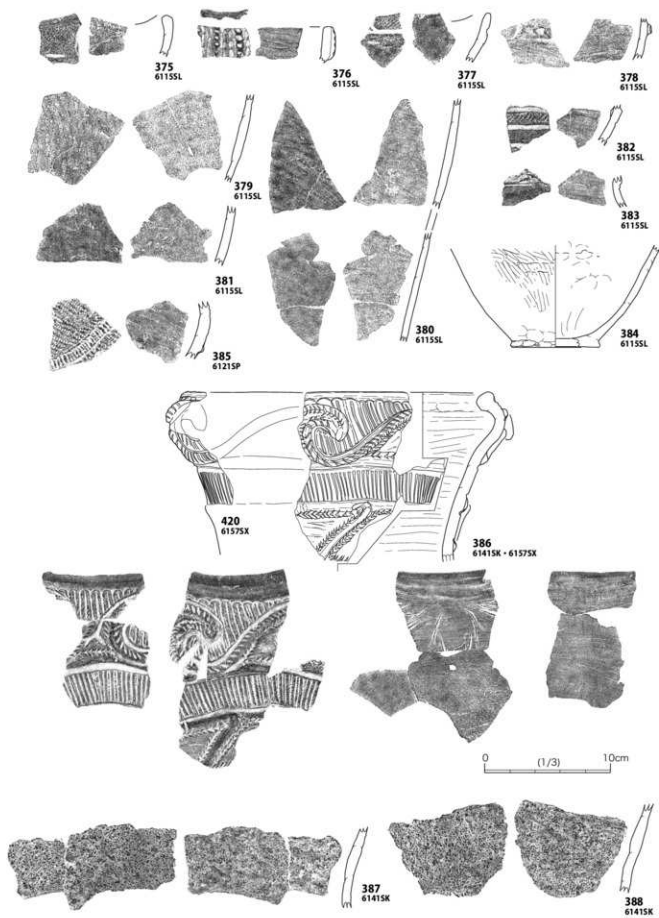
第 62 図 縄文土器 18



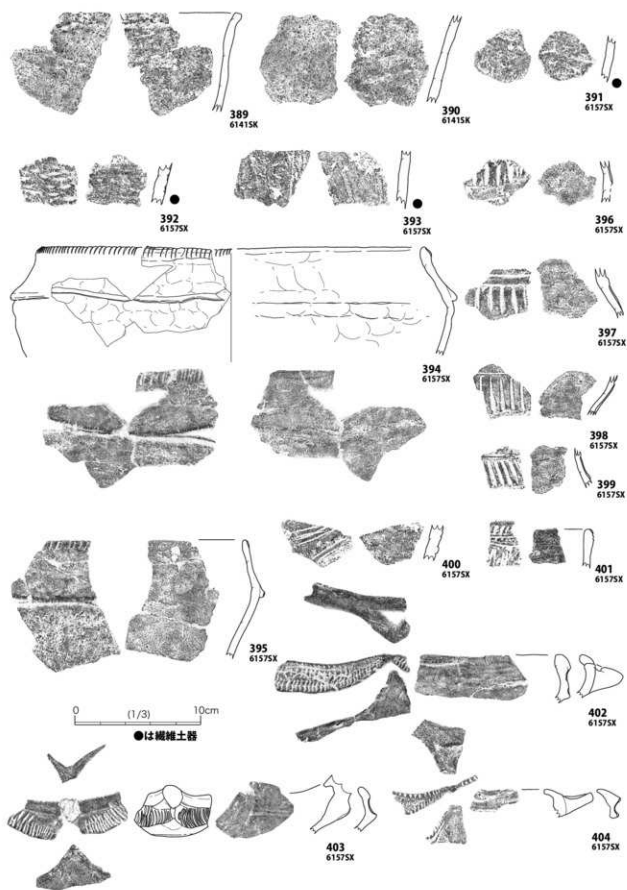
第 63 図 縄文土器 19



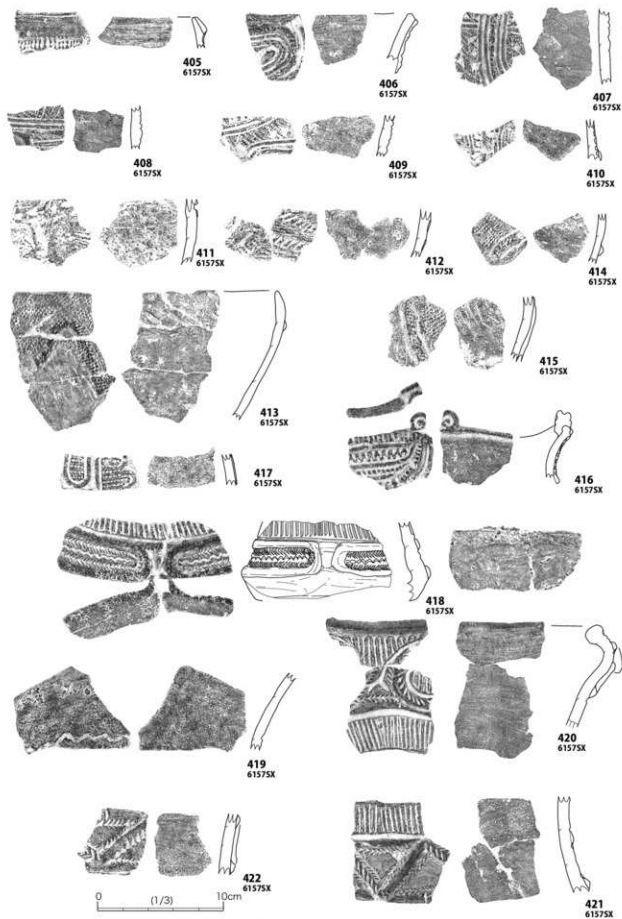
第 64 図 縄文土器 20



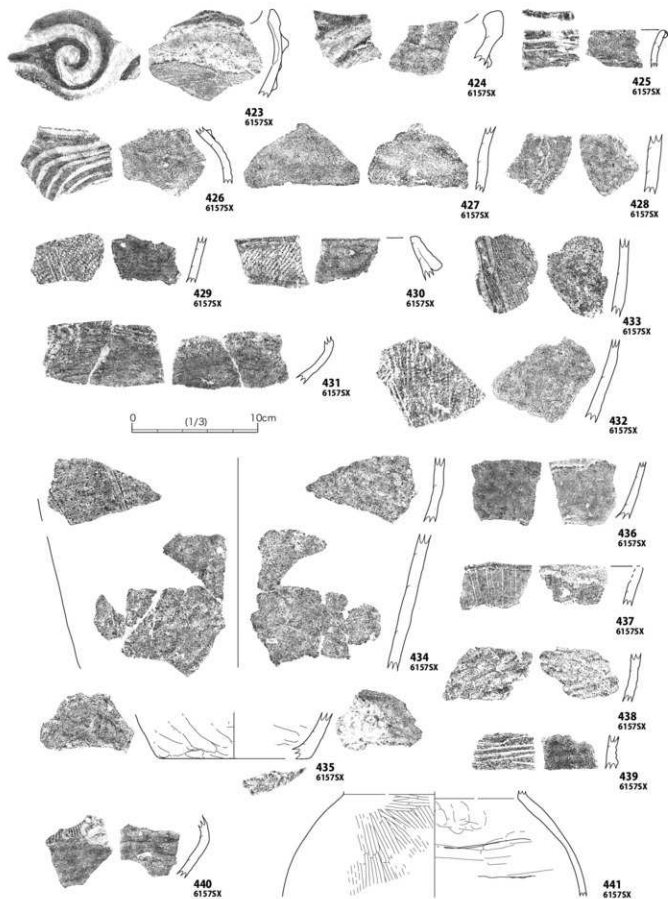
第 65 図 縄文土器 21



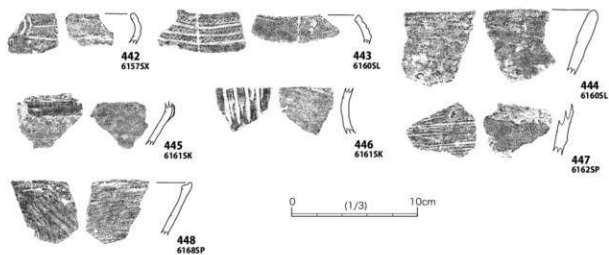
第 66 図 縄文土器 22



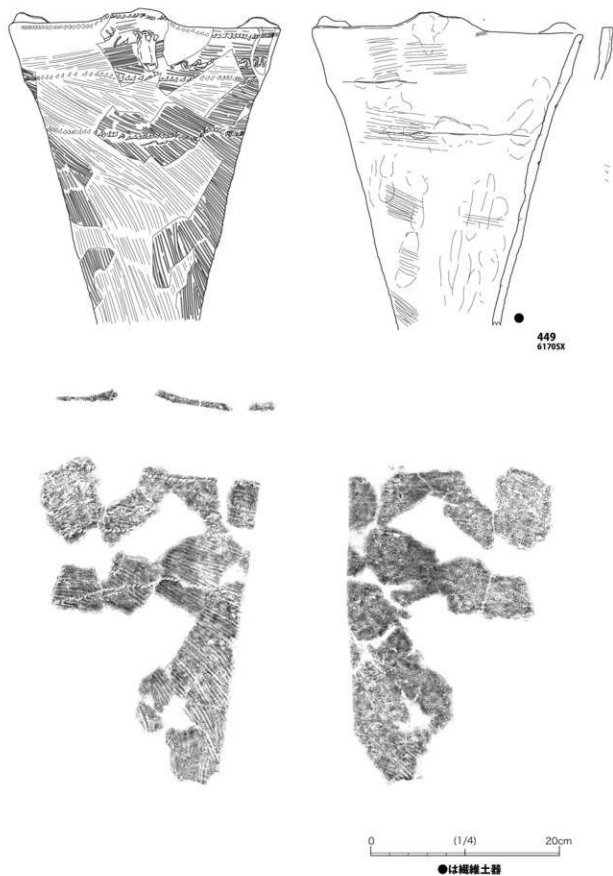
第 67 図 縄文土器 23



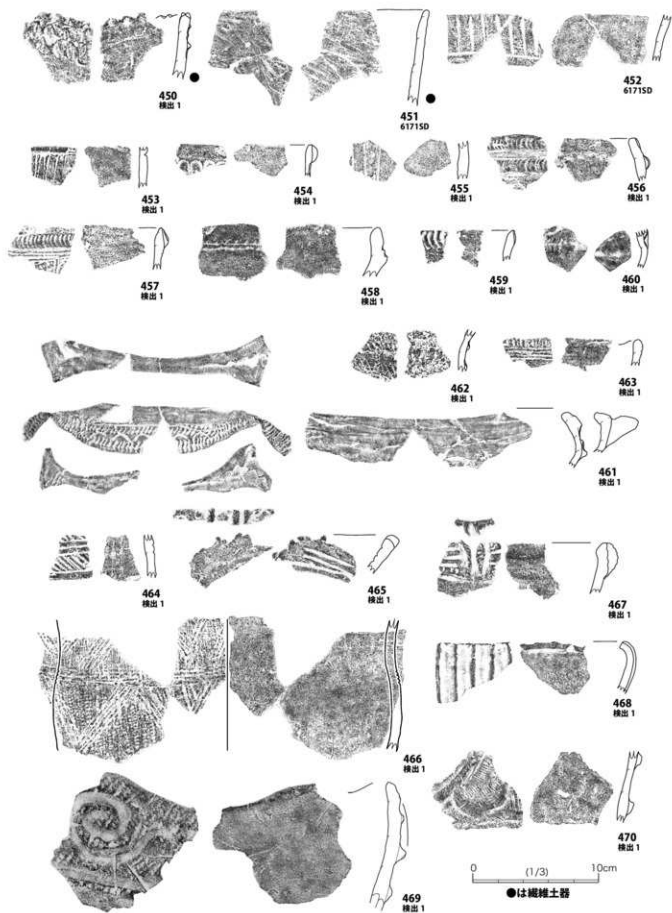
第 68 図 縄文土器 24



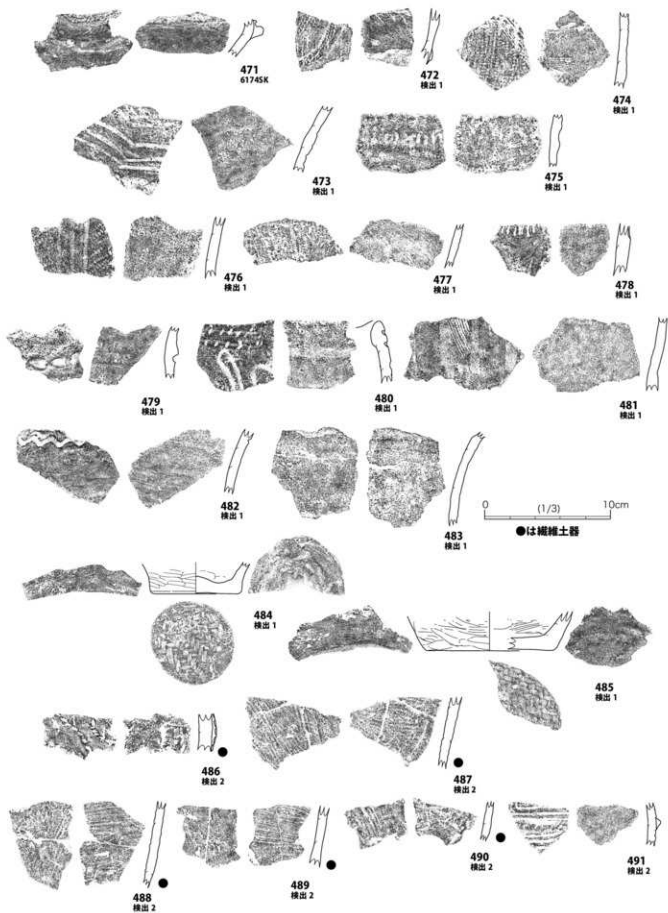
第 69 図 縄文土器 25



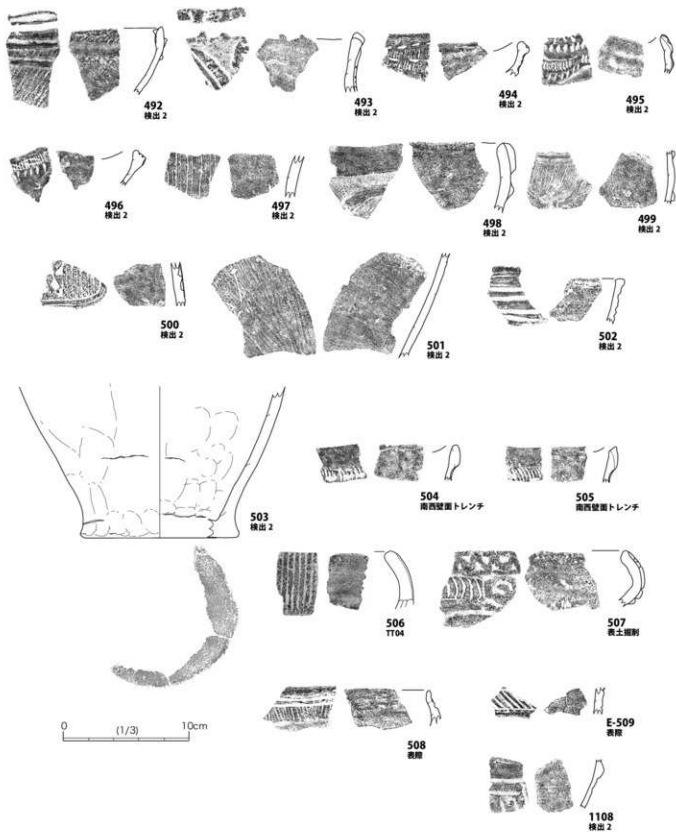
第70図 縄文土器 26



第 71 図 縄文土器 27



第 72 図 縄文土器 28



第 73 図 縄文土器 29

が横に二段展開し、その最下段は上方弧線状に連続しているものである。口縁端部外面から1段目の貼付隆帯までに半截竹管状工具によるカマボコ状の隆帯が集中的に施されている。76は口縁から胴部への屈曲部に肥厚させるような貼付がある。その上に半截竹管状工具によるカマボコ状の沈線と地文として縄文RLが認められる。131は胴部下半へと向かう胴部片である。外面には末広がりの貼付隆帯、沈線による区画、半截竹管状工具による集合沈線が認められる。166は半截竹管状工具による集合沈線が山形になるように施されている。口縁端部上面は沈線断面のように深く凹む。167は口縁部下の貼付によって屈折器形の効果を出している。その上に口縁部外面には半截竹管状工具による沈線と縄文RLが施されている。170は半截竹管状工具による短沈線が縦位方向に認められる。249は胴部屈曲部の外面に貼付隆帯が施され、それに平行する形で連続した下方弧文状に沈線が横位に展開する。282は半截竹管状工具によるカマボコ状の短沈線が集中して縦方向に展開する。284は口縁端部外面に爪形刺突のある貼付隆帯が施されており、それに平行して半截竹管状工具によるカマボコ状沈線が展開する。285は斜方向の集中した平行沈線が認められるものである。293は半截竹管状工具によるカマボコ状の短沈線に縄文RLが地文として認められる。307・396・397・398・399・446・452・453は半截竹管状工具によるカマボコ状の短沈線が集中して縦方向に展開する。同工具による横位に展開する沈線と文様構成としてはセットと考えられる。400は半截竹管状工具によるカマボコ状の短沈線が斜方向に展開する。425は口縁端部に貼付隆帯、その下に平行して半截竹管状工具による沈線が施される。口縁端部上端には

連続した爪形の刺突列が施されている。454は口縁端部外面の貼付の下、半截竹管状工具によるカマボコ状の集合沈線が施されている。集合沈線の上端は逆U状に閉じる形となっている。455は半截竹管状工具によるカマボコ状の短沈線が集中して縦方向に展開する。463は口縁端部には連続した爪形文を施し、直下には半截竹管状工具による沈線が展開する。1108は半截竹管状工具によるカマボコ状の短沈線が横位にそして縦方向に短沈線が展開する。

第3群土器 4b 【319・324】

319・324は内湾する器形で、口縁端部外面に縄文RLが施されている。外面の下半に工具痕が顕著に認められる。器面内面にはナデ・オサエが主体である。

第3群土器 4c 【334】

334は口縁端部外面に低位の貼付隆帯が認められる。器面調整はナデが主体である。

第3群土器 4d 【410】

410は半截竹管状工具による刺突列をもつ隆帯をもとに併走する形で半截竹管状工具による集合沈線が展開する。

第3群土器 4e 【426】

426は胴部の屈曲部部分片で、横に展開する貼付隆帯と弧状を呈する集合沈線で、三叉状の意匠を呈していたと考えられる。

第3群土器 5

隆帯脇の沈線内や区画された凹み内に爪形をはじめとする連続した刺突列が認められることを特徴とするもので、北屋敷Ⅱ式に属するものと考えられる。さらに以下の様に分類できる。

第3群土器 5a 【18・193・346】

18は半截竹管状工具によるカマボコ状の沈線と脇に爪形の連続刺突が認められる。北屋敷Ⅱ a

式と考えられる。三角形の区画を呈するものである。193は連続する爪形文をもつ太沈線による三角形の区画が見られる。346は貼付隆帯脇に爪形の刺突列が認められる。三角形区画を構成している。

第3群土器 5b [82・193・245・246・248・274・280・292・302・313・316・337・346・402・403・404・405・458・460・461・475・494・495・496・504・505]

今回報告する北屋敷式の主体をなすもので、多くは北屋敷Ⅱc式に当たると考えられる。82は口縁部片で太沈線内に連続した爪形文が認められる。274は外面に半截竹管状工具による隆帯と際に爪形刺突列を持つ沈線が認められる。280は口縁片で、外面に連続刺突のある沈線が施されている。292は口縁部片で、縦方向に貼付隆帯と横方向の太沈線内に連続した爪形刺突列が施されている。302は胴部への屈曲部付近で、貼付に加えて、横位へ展開する連続刺突列が施されている。313は貼付隆帯脇に爪形の連続刺突を含む太沈線が認められる。316は口縁部片で、貼付隆帯脇に連続の爪形文列2条と、弧線が展開する。貼付部は外面に向かって凸状を呈するもので、上面観では三叉状の凹みが形成されている。337は外面には貼付隆帯と区画された内部には爪形の刺突列が2条施されている。端部上面にはハイガイによる連続押圧が認められる。402・403・404は、貼付区画内に爪形の連続刺突が認められる。貼付突起が外面に凸状に施されているもので、上面観では三叉状の凹みが形成されている。405は貼付区画脇に爪形の連続刺突列が施されている。458は口縁屈折部に爪形の押し引き連続刺突のある沈線が施される。460にも貼付隆帯脇に連続した爪形文が施されている。461は、貼付区画内に

爪形の連続刺突と下方弧文が認められる。貼付突起が外面に凸状に施されているもので、上面観では三叉状の凹みが形成されている。475は連続した爪形刺突列をもつ太沈線が認められる。494は貼付区画内に連続する爪形文列と刺突列が認められる。さらに口縁端部上面にはハイガイの横圧列を見ることができる。495は刻目を持つ貼付隆帯区画内に連続した爪形文列が認められ、さらに口縁端部上面にも爪形の刺突列を見ることができる。496も貼付隆帯で区画された部分に爪形刺突列と弧線が連続して施されており、屈折部にも刺突列が認められる。504・505はともに口縁部片で、太沈線内に連続した爪形文が認められる。

第3群土器 5c [277]

277は貼付隆帯の片側脇に長目の爪形刺突列が施されている。さらに脇には縄文rが施されており、隆帯と刺突列による区画内に施されていた可能性もある。

第3群土器 5d [245・246]

245・246は半截竹管状工具による隆帯と沈線で文様が構成されている。三叉状の挟り入れが間隔を空けて連続的に施されている。いずれも縄文RLが地文となっている。248も半截竹管状工具による隆帯と沈線と三叉状の挟り入れが認められる。

第3群土器 5e [283]

283は斜格子状の沈線が施されているものである。

第3群土器 6

中部高地および信州系土器を集めた。勝坂式系・曾利式系の1群である。胎色はいずれも赤褐色を基調としている。さらに以下の様に分類できる。

第3群土器 6a [168・247・279・303・304・

321・359・417・418・420・421・422・506]

多くは藤内Ⅱ式に比定されるものと考えられる。168は貼付隆帯による三叉文と横方向に向かう集合沈線が施されている。247は大きなボタン状の貼付と同心円状に貼付けられた隆帯文の上に連続した爪形文が施されている。また、鋸歯状の垂下沈線も認められる。279は胴部下半から底部にかけての部分である。外面には貼付隆帯脇に連続した爪形文によって隅丸形状の区画が形成されている。303は貼付隆帯と脇に連続した細かい爪形文が施されている。304は貼付隆帯と脇に連続した細かい爪形文、さらには半載竹管状工具によるカマボコ状沈線が認められ、三角形の区画が形成されている中に三叉状の沈線表現が認められる。321は半載竹管状工具による集合沈線と工具による連続刺突が施されている。口縁部外面には縄文 RL が施されている。359は貼付隆帯の脇に爪形の細かい連続刺突、さらに半載竹管状工具による集合沈線によって三角形区画が作られている。この区画内には沈線による三叉表現が確認できる。417は半載竹管状工具による連続刺突列と貼付隆帯による区画が認められる・418は半載竹管状工具による集合沈線と貼付隆帯脇の細かい爪形刺突列により、長楕円の区画が作られている。区画内には波状沈線が施されている。420は刻目をもつ貼付隆帯による横位の入組文状の展開が認められる。隆帯の切れ目に沈線による三叉状の表現が確認できる。さらに加えて、半載竹管状工具によるカマボコ状の集合沈線と隆帯脇の細かい爪形刺突列が認められる。421は半載竹管状工具によるカマボコ状の集合沈線と貼付隆帯脇の細かい爪形刺突列が確認できる。422は貼付隆帯脇に爪形刺突列が認められる。421・422ともに三角形区画が展開する。506は

半載竹管状工具による集合沈線が認められる。

第3群土器 6b [132・133・386]

井戸尻式に比定されるものである。132は半載竹管状工具による短沈線で器面全体を覆っており、刻目を持つ貼付隆帯が横方向に展開する。但し、入組状を呈することはなくN字状となっていることが特徴である。133は半載竹管状工具による短沈線が密に施されている。386は刻目をもつ貼付隆帯が入り組み状に横展開する。切れ目には三叉状の線刻が施されている。半載竹管状工具による集合沈線で器面全体が覆われており、三角形区画を形成している隆帯脇には細かい爪形刺突列が認められる。

第3群土器 6c [468]

口縁部から粘土の縦位貼付が連続して施されているものである。南信州の大門原式土器に比定される。

第3群土器 7

船元・里木系土器であるが、385は船元Ⅰ式に、その他多くは船元Ⅲ式に比定されると考えられる。文様からさらに以下のように分類される。

第3群土器 7a [7・135・291・466]

燃糸文を地文とするものである。7はやや内湾する器形の口縁部上面が凹み状を呈するもので、器面には燃糸文が施されている。135は燃糸地文に平行沈線による鋸歯文が施されている。291は燃糸文を地文として、半載竹管状工具による幾何学的な文様が施されているものである。466は燃糸文を地文として、半載竹管状工具による幾何学的文様が展開している。

第3群土器 7b [8・9・179・180・244・276・278・298・301・317・323・371・385・412・462・474]

貼付隆帯および櫛描文を基調とするものであ

る。8は貼付の微隆起線文に沿って櫛描文が施されている。地文には縄文RLが施されている。9は櫛描文が認められる。179・180は貼付隆帯および隆帯に平行する集合沈線が施されており、植物穂による擬縄文が地文となっている。244は刻目をもつ貼付隆帯が縦位に展開し、植物穂による擬縄文が地文となっている。276は刻目をもつ貼付隆帯に植物穂による擬縄文が地文として認められる。また口縁端部上端には工具による連続した刻目が展開する。278は刻目をもつ貼付隆帯が2条、横位に展開する。298・301・317は連続刺突をもつ貼付隆帯が認められるもので、植物穂による擬縄文が地文となっている。323は刻目をもつ貼付隆帯とそれに平行する形の櫛描文が認められる。385は刻目をもつ貼付隆帯があり、縄文RLを地文とする。412は刻目をもつ貼付隆帯があり、植物穂による擬縄文を地文とする。462は爪形刺突のある貼付隆帯が2条認められ、植物穂による擬縄文を地文としている。474は縄文LRを地文として櫛描文が認められる。

第3群土器 7c [254・432]

縄文を地文とするものである。254は集合沈線による斜格子状文が認められるもので、縄文rを地文とする。432は縄文RLに、半截竹管状工具による沈線が描かれている。

第3群土器 8 [464・509]

五領ケ台式に比定される土器群である。464・509ともに半截竹管状工具によるカマボコ状の集合沈線が施されているもので、短い集合沈線が密で、斜行していることが特徴である。

第3群土器 9 [497]

上記で分類できないものを集めた。497は半截竹管状工具による集合沈線であるが、線が浅い。

第4類土器 縄文時代中期後半の土器

第4群土器 1

中富Ⅰ～Ⅲ式と考えられる土器群である。272が中富Ⅰ～Ⅱ式に属する可能性があるほかは、ほぼ中富Ⅲ式に当たると考えられる。文様の構成から下記のように分類される。

第4群土器 1a [141・311]

141はキャリバー器形の口縁部である。外面には貼付微隆帯と連続刺突が認められる。円状の区画内には縄文地文が認められる。311も同様の器形で、貼付隆帯による渦巻、沈線区画内に縄文Iが充填されている。

第4群土器 1b [171・296・507]

171はキャリバー器形の口縁部である。外面に交互刺突による波状文が施されている。296は同様の器形で、交互刺突による波状文のほか、下方で方形に区画するような2条の沈線が展開する。507も同様の器形で、交互刺突による波状文の下、貼付粘土による渦巻文と短沈線による充填が認められる。

第4群土器 1c [508]

508はキャリバー器形の口縁部で、平行沈線および集合沈線が認められる。

第4群土器 1d [173]

173はキャリバー器形の口縁部である。小波状を呈する口縁部で、波頂部外面には沈線による同心円文が設けられ、連続刺突列や沈線が横方向に展開する。

第4群土器 1e [272]

272は胴部片で、外面には植物穂による擬縄文が認められる。

第4群土器 2 [41・143・153・156・172・174・175・176・185・250・252・263・297・482]

中富Ⅳ・Ⅴ式、咲畑式と考えられる土器群である。中富Ⅴ式および咲畑式が主体である。

口縁部片は以下の通りである。41は強いキャリバー器形の屈曲部付近で、沈線による上下の渦巻文が認められる。沈線による渦巻153はキャリバー器形の口縁部片で、波状を呈す。波頂部直下では沈線による渦巻文から垂下沈線へと続く。波長部すら沈線内に連続する爪形文が口縁部に沿って展開する。縄文RLが施されている。172は強い屈曲のキャリバー器形で、外面に凸状になる粘土の貼付がある。それを起点として太い竹管状工具による渦巻文や沈線区画が施される。区画内には縄文RLが施されている。174は太い3条の平行沈線と縄文RLが施されている。185は連続刺突をもつ太沈線と貼付隆帯が施されている。252は工具刺突による波状文が見られる。

胴部片は以下の通りである。143は平行する2条の貼付隆帯が大きな波状に横位に展開する。156は縦方向に3条の平行沈線が垂下する。175は交互刺突による波状文が横位に展開し、地文の縄文RL上には平行沈線が展開する。176は胴部屈曲部に浅くて太い平行沈線が2条展開する。250は外面に条線が施されている。263は貼付隆帯の脇に沈線が施され、これらで形成される区画内に縄文RLが充填される。297は胴部屈曲部に4条の平行沈線で大きな波状が描かれている。419は胴部中位で横方向に展開する波状文が認められる。482は胴部屈曲部に横方向に展開する波状の太沈線が施されている。

第4群土器3

神明式・取組式土器である。さらに下のように分類される。

第4群土器3a [364・413・414・415・472]

神明式である。364は貼付隆帯と脇の太沈線

で方形区画された内部に縄文LRが施されている。413・414・415・472は鉢形を呈する器形で、太い貼り付け隆帯は波状を呈し、口縁端部から貼付隆帯までの区画を縄文LRが施されている。

第4群土器3b [22・23・25・26・27・28・29・30・31・42・48・63・78・79・127・136・142・181・182・184・253・255・268・275・299・305・306・332・362・423・424・431・469・498]

取組式である。25は口縁部片で貼付隆帯による渦巻文が認められる。26は太い貼付隆帯区画内に短沈線による充填が認められる。27は胴部片で貼付隆帯と集合沈線と弧線による文様が展開する。28も胴部片で、貼付隆帯が横位に展開し、接続部では三叉状を形成する。縄文RLを地文とする。29は口縁部片で二条の貼付隆帯区画内に短沈線が充填されている。30も胴部片で、平行沈線内に巻貝による連続刺突が施される。31は口縁部にある羽根状の装飾で外面には沈線による区画が認められる。42は胴部片で、燃糸文の地文に弧状の平行沈線が施されている。48は波状を呈する口縁部片で外面には連続した爪形刺突の施された隆帯で装飾が構成されており、区画内には短沈線が充填されている。63は胴部片で貼付隆帯による渦巻文とそれを起点にする放射状の集合沈線が見られる。78は貼付隆帯と脇の太沈線による区画と縄文LRが地文となっている。79は口縁部片で太い貼付隆帯による区画が認められる。127・136は口縁部片で高位の貼付隆帯による区画内に縄文LRが充填されている。181は口縁部で貼付隆帯による渦巻文が施されている。182は胴部片で平行する太沈線が施されている。184は口縁部片で太い貼付隆帯により区画が設けられている。253は波頂部で口縁端部上面か

ら外面にかけて貼付隆帯が垂下する。外面には沈線区画があり、縄文 LR は地文として施されている。255 は胴部片で、貼付隆帯が長楕円形に配し、区画内に刺突列が施される。縄文 RL が地文として施されている。268 は胴部片、刺突列のある貼付隆帯を基軸として、太沈線が平行して施されている。275 は口縁部でキャリパー器形を呈する。外面は貼付隆帯区画内に短沈線が充填されている。299 も口縁部でキャリパー器形を呈する。外面には貼付隆帯とナデにより太い凹線が形成されている。305 は胴部下半で、太い貼付隆帯と脇沈線による区画内に短沈線が充填されている。306 もキャリパー器形を呈するもので、口縁部外面には連続した矢羽状沈線が横走する。332 は胴部片で貼付隆帯による渦巻文が施されている。362 も胴部片で、器形屈曲部に刻目をもつ隆帯が横位に展開し、その下には条線が垂下する。423 は口縁部片で、貼付隆帯による渦巻文が認められる。424 は口縁部片で、貼付隆帯による装飾が認められる。431 はキャリパー器形の口縁部から胴部屈折部付近で、外面には平行沈線と同心円状の円弧文が施される。外面・内面ともに中型巻貝による調整痕に酷似した器面調整が認められる。469 は口縁波頂部で、貼付隆帯により渦巻文などが展開する。縄文 LR を地文としている。区画内の隆帯上には縄文 LR が施されている。498 は口縁部片で貼付隆帯による楕円状の区画が認められる。

第4群土器 3c [21・354・411・471・476]

神明式・取組式のいずれにも属する可能性のあるものを集めた。21 は胴部片で、外面には低位の貼付隆帯および沈線による区画と隆帯上に縄文 LR が施される。354 は胴部片で外面に条線が施されている。411 は胴部片で刺突列をもつ貼付

隆帯と太沈線で文様が構成されている。471 は口縁部から胴部への屈折部で、貼付隆帯によって区画されている。476 は3条の垂下沈線と縄文 LR が施されている。

第4群土器 4

島崎Ⅲ式～山ノ神式に当たるものである。

第4群土器 4a [470・478]

島崎Ⅲ式に当たるものと考えられる。470 は胴部片で、貼付隆帯による区画と沈線による充填が施されている。478 は区画内に短沈線が充填されている。

第4群土器 4b [20・62・187・309・314・315・320・326・429・433・434・479]

中期末の山ノ神式に20 は口縁部で半截竹管状工具による平行する沈線および波状沈線が垂下する。62 は平行する弧状沈線と条線が認められる。187 は胴部片で条線を地文として、屈曲部に平行する2条の波状沈線が横位で展開し、その下部にはさらに大きな波状の平行沈線が見られる。309 は胴部片で、条線を地文として太沈線で垂下などが表現されている。314 は胴部片で、ブリッジ状の貼付と太沈線による区画が認められる。315 は胴部片で、浅い太沈線と条線が施されている。320 は条線を地文として、太沈線によって描かれている。326 も胴部片、太沈線による同心円文のほか地文として縄文 RL が施されている。429 も胴部片で、縄文 LR を地文として半截竹管状工具による沈線が描かれている。433 も胴部片で条線を地文に平行沈線が施されている。434 は胴部大型破片で、太くて浅い沈線のみが描かれる。479 は刺突列を持つ貼付隆帯と条線が認められる。

第4群土器 5 [142・145・294・295・428・499]

信州系土器を集めた。以下のように分類される。

第4群土器 5a【142・145・499】

沈線装飾を主体とするものである。142はキャリパー器形を呈する口縁片で、貼付隆帯とそれに平行する形で集合沈線が横位に展開する。145は屈折する器形で、口縁部には平行沈線、胴部には斜行する集合沈線が施されている。499は胴部片で、外面には貼付隆帯による区画と区画内は半截竹管状工具の沈線による充填が認められる。

第4群土器 5b【294・295・428】

親田式に比定される1群である。294は胴部片で浅い垂下する太沈線が施されている。縄文はLRで縦位方向の結節縄文も認められる。295は口縁部で沈線区画が認められる。地文は縄文LRで、縦位方向で結節縄文も認められる。428は胴部片で、縦位方向で結節縄文が認められる。

第4群土器 6【480】

北白川C式に比定されるものである。口縁部で刺突列を持つ沈線は口縁端部外側に、細い帯状の区画は太沈線によって文様が施されている。

第4群土器 7【17・32・34・43・44・49・60・61・138・144・177・178・186・190・273・286・287・288・289・308・312・333・365・367・369・427・437・473・477・481・483】

その他、中期後半を主体とする土器群（深鉢）を集めた。17は胴部片で縄文LRが施されている。32も胴部片で、平行沈線による幾何学文様が認められる。34も縄文LRが施されている。43は胴部屈曲部片で、ナデやオサエなどの調整が認められる。44は胴部片、49は口縁部片で、ナデやケズリ調整が見られる。60・61は胴部片で平行沈線と条線が見られる。138も胴部片で、縄文I

が施されている。144も胴部片で平行する短沈線が主体となっている。177は胴部片で平行した沈線が施されている。178は平行沈線と縄文Iが見られる。369は胴部片で、縄文Iが施される。437では半截竹管状工具による集合沈線が、473では平行沈線、481では太沈線と条線が施されている。

第4群土器 8【15・300・366】

底部を集めた。366は底面に敷物の圧痕が認められるが、編組製品である可能性がある。

第4群土器 9【137】

土器装飾部である。137はリング状の装飾の両側面に沈線区画内に爪形の連続刺突が施されている。取組式（第4群土器 3b）に伴う土器装飾と考えられる。

第5類土器 縄文時代後期の土器

第5群土器 1

後期初頭～前葉の土器である。中津・称名寺式の段階が主体であるが、22・23は福田K2式並行まで下る可能性がある。文様の構成から、以下に分類できる。

第5群土器 1a【22・23・55】

充填縄文の認められる1群である。22・23は胴部片で、蛇行する平行沈線内に縄文LRが充填されているものである。22は沈線区画は鉤の手状にものが連続したような様相を呈する。55も胴部片で、沈線区画内に縄文LR充填されているものである。区画は上下に対向するような構成を呈している。

第5群土器 1b【59・148・151・183】

沈線による文様構成を呈するものである。59は深鉢片で、平行沈線が認められるものである。148は口縁部片である。外面には平行する2条一

単位の条線が垂下しており、口縁端部上面には工具による連続刺突列が見つけられる。151 は波状口縁の波頂部で、垂下してつけられた貼付に連続刺突が施されている。それを起点として沈線が横方向に複数展開する。波頂部上面には指による押圧、さらに口縁部には工具による刺突も認められる。183 は胴部片で、縦位は2本1単位の沈線、これに斜位方向は単沈線が重ねられ格子状の意匠を呈している。

第5群土器 1c [5]

5 は胴部片で、外面には条線が施されているものである。

第5群土器 2

後期前葉～中葉の土器群で、堀之内2式並行期が主体となる。

第5群土器 2a [4]

縄文が施されているものである。4 は口縁部片で、外面には沈線と工具による刻み目のある貼付隆帯が付き、上面には工具による刻目が認められる。

第5群土器 2b [103]

103 は直立する器形で波状口縁を呈する。口縁部は外面には縄文 LR が施されており、外面・内面の調整としては巻貝条痕の可能性が考えられる。

第5群土器 2c [51・126・150]

沈線・貼付によって文様が構成されているものである。51 は口縁端部に向かって直立気味の器形である。口縁端部上面には8字状のボタン状の貼付と沈線が走る。外面にはボタン状の貼り付け部を起点として、斜方向に平行沈線が施されている。126 は外反する口縁部片である。口縁端部に浅い横圧を連続して施し、小さい方形区角を表出させている。器面調整は外面・内面ともに中型

巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。150 は胴部片で、外面には平行沈線による区画で、三角形もしくは菱形の意匠が展開していた。区画の中央には8の字を呈するボタン状の貼付が認められる。器面調整は、器面調整は外面・内面ともに中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。

第5群土器 2d [12・65・104・105・107・189・271・327・356・379・380・381・436・438・503]

12 は胴部片、47 は口縁部片で、器面調整のみが認められる。外面・内面ともに中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。65 は外反する器形の口縁部である。外面・内面ともに中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。104・105 も胴部片で、外面・内面ともに中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。107 は外面・内面ともに一般的なナデ調整が認められる。189・271・327・356・379・380・381 も外面・内面に中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められるものである。436・438・503 は外面・内面ともに一般的なナデ調整が認められる。

第5群土器 3

八王子式～西北出式、あるいは八王子1式～2式に属する1群である。

第5群土器 3a [24・152・325・331・372・373・375・440・443]

八王子式あるいは八王子1式とされる土器群である。24 はくの字に屈折した口縁部片で、外面には、縄文 LR を地文として半弧線が連続して描かれている。器面調整は中型巻貝などによるナデ・ケズリである。152 は緩やかに内湾する器形で、4条の平行沈線の下に縄文 LR が地文となってい

る。325は小波状を呈する口縁部片で、押圧を中心に同心状に展開する弧線が連続して描かれている。地文には縄文Iが施されている。331は大波状を呈する口縁部で、3条の平行沈線の下に縄文Iが施されている。器面調整は中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。372は4単位波状の器形で波頂部には巻貝工具による押圧から半弧線が連続して描かれている。波頂部は2本の平行沈線でつながっており、縄文LRを地文とする。胴部中央にも文様帯があり、3条の平行沈線と上下に連結する弧線が認められる。縄文LRを地文とする。器面調整は、外面・内面ともに中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕と考えられる。373も波状口縁で、3条の平行沈線に、縄文LRが施されている。375も波状口縁で、波頂部下に同心円文と縄文LRが施されている。440も屈折のある口縁部で、刺突と半弧線が描かれている。地文に縄文LRが施されている。器面調整は外内面ともに中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕と考えられる。443も屈折する口縁部で3条の平行沈線と縄文LRが施されている。

第5群土器 3b [140・358・376]

西北出式あるいは八王子2式といわれるものである。140はくの字に屈折した口縁部片で、口縁端部上面から刻目をもつ縦位の貼付隆帯が連続して施されている。358は屈折する口縁部外面にノの字の貼付が認められるものである。386も同様の口縁部で、内面の器面調整は中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。

第5群土器 3c [256]

256は屈折の強いソロバン玉形の器形を呈する。沈線区画内に縄文Iが充填されており、外面・内面ともに最終調整はミガキである。

第5群土器 3d [10・139・335]

その他胴部片などを一括した。10は胴部片で、外面には3本一単位の平行沈線に縄文LRが施されている。器面調整は中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。139は平行沈線内に縄文LRが充填されている。335は沈線区画内に縄文LRが充填されている。

第5群土器 4

凹線文土器群である。以下の様にさらに分類される。

第5群土器 4a [52・154・204・238・239]

吉胡下層式あるいは元住吉山II式に比定されるものである。52・154は口縁部片で、凹線の内がナデられているものである。器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。204・238・239も凹線の内がナデられているもので、特に204は凹線の幅広でと深さが浅い状態となっている。

第5群土器 4b [203・259・264]

伊川津式あるいは宮滝式（古）に比定されるものである。

203・259・264は、凹線内がナデられているが、凹線の形状が明瞭なものとなっている。器面調整は巻貝条痕である。

第5群土器 4c [33・83・84・85・86・90・91・92・109・120・121・194・198・199・201・202・242・258・502]

寺津下層式あるいは宮滝式（新）、神谷沢段階の資料である。33は平縁の口縁部片で、凹線は内面がナデられていないもので、縄文Iが施されている。83・84・85・86・90・91・92・109・120・121も同様に内面がナデられていない凹線が認められる。器面調整にはナデのほか巻貝条痕が顕著である。194は大波状口縁で、波頂部から3条の平行する垂下沈線とそれを起点に左右に

展開する集合沈線が認められる。波頂部には垂下沈線に対応して刻目が認められる。198・199・201・202も同様に内面がナデられていない凹線が認められる。242・258・502も同様である。

第5群土器 5

後期中葉～後葉の土器のうち文様の認められない土器を集めた。以下の様にさらに分類できる。

第5群土器 5a [3・328]

器面調整は中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められるものを一括する。

第5群土器 5b [13・35・36・37・53・98・99・100・101・102・111・112・113・116・117・118・119・200・206・226・237・448・501]

器面調整に巻貝条痕が認められるものを一括する。

第5群土器 5c [1・64・161・335・342・387・388・389・390・444]

ナデなどの調整痕のみが認められるものを一括する。

第5群土器 6 [96・162・219・221・222]

後期末の土器群である。さらに二分できる。

第5群土器 6a [96・162]

下別所式に比定されるものである。

96は口縁部片で、半截竹管状工具による平行沈線、弧状沈線、縄文LRが施されている。162は口縁部片で、半截竹管状工具による弧状沈線が認められる。いずれも器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。

第5群土器 6b [219・221・222]

伊川津Ⅱ式とされる一群である。屈折する器形の口縁部に節描波状文とされる文様が認められるものである。いずれも器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。

第5群土器 7 [56]

信州系土器である。56は大波状口縁に、平行する短沈線による鋸歯状文、さらには細い工具による連続刺突が施されている。上之段式に比定される。

第5群土器 8 [87・93・257・377・382・384]

鉢もしくは浅鉢である。87はボタン状の貼付のある土器で、第5群土器 4cに伴うものと考えられる。257は沈線区画内に縄文Iが充填されている。377・382は沈線区画内に縄文LRが施されている。第5群土器 3aに伴うものと考えられる。

第5群土器 9 [11・16・68・207・229・261・318・322・341・368・374・383・441・442・467]

壺もしくは注口土器を集めた。11と207は注口部である。16は胴部片で、柳描文や渦巻状沈線、刺突で文様が構成されている。322は胴部片で、沈線区画内に縄文LRが充填されている。第5群土器 3aに伴うものと考えられる。341は口縁部上に付く装飾部である。368・374・422も第5群土器 3aもしくは3bに伴うものと考えられる。

第5群土器 10 [2・106・122・123・124・146・155・196・205・228・267・435・484・485]

後期土器の底部を一括している。2・106・124・155・267・435・484・485には編組製品の、196には木葉痕の敷物の圧痕が認められた。編組製品圧痕のうち編組技術が判明できるものとしては、106は2本飛び2本潜り1本送りのゴザ目、124は2本飛び2本潜り1本送りのゴザ目、155は2本飛び2本潜り1本送りの網代、267は2本飛び2本潜り1本送りのゴザ目、484は

2本飛び2本潜り1本送りの網代であるが図左下のみ3本飛び3本潜り1本送りの網代と組み方を変えている。485は2本飛び1本潜り1本送りの網代である。

第6群土器 縄文時代晩期の土器

第6群土器 1

晩期初頭から前葉の吉胡BⅠ式・寺津式・あるいは大宮式などと言われる土器群である。さらに以下の様に分類できる。

第6群土器 1a [14・81・97・110・224]

櫛描波状文を特徴とする一群である。14・81・97・224は櫛描波状文が、110は櫛描波状文に加えて巻貝工具による刺突が認められる。

第6群土器 1b [208・225]

208は山形突起を呈する波状口縁の口縁部片である。半截竹管状工具による2条の平行沈線が施されている。器面調整は巻貝条痕である。225は口縁部に3条の平行沈線が施されている。

第6群土器 1c [214・216]

214は口縁部片で半截竹管状工具による2条の沈線と縄文LRを地文とする。器面調整は巻貝条痕である。216は半截竹管状工具による沈線に巻貝擬縄文が加わる。

第6群土器 1d [220]

220は口縁部片で沈線による波状文、口縁端部上面には工具による押厚列が展開する。器面調整は巻貝条痕である。

第6群土器 1e [74・198]

74は屈折する器形で、外内面ともに巻貝条痕が認められる。188は屈折する器形で、外面に縄文LRが施されている。器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。

第6群土器 2

晩期前葉の雷Ⅱ式・元刈谷式・保美Ⅱ式・蛭塚B式と呼ばれる土器群である。さらに以下の様に分類される。

第6群土器 2a [88・241・260]

口縁部を胴部から屈折させて内湾させているものである。88は内側に屈折・内湾させた口縁部外面に巻貝工具による短沈線が3段に渡って展開する。241は3条一単位で沈線による上方弧文が横位に展開する。260は内側に屈折、および外側を若干肥厚させた器形で、口縁部外面には半截竹管状工具による短沈線が3段に渡って展開している。器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。

第6群土器 2b [71・157・159・192・209・210・212・213・215]

口縁部を肥厚させた一群である。71は肥厚させた口縁部外面に巻貝工具による短沈線が2～3段に渡って展開する。器面調整は巻貝条痕である。157は若干肥厚させた口縁外面に半截竹管状工具による連続刺突文を2段に渡って施している。159は肥厚させた波状口縁に3条の平行沈線が施されている。192は肥厚させた口縁部外面に縄文rが施されている。209・210は肥厚させた口縁部外面に巻貝工具による短沈線が2～3段に渡って展開する。212は肥厚させた口縁部の外側に半截竹管状工具による短沈線が2条施されている。外内面には巻貝条痕が施されている。213は口縁部と胴部屈折付近から胴部にかけての土器片である。口縁部側には縄文LRが施され、外内面の調整は巻貝条痕が施されている。215は肥厚した口縁部の外面に半截竹管状工具による沈線と刺突列が施されている。

第6群土器 2c [58・160・211]

58は直立する器形で、外面には巻貝工具によ

る連続した弧状沈線が2条展開する。160は肥厚させていない直立した口縁部の外面に半截竹管状工具による連続刺突文を3段に渡って施している。211は直立する器形で、外面には巻貝工具による連続した短沈線が3条展開する。

第6群土器 2d [108・217・218・240・243]

蛸塚B式といわれる一群である。108は波状を呈する口縁部片で、波頂部には巻貝工具による刺突を、波状口縁に沿って半截竹管状工具による平行沈線が2条施されている。217は波状口縁で口縁に沿って3本の平行沈線と横位に刺突列が1条認められる。器面調整は巻貝条痕である。218は緩い波状口縁で口縁に沿っての沈線刺突列が1条認められる。240は小波状口縁部で、外面には平行沈線と刺突列が横位に展開する。また口縁端部上面にはヘラ状工具による連続刺突が認められる。243は沈線と刺突列が認められる。

第6群土器 2e [233]

223は緩い波状口縁を呈し、2本一単位の上方弧文が横位に連続して展開する。口縁端部上面には連続した刻目が施されている。

第6群土器 3 [89・94・195・197・230]

晩期隆帯文土器群である。89は波状口縁の波頂部脇から弧状に刻目をもつ隆帯が展開する。94は壺形の器形を呈するもので、頸部に刻目をもつ隆帯が横走する。195は口縁部片で、刻目をもつ貼付隆帯が横位に展開する。197は平縁の口縁部片で刻目を持つ隆帯が長楕円形に貼り付けられている。230はやや直立する器形で、屈曲部には押圧のある貼付隆帯が横位に展開する。

第6群土器 4 [72・265]

晩期中葉船荷山式としたが、第6群土器2までさかのぼる可能性もある。72は直立気味の口縁形状で、口縁端部上面には工具による連続した刻

目が施されているものである。器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。265も直立気味の口縁形状で、口縁端部上面には巻貝工具による連続した刻目が施されているものである。器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。

第6群土器 5 [19・38・39・45・46・50・54・66・67・69・70・80・95・115・130・227・231・232・233・234・269・290・310・347・447]

二枚貝調整およびそこから派生するケズリ調整などが施されている一群である。さらに以下の様に分けられる。

第6群土器 5a [232・233]

西之山式に属するものと考えられる。232は直立した器形の外面に二枚貝条痕、口縁端部上面には二枚貝工具による連続刻みが認められる。233は緩やかな波状を呈する器形で、器形の外面に二枚貝条痕、口縁端部上面では波頂部はつまみ出して作られており、さらに二枚貝工具による連続刻みが認められる。

第6群土器 5b [19・38・39・45・46・50・54・66・67・69・70・80・95・115・130・227・231・234・269・290・310・347・447]

その他、二枚貝条痕調整のある土器を一括した。晩期後葉に属するものが多いと思われるが、一部は晩期前半にさかのぼる可能性もある。

第6群土器 6 [57・191・234・235・336・465]

鉢および浅鉢である。57は胴部片で、外面には平行沈線と縄文LRが施されており、内面の調整はミガキである。191は外面に半截竹管状工具による沈線内に連続刺突が施されているもので、器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。234はくの字屈折する浅鉢で、五貫森式に伴うものと

考えられる。235 は晩期末の浮線網状文のある浅鉢である。465 は外面はナデ・オサエなどの器面調整のみである一方、内面には半截竹管状工具による集合沈線が施されている。また、口縁端部上面には粘土の貼付が認められる。北陸系の浅鉢の影響を受けたものの可能性がある。

第6群土器7【68】

壺もしくは注口土器である。68は胴部片で、玉抱き三叉文、沈線区画内に縄文LRが充填されている。68のみ安行 3a 式など晩期に属するものである。

第6群土器8【114・236】

晩期土器の底部である。

2. 遺構別出土状況 (第1表)

第1表では、主要遺構における群別出土点数を示した。具体的な出土資料については、図キャプション上の注記を参考願いたい。

は、5001SI・5004SI・5044SI・5289SK・
5130SK・5131SK・5425SI・6004SI・
6015SI・6047SI・6049SI・6052SI・6113SI・

第1表

調査区	グリッド	道橋名	第1群 土器	第2群 土器	第3群 土器
			1		
			2		
			3		
			4		
			5		
			1		
			2		
		1			
			1a		
			2		
			3a		
			3b		
			3c		
			4a		
			4b		2
			4c		
			4d		
			4e		
			5a		
			5b		
			5c		
			5d		
			5e		
			6a		
			6b		
			6c		
			7a		
			7b		
			7c		1
			8		
			9		

ることからも、出土は21A区南半分全体と21B区南西側、および22B区でまとまっていることが分かる。

図化報告した分についてのみ主要な縄文土器の出土分布傾向を遺跡全体図に示す。全体の統計処理などについては、第5章で提示することとするが、堅穴建物跡が密集して調査された地区での遺物出土のほかに、水田関連遺構内からの出土も多い。水流など流れ込みによる二次的作用も受けているものもあると思われるが、耕作土（特にその最下層）と遺物包含層との層的境界は漸移的であ

[illegible]

第1表

[illegible]

縄文土器・弥生土器 主要遺構出土点数一覧(2)

調査区	グリッド	遺構名																
第4群 土器	1a																	
	1b																	
	1c																	
	1d																	
	1e																	
	2																	
	3a																	
	3b																	
	3c																	
	4a																	
第5群 土器	4b	1																
	5a																	
	5b																	
	6																	
	7																	
	8																	
	9																	
	1a																	
	1b																	
	第6群 土器	2a																
2b																		
2c		1																
3a		1																
3b																		
3c																		
3d																		
4a																		
4c																		
5a		1																
弥生土器	5b																	
	5c																	
	6a																	
	6b																	
	7																	
	8																	
	9																	
	10																	
	1a																	
	1b																	
未掲載 縄文土器	1c																	
	1d																	
	1e																	
	2a																	
	2b																	
	2c																	
	2d																	
	2e																	
	3																	
	4																	
弥生土器	5a																	
	5b																	
	6																	
	7																	
	8																	
	9																	
	10																	
	11																	
	12																	
	13																	
未掲載 弥生土器	14																	
	15																	
	16																	
	17																	
	18																	
	19																	
	20																	
	21																	
	22																	
	23																	

第2節 弥生土器

1. 概要

本節では、弥生時代から古墳時代前期にかけての土器を扱う。なお本遺跡における弥生時代の土器は、弥生時代の遺構分布が縄文時代の遺構分布と重複していることから、完全に分離することができないため、縄文時代の土器の中で取り扱い、弥生時代に属すると考えられるものは、それぞれの解説部分において記述する。当遺跡の弥生土器・古式土師器は27リットルコンテナにおよそ2箱出土しており、古墳時代前期の古式土師器は弥生土器に比べて圧倒的に少ない。またそのほとんどが小片であり、完形品の出土はない。

2. 弥生土器

大崎遺跡出土の弥生土器は、弥生時代前期（水神平式）から弥生時代中期前半までのものが主体で、古墳時代前期の特徴を持つ古式土師器は少ない。弥生時代前期から弥生時代中期前半にかけての弥生土器は主に太頸壺と深鉢がある。ここで報告する弥生土器は、外面の調整・施文の形状から二枚貝の貝殻復縁を利用した貝殻条痕調整・施文土器と櫛状の植物束と思われる原体を利用した櫛条痕調整土器に分かれ、どちらの土器も内面は横ナデとナデ・指オサエで調整されている。貝殻条痕調整・施文土器には太頸壺と深鉢があり、櫛条痕調整土器には深鉢がある。貝殻条痕調整・施文太頸壺は平底の底部から体部上半にふくらみをもって立ち上がり、体部上半の肩部ですばまる部分から屈曲せず緩やかに頸部が立ち上がって口縁部が外反する。貝殻条痕調整・施文深鉢は平底の底部からやや丸みをもって立ち上がり、口縁部がやや内湾する砲弾形のもので平底の底部からやや丸

みをもって体部がひらいて口縁部が外反するものがある。櫛条痕調整・施文深鉢は、平底の底部からやや丸みをもって体部がひらいて口縁部が外反する。

21A 区 0060SX (1001・1002) 1001・1002 は貝殻条痕調整深鉢で、1001 は底部、1002 は砲弾形の深鉢の口縁部で、1001 は弥生時代中期前半のものと思われる。

21A 区 0142SN・0170SN (1003) 貝殻条痕調整の口縁部が外反してひらく深鉢の口縁部片で、口縁部下は横方向の貝殻条痕調整、口縁端部を外側に少し屈折させて折り返す、弥生時代中期前半のもの。

21A 区 0151SN・0155SN (1004・1005) 1004 はやや先底気味の深鉢底部片で、外面は横ハケ、内面はナデ調整がみられる。1005 は弥生時代前期の壺の口縁部片で、内面に横ハケ調整が残る。

21A 区 0170SN (1006) 弥生時代中期前半の深鉢の口縁部片で、外面は条痕調整、内面は横ナデ調整である。

21A 区 0199SN (1007) 弥生時代前期の深鉢の体部片で、外面は左上がり斜めの貝殻条痕調整後垂下する貝殻直線文3条がみられる。

21A 区 5001SI (1008) 貝殻条痕調整太頸壺の口縁部片で、口縁端部外面に刻みのある突帯を巡らせる。口縁部上端面にも貝殻条痕による押し引き文がみられる。

21A 区 5014SI (1009～1036) 1009 は弥生時代中期前半の貝殻条痕調整・施文太頸壺で横貝殻条痕後に頸部の貝殻条痕波状文、口縁部上端面に貝殻刻みがみられる。1010 は弥生時代

前期の貝殻条痕施文太頸壺の頸部で貝殻施文による波状文が上から3帯めぐる。1011は貝殻条痕調整太頸壺の頸部片で横貝殻条痕調整がみられる。1012は弥生時代中期前半の貝殻条痕調整深鉢の底部から体部片で、外面は左上がり斜めの貝殻条痕調整がみられる。1013～1018は弥生時代前期～弥生時代中期前半の貝殻条痕調整深鉢の口縁部片で、口縁部上端面に横貝殻条痕調整がみられる。1013～1016は弥生時代前期、1017・1018は弥生時代中期前半のものと思われ、1018の口縁部にはつまみ状の盛り上がりがあり、口縁部内面の上端面際に右上がり斜め貝殻条痕刻みかめぐる。1019～1024は弥生時代中期前半の深鉢口縁部片で、1019・1022～1024は貝殻条痕調整のもの、1020・1021は櫛条痕調整のもので、口縁部上端面は1020・1023に貝殻刻み、1021に櫛条痕刻み、1022に貝殻刺突文、1024に貝殻押し引き文がみられる。口縁部端面際には1019・1024に右上がり斜め貝殻条痕、1023に貝殻波状文がめぐる。1025・1028は貝殻条痕調整太頸壺の体部片で、1025が体部下半部、1028は体部上半部で、1025は弥生時代前期のものと思われる。1026は条痕調整の深鉢の口縁部片、内面に突帯がめぐる。1027は貝殻条痕調整深鉢で体部下半の底部際部分、1029・1030・1034・1035は貝殻条痕調整深鉢の体部片、1031はハケ調整甕で体部下半の底部際部分、1032・1033は貝殻条痕調整深鉢の口縁部の下部分である。1036は深鉢の底部片で、内・外面の表面が摩滅して調整は不明である。

21A区 50065P (1037) 弥生時代前期の貝殻条痕調整の深鉢の体部下半の底部際部分である。

21A区 50445I (1038～1040) 1038は弥

生時代前期の横ナデ調整の深鉢片、1039・1040は弥生時代前期の貝殻条痕調整深鉢の口縁部片で、外面に横貝殻条痕調整が残る。

21A区 50455K (1041) 貝殻条痕調整・施文太頸壺の体部上半の部分で、弥生時代中期後半になるか。

21A区 50485K (1042・1043) 1042は貝殻条痕調整の砲弾形の深鉢の口縁部片で、口縁部上端面に櫛状刺突文がみられる弥生時代中期前半のもの、1043は左上がり斜めの貝殻条痕調整がみられる深鉢の体部下半の底部際部分で、弥生時代前期のものと思われる。

21A区 50505I (1044～1047) 弥生時代中期前半の貝殻条痕調整のもので、1044・1045・1047は深鉢で、1044は内面口縁部上端面際に右上がり斜め貝殻条痕がめぐる。1045は口縁部上端面に貝殻刻みを施す、1047は底部片である。1046は内傾口縁土器で、口縁部内面に粘土を折り返し、内傾する口縁部がやや肥厚している、内面は横ナデ・ナデ調整がみられる。

21A区 50545I (1048) やや薄手の砲弾形深鉢の口縁部片で、口縁部上端をわずかに外反させる。弥生時代前期のものと思われる。

21A区 50555I (1049) 弥生時代中期後半以後の甕の頸部片で、内・外面に横ハケ調整がみられる。

21A区 50775N (1050) 貝殻条痕調整の砲弾形深鉢の口縁部片で、弥生時代前期のものか。

21A区 50785K (1051・1052) 貝殻条痕調整の深鉢の口縁部片で、弥生時代前期のものと思われる。1051の口縁部上端面に横貝殻条痕調整がみられる。

21A区 51215N (1053・1054) 1053は弥生時代前期の横貝殻条痕調整・横ナデ調整の深鉢の

口縁部片で、口縁部外面に2条1単位の併行沈線文が左回りにめぐる。1054は左上がり斜め貝殻条痕調整の深鉢の底部で、弥生時代中期のものと思われる。

21A区 51225N (1055) 弥生時代前期の櫛条痕調整の深鉢で、口縁部内面側の端部に刻みをめぐらせる。

21B区 52895X (1056) 貝殻条痕調整の砲弾形の深鉢で、弥生時代前期のものと思われる。

21A区 53515N (1057) 貝殻条痕調整の深鉢で、口縁部が外反するもので、弥生時代前期のものと思われる。

21A区 53615I (1058・1059) 貝殻条痕調整の深鉢で、口縁部が外反してひらく。1058は口縁部上端面に横貝殻条痕、1059は口縁部上端面に櫛状刻みがみられる。弥生時代前期のものと思われる。

21B区 53815N (1060) 貝殻条痕調整の深鉢の底部で、底部径8.8cm。弥生時代前期のものと思われる。

21B区 53845N (0161) 貝殻条痕調整の深鉢の口縁部で、横貝殻条痕調整後体部に横ナデを行う。弥生時代前期のものと思われる。

21B区 54255I (1062・1063) 1062は貝殻条痕調整の深鉢の口縁部片で、口縁部がやや内面側に屈折しておわる。口縁部上端面に横貝殻条痕がみられる。1063は右上がり斜めハケ調整の甕の底部片で、内面はナデ・横ナデである。底部径8.0cm。1062・1063は弥生時代前期のものと思われる。

21A区検出1 (1064～1067・1069～1079) 1064～1066・1068・1071・1072は貝殻条痕調整の口縁部が外反する深鉢で、1064・1066は左上がり斜め貝殻条痕調整のもの、1068・

1071・1072は横貝殻条痕調整のものである。

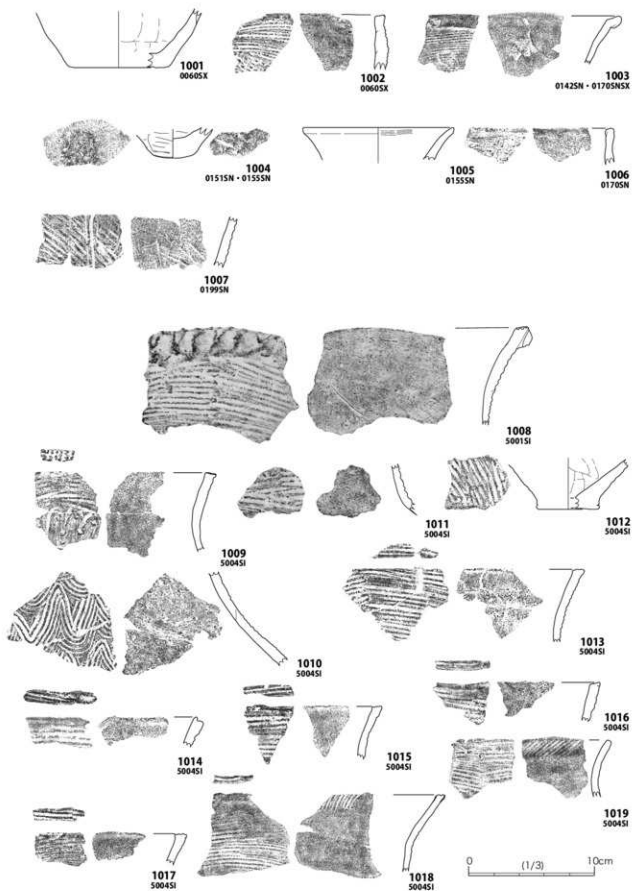
1065は貝殻条痕調整の砲弾形の深鉢で、体部の左上がり斜め貝殻条痕調整後、口縁部にヨコ貝殻条痕調整を施す、弥生時代前期のものと思われる。

1072は外反する口縁部の端部を内面側に折り返しており、上端面に貝殻刻みがみられる。1070は外反する口縁部をもつ深鉢で、外面は表面が磨減して調整が不明であるが、内面は横ハケ調整がみられる。1073は外面タテ綾杉条痕調整の深鉢の体部片である。1074壺の底部で外面横貝殻条痕調整とナデ調整、内面はナデ・横ナデ調整、1075・1076は深鉢の底部で、1075は内・外面がナデ・横ナデ調整のもの、1076は外面が横条痕調整、内面が横ナデ調整である。

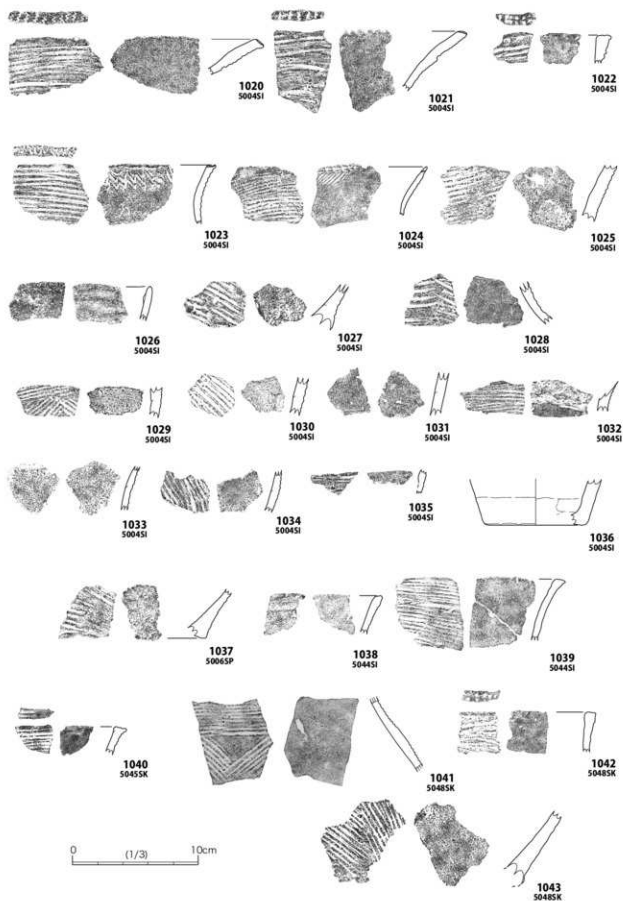
1069・1077～1079は内傾口縁土器で、外面が横貝殻条痕調整、内面は横ナデ・ナデ調整がみられる。口縁部がやや肥厚する傾向がみられ、全体に粘土組織み上げ痕が残る。1064～1067・1069・1073～1076は弥生時代前期のもの、1070～1072・1077～1079は弥生時代中期前半のものである。

21A区表採 (1068・1080) 1068は弥生時代前期の横貝殻条痕調整のある深鉢で、外反する口縁部の端部を内面側に折り返している。1080は弥生時代後期以後の台付甕の脚部で、外面はナデ調整、内面はハケ調整のものである。

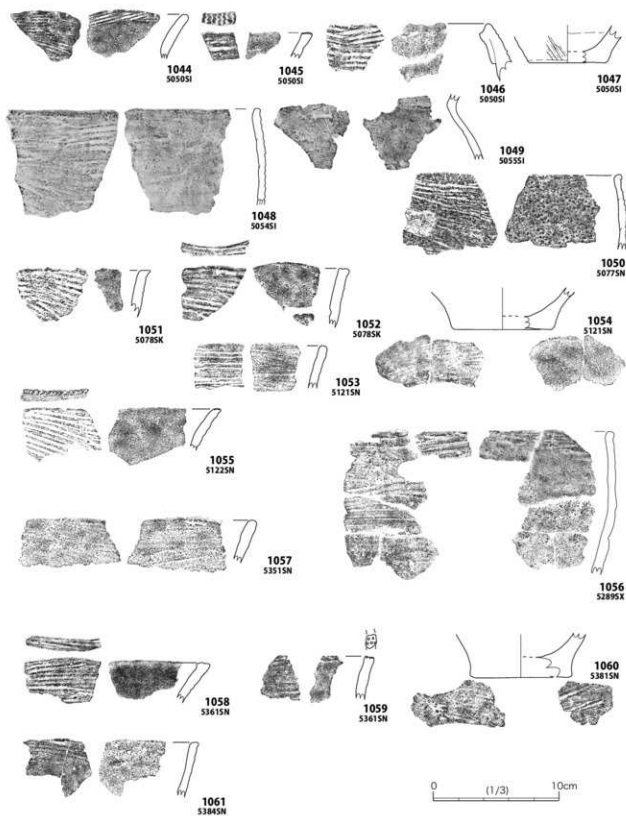
21B区検出1 (1081～1086) 弥生時代中期前半は口縁部が外反する深鉢で、1081は外面横櫛状の条痕調整で、口縁端部を横ナデ調整で仕上げる。1082は外面横条痕調整、1083は外面タテ綾杉条痕調整、1084は外面タテ綾杉貝殻条痕調整で口縁部上端面を貝殻押し引き文、1085は外面横貝殻条痕調整で口縁部上端面を貝殻条痕押し引き文、1086は外面左上がり斜め貝殻条痕調



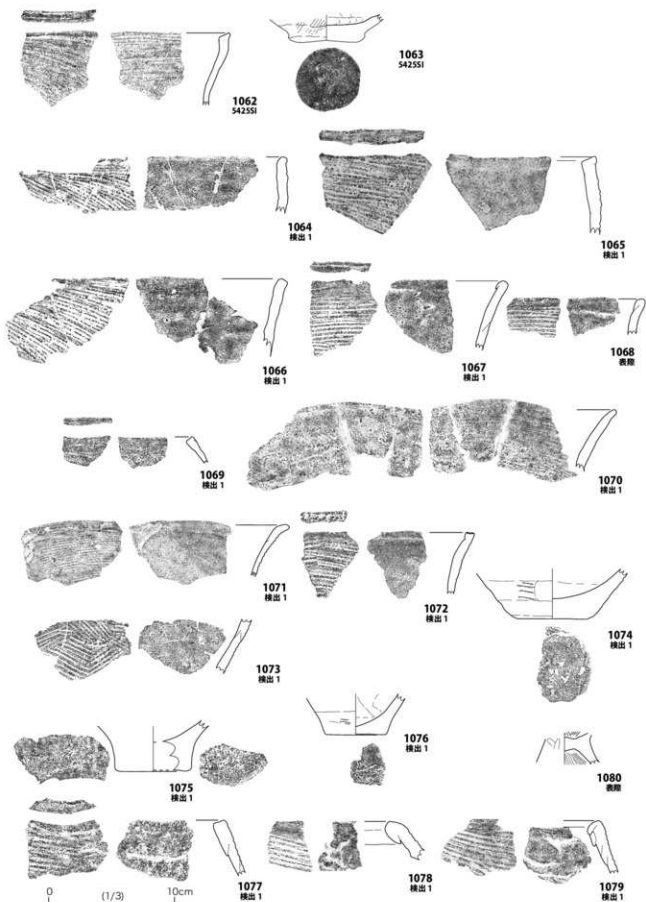
第 75 図 弥生土器 1



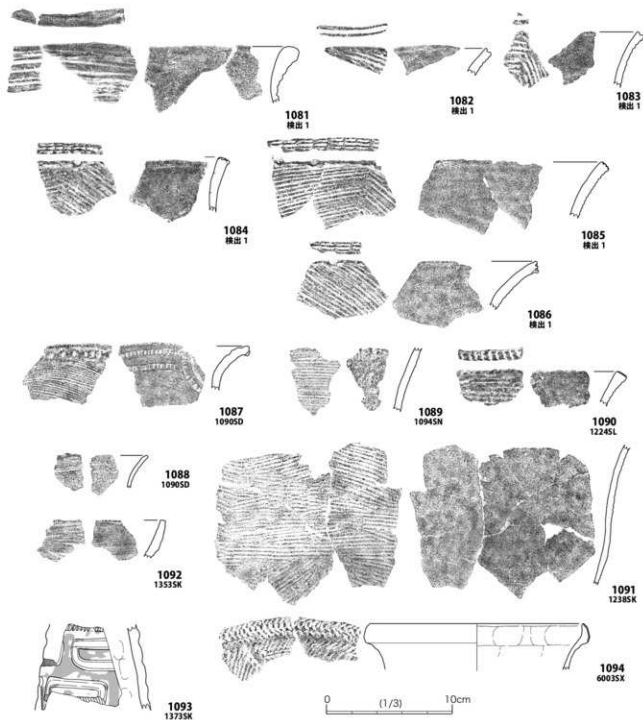
第 76 図 弥生土器 2



第 77 図 弥生土器 3



第 78 図 弥生土器 4



第 79 図 弥生土器 5

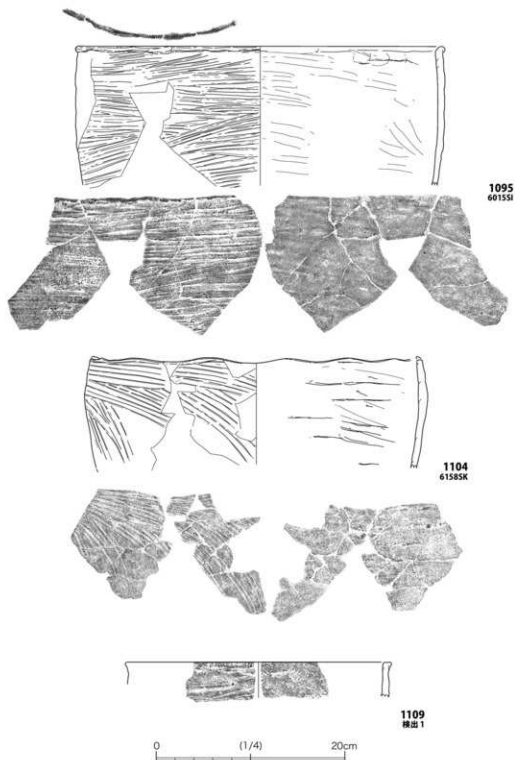
整で口縁部上端面を貝殻押し引き文がみられる。

22A 区 1090SD (1087・1088) 1087 は貝殻条痕調整の壺で、口縁部下端に刻み、内面口縁部にへう状押し引き文 2 条と直線文と弧文がある。1088 は貝殻条痕調整の深鉢で、口縁部が外反する。弥生時代中期のものと思われる。

22A 区 1094SN (1089) 横貝殻条痕調整の深鉢の体部片で、弥生時代中期と思われる。

22A 区 1224SL (1090) 横貝殻条痕調整の口縁部が外反する深鉢で、弥生時代前期のものと思われる。口縁部上端面に貝殻刻みがみられる。

22A 区 1238SK (1091) 貝殻条痕調整の深鉢



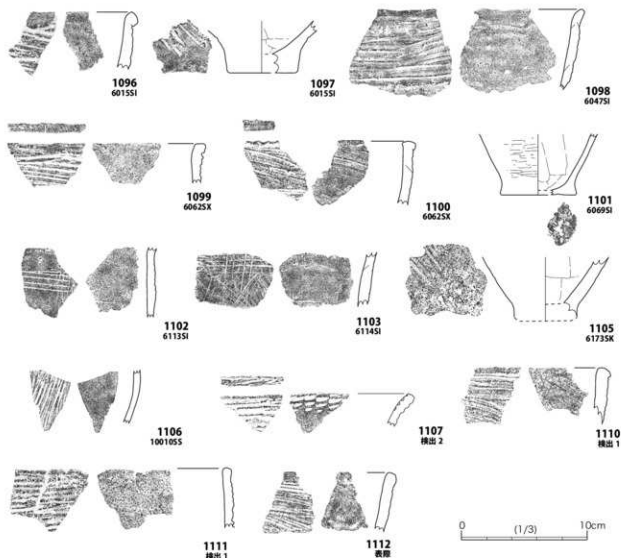
第80図 弥生土器6

の体部で、体部上半は横貝殻条痕調整、体部下半はタテ綾杉貝殻条痕調整のものである。弥生時代中期のものと思われる。

22A区 1353SK (1092) 外面横貝殻条痕調整の深鉢の口縁部片で、弥生時代中期のものと思わ

れる。

22A区 1373SX (1093) 弥生時代中期前半の嶺田式の壺の頸部で、口縁部にかけてすぼまるものである。外面に太い沈線で横長の長方形文が2段でみられ、長方形の下線部分を刻みで表わされ



第 81 図 弥生土器 7

る。沈線の間はミガキ調整され、全体に赤彩が残る。内面はナデ・指押さえて整えられている。

22B 区 60035X (1094) 受口口縁の太頸壺、外面頸部に右上がり斜めの貝殻条痕調整、内面は横ナデ調整がみられる。口縁端部に横羽状貝殻刻みがめぐる。口縁部径 22.4cm を測る。

22B 区 60155I (1095 ~ 1097) 1095・1096 は貝殻条痕調整の砲弾形の深鉢である。外面は横貝殻条痕調整で、口縁端部を外側に小さく外反させる。1095 は口縁部径 38.4cm を測る。1097 は貝殻条痕調整の深鉢の底部である。弥生

時代前期のものと思われる。

22B 区 60475I (1098) 外面横貝殻条痕調整の深鉢で、口縁部が緩やかにひらく。弥生時代前期のものと思われる。

22B 区 60625X (1099・1100) 貝殻条痕調整の砲弾形深鉢で、外面は横から左上がり斜めの貝殻条痕調整がみられる。

22B 区 60695I (1101) 弥生時代中期後葉の甕で、外面は横ミガキカナデの調整、内面は横ナデがみられる。底部径 8.0cm。

22B 区 61135I (1102) 遠賀川式の甕で、外

面は横ナデ調整の後、2本1組の沈線文2帯が口縁部下をめぐる。

22B区 61145I (1103) 甕の体部片で、外面に左上がり斜めの貝殻条痕かハケ調整後、上から2本1組2帯の直線文、2本1組2帯の鋸歯文、2本1組2帯の垂下直線文がみられる。内面は横ナデ調整である。弥生時代中期のものと思われる。

22B区 61585K (1104) 貝殻条痕調整の砲弾形深鉢で、外面は体部の左上がり斜め貝殻条痕調整後口縁部の横貝殻条痕調整がみられる。口縁部径34.8cmをはかる。弥生時代前期のものと思われる。

22B区 61735K (1105) 貝殻条痕調整の深鉢で、底部径は約6.0cmである。

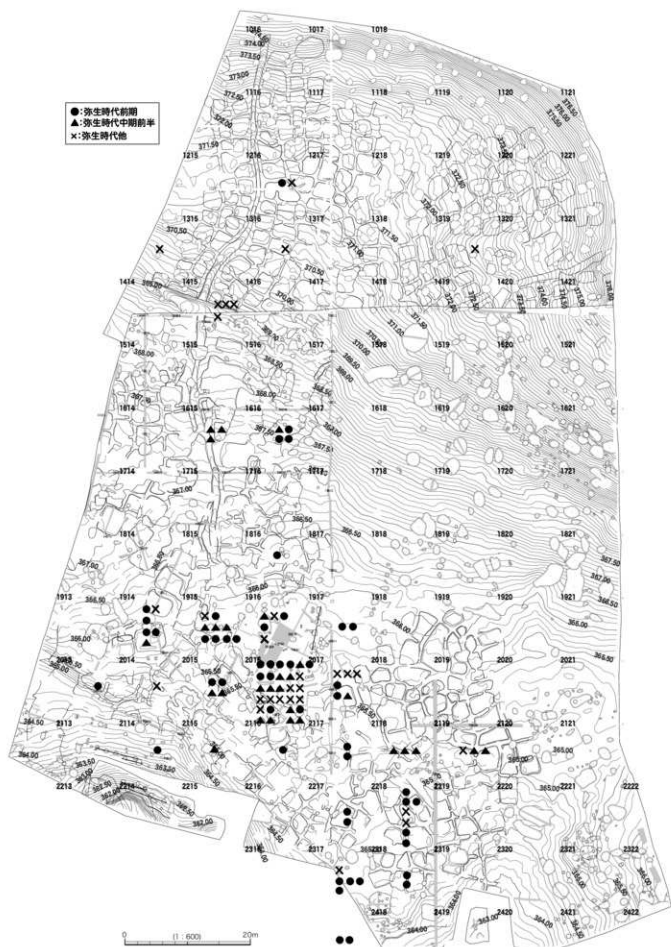
22A区 100105S (1106) 弥生時代中期後半の右上がり斜めハケ調整の甕である。内面は縦ナデ調整がみられる。

22A区検出2 (1107) ヨコ櫛条痕調整の深鉢で、弥生時代中期のものである。内面はヨコナデ調整で、口縁部上端下に櫛条痕刺突文列(4点1組)がめぐる。口縁部上端面にはヨコ櫛条痕がみられる。

22B区検出2 (1108) 弥生時代前期の深鉢で、外面ナデ調整後沈線の直線文2条と垂下直線文3条が施される。

22B区検出1 (1109～1111) 弥生時代前期の貝殻条痕調整の砲弾形深鉢で、外面はヨコ～左上がり斜め貝殻条痕調整がみられる。口縁部端部が小さく外反しておわる。1109は内面ヨコナデ調整で、粘土紐接合痕が残る、1110は内面左上がり斜め貝殻条痕調整のものである。

22B区表採・A区西側 (1112) 弥生時代前期のヨコ貝殻条痕調整の深鉢で、内面は左上がり斜めのナデ調整がされる。



第 82 図 弥生土器出土分布図

第3節 石器・石製品

石器に関しては石鏃、石匙、石錐、スクレーパー類、楔形石器、加工痕のある剥片、剥片、石核、礫器、打製石斧、磨製石斧、石錘、凹石、磨石・敲石類、砥石を確認した。器種名、【総点数】、登録番号の順に記載する。

1 石器

(1) 石鏃【総計29】

33、35、40、52、62、63、64、65、67、68、72、74、75、77、78、79、80、81、82、83、84は石鏃である。基部が残存しているものの多くが無茎凹基で、83、84は無茎平基、40は円基である。62、68、78は素材剥片の主要剥離面を残している。40、84は厚みのある剥片を用いている。

石材は黒曜石13点(35、62、63、65、68、72、77、78、80、81)、安山岩1点、凝灰岩2点、溶結凝灰岩11点(40、52、64、67、75、79、82、83、84)、下呂石2点(33、74)である。

(2) 石匙【総計9】

9、71、73、85、86、87は石匙である。9、73、87は縦長、71、85、86は横長の形状を呈している。71は縦長剥片、9、86は横長剥片を素材としていと考えられる。

石材は、安山岩3点(9、85)、溶結凝灰岩4点(71、86、87)、泥質凝灰岩2点(73)である。

(3) 石錐【総計4】

1、18、41、42は石錐である。18、42は機能部に、1、40は全縁に加工が施されている。1は加工によって上部につまみを作出している。18、42は縦長剥片を素材としている。

石材は黒曜石2点(41、42)、安山岩1点(1)、溶結凝灰岩1点(18)、である。

(4) スクレーパー類【総計35】

25、26、76、88、89、90、91、92、93、94はスクレーパー類である。スクレーパー類とした石器の半数近くが最大長5cm超、最大厚1cm前後となっており、大形でやや厚みのある剥片を素材としていたと考えられる。

石材は、黒曜石2点、安山岩13点(76、93)、溶結凝灰岩13点(88、89、90、91、92、94)、泥質凝灰岩6点(25、26)である。

(5) 楔形石器【総計3】

95は楔形石器である。やや厚みのある素材剥片の周縁を加工している。

石材は黒曜石2点(95)、泥質凝灰岩1点である。

(6) 加工痕のある剥片【総計203】

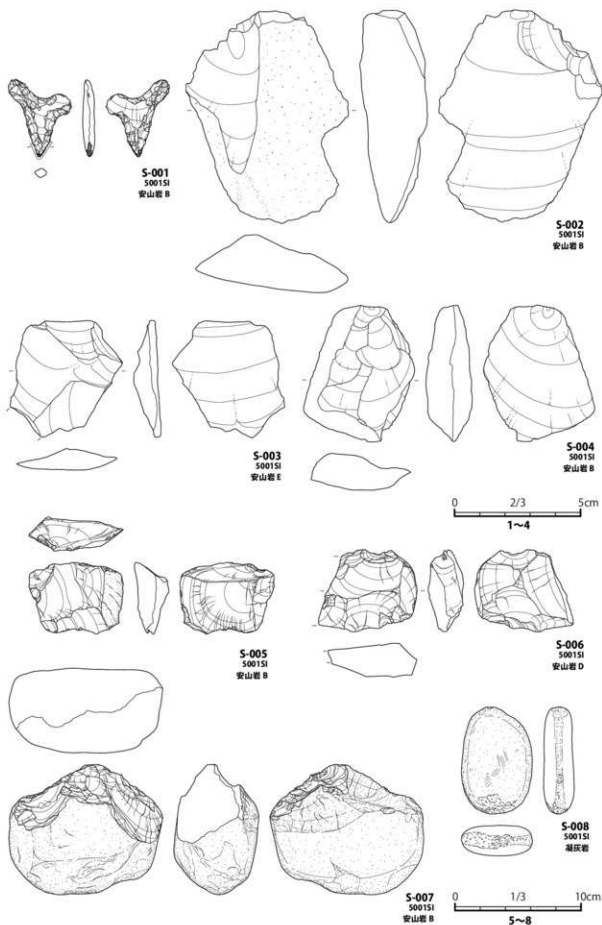
2、19、36、53は加工痕のある剥片である。2、36は原礫面を大きく残す大形の剥片を素材としている。26は原礫面を残す剥片の両側縁を表から裏への連続した剥離を施している。

石材は黒曜石13点、安山岩107点(2)、溶結凝灰岩47点(19、53)、泥質凝灰岩20点(36)、砂質凝灰岩6点、凝灰岩6点、下呂石1点、凝灰質泥岩2点、片麻岩1点である。

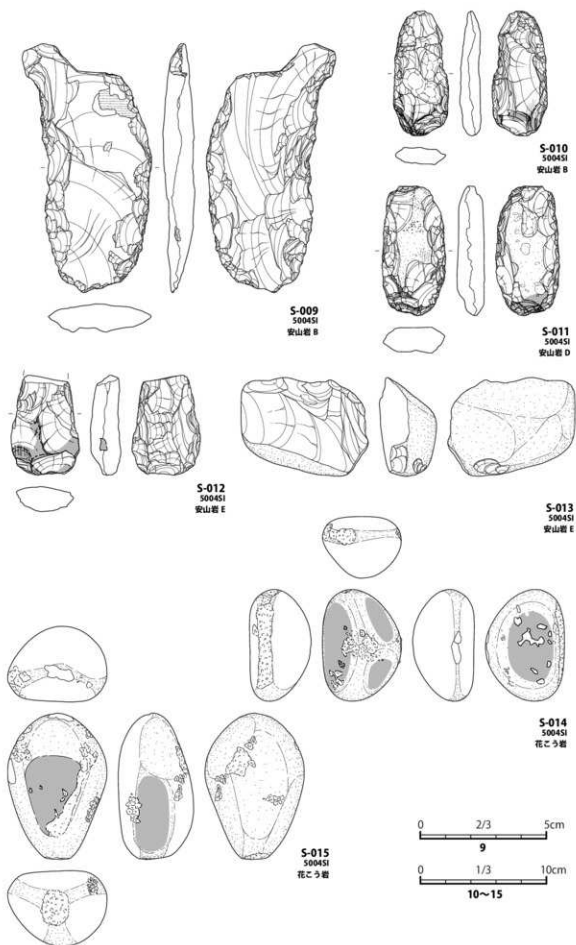
(7) 剥片【総計1784】

3、4、20、27、32、43、44、45、46、47、54、58、60、61は剥片である。4、20、43、46、47は縦長剥片、3、28、32、44、45、54、58、60、61は不定形の剥片である。4、27、61は原礫面を残している。

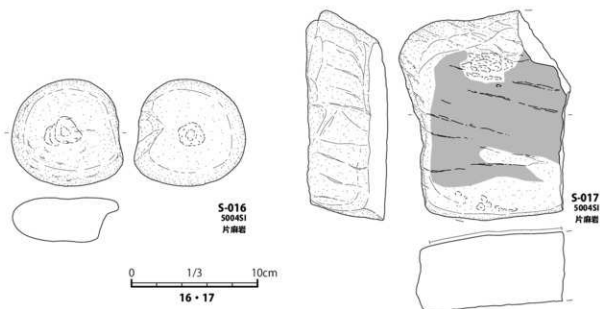
石材は黒曜石105点、安山岩1430点(3、4、28、32、45、54、61)、溶結凝灰岩365点(20、46、47)、泥質凝灰岩175点(44、58)、砂質



第 83 圖 5001SI 出土石器



第 84 図 5004SI 出土石器 1



第 85 図 5004SI 出土石器 2

凝灰岩 57 点、凝灰岩 76 点 (43)、凝灰質泥岩 7 点、凝灰質砂岩 4 点、下呂石 21 点、泥岩 3 点チャート 4 点 (60)、片麻岩 4 点、アプライト 2 点、松脂岩 1 点である。

(8) 石核【総計 309】

5、6、7、13、22、23、24、31、34、37、48、59、96 は石核である。7、13、22、24、31、34、37、59 は原礫面を残している。5、6、22、23、24、31、34、48、96 はさまざまな方向から剥離が行われる。13、59 は縁辺から剥片剥離を行っている。7、37 は礫器の可能性ある。

石材は安山岩 215 点 (5、6、7、13、22、23、24、31、34、37、59、96)、黒曜石 17 点 (48)、溶結凝灰岩 42 点、泥質凝灰岩 24 点、砂質凝灰岩 3 点、凝灰岩 5 点、下呂石、凝灰質砂岩 1 点、チャート 1 点である。

(9) 打製石斧【総計 143】

10、11、12、27、38、55、56、70、97、98、99、10、101、102、104、105、106、107、108、109、110、111、112 は打製石斧である。28、97、98 は分銅型、11、99、101、

102、103、107 は短冊型、10、12、100、108 は撥型、55、56、70、104、105、106、109、110、111、112 は不明である。38 は未製品と考えられる。

石材は安山岩 114 点 (10、11、12、56、70、97、98、102、103、106、107、108、109、110、111)、溶結凝灰岩 14 点 (55、99、100、104、105、112)、泥質凝灰岩 9 点 (28、101)、砂質凝灰岩 4 点 (38)、凝灰質砂岩 1 点、緑色片岩 1 点である。

(10) 磨製石斧【総計 12】

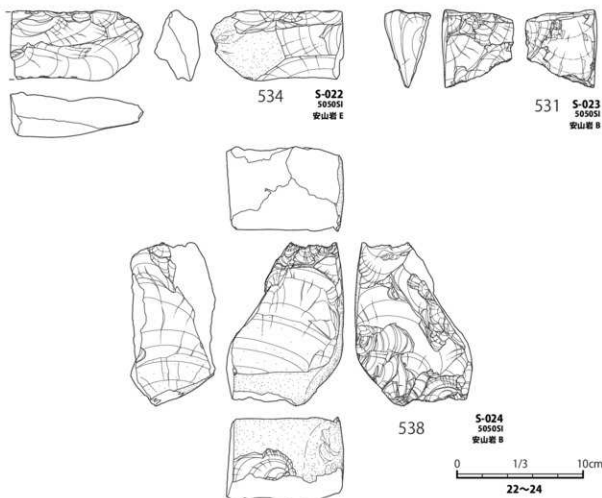
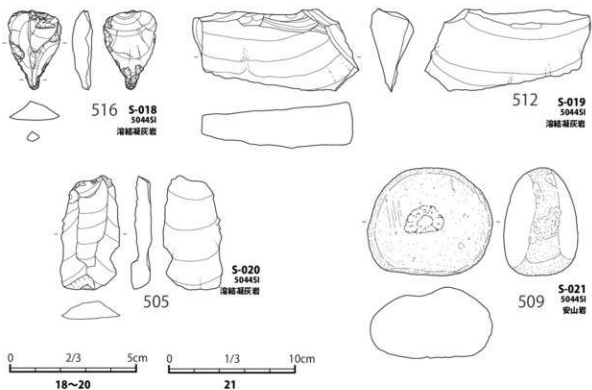
50、66、69、113、114、115、116、117、118 は磨製石斧である。66、69、113、114 は定角式、50、112、115、116、117、118 は乳棒状の石斧である。

石材は塩基性岩 8 点 (49、66、69、115、116、117、118)、蛇紋岩 1 点 (113)、閃緑岩 1 点、緑色片岩 1 点、滑石 1 点 (114) である。

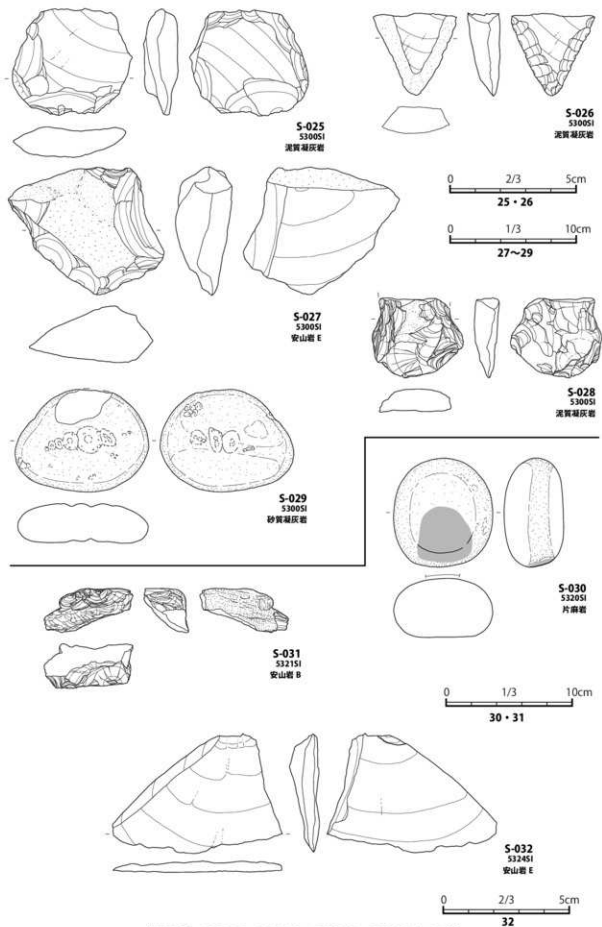
(11) 礫器【総計 3】

石材は安山岩である。

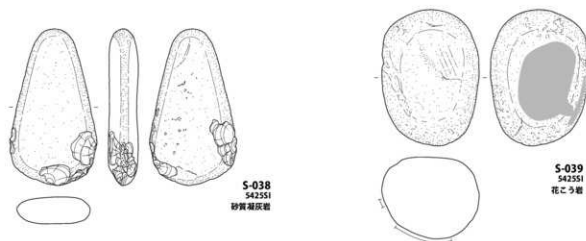
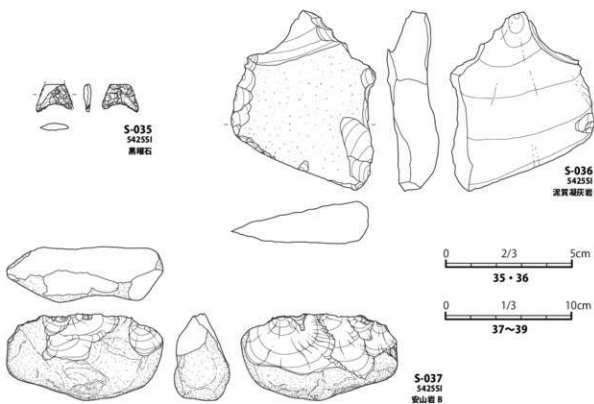
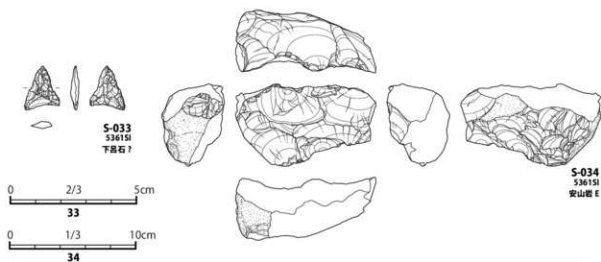
(12) 石錘【総計 26】



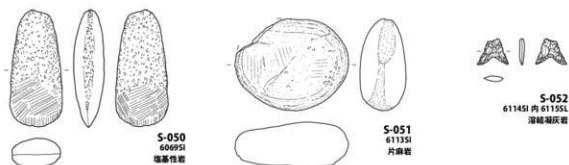
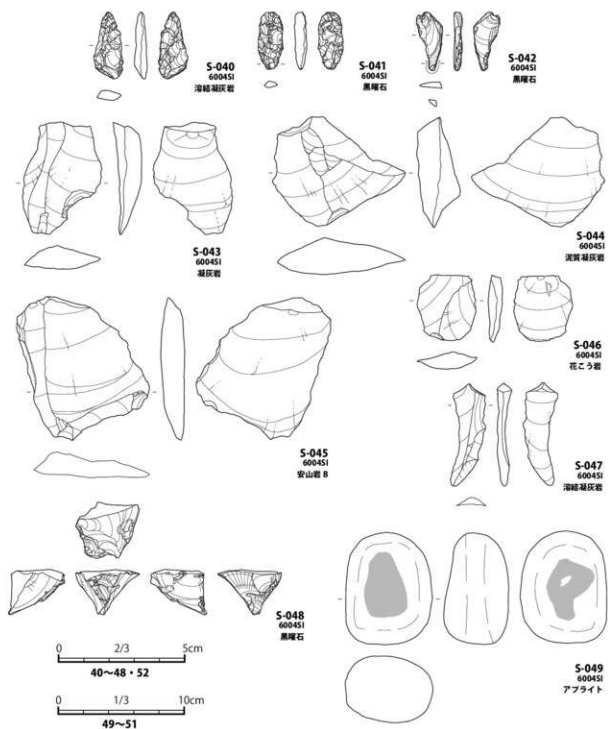
第 86 図 5044SI・5050SI 出土石器



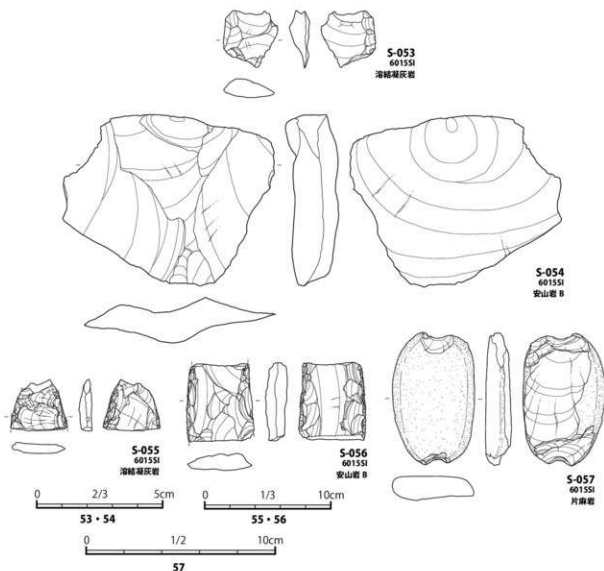
第 87 圖 5300SI・5320SI・5321SI・5324SI 出土石器



第 88 図 5361SI・5425SI 出土石器



第 89 図 6004SI・6069SI・6113SI・6115SL 出土石器



第90図 6015SI出土石器

57、119、120、121、122、123、124、125、126、127、128は石鍾である。57、125は打欠石鍾、119、120、121、122、123、124は切目石鍾、126、127、128は有溝石鍾である。127は研磨が顕著で、ススのようなものが付着している。

石材は安山岩2点(119)、溶結凝灰岩1点、凝灰岩6点(121、125)、泥質凝灰岩1点、砂質凝灰岩2点(124、127)、凝灰質泥岩1点、塩基性岩5点(120、126)、閃緑岩1点(128)、片麻岩7点(57、122、123)である。

(13) 凹石【総計37】

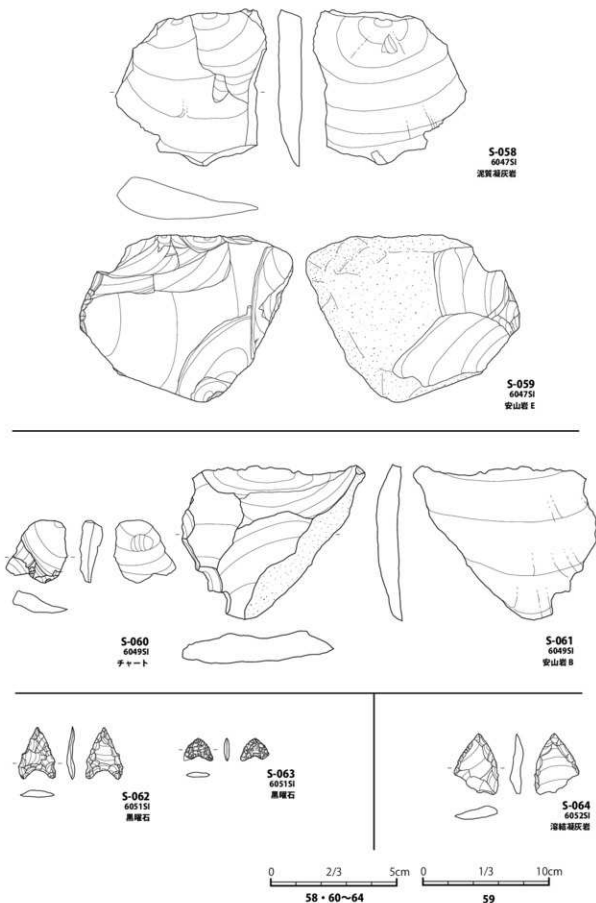
16、21、29、136、137は凹石である。16、29、137は表裏に凹みが見られる。

石材は安山岩9点(21)、泥質凝灰岩1点、砂質凝灰岩4点(29)、凝灰岩1点、凝灰質砂岩2点(137)、閃緑岩2点、花崗岩2点、片麻岩16点(16、136)である

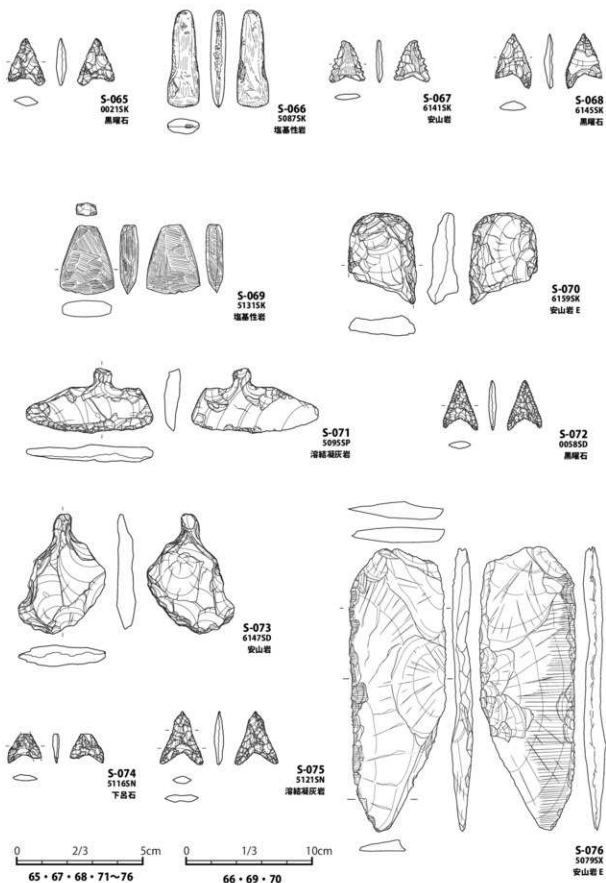
(14) 磨石・敲石類【総計177】

8、14、15、30、39、49、51、129、130、131、132、133、134、135は磨石・敲石類である。

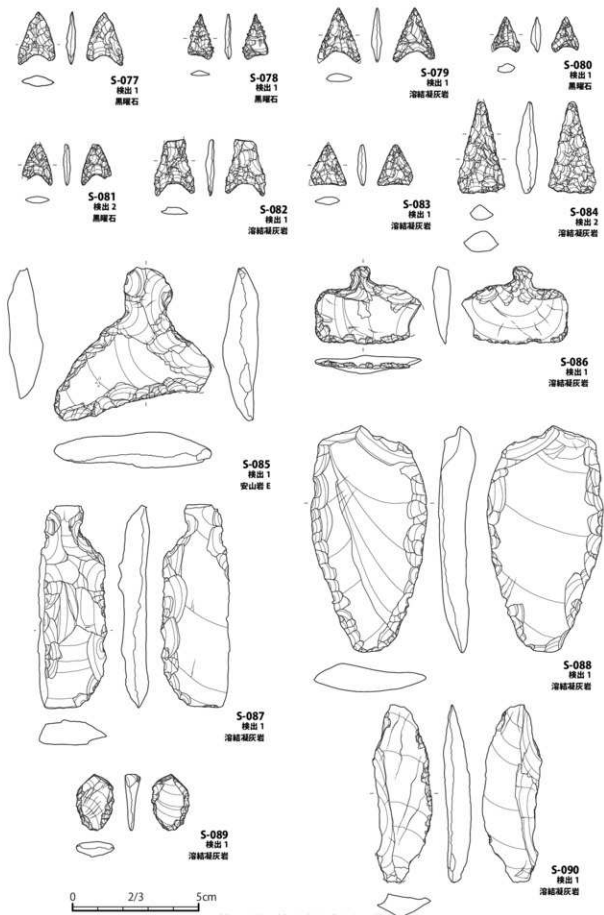
石材は安山岩36(135)、泥質凝灰岩2点、砂質凝灰岩18点、凝灰岩11点(8)、凝灰質泥岩1点、凝灰質砂岩5点、頁岩1点、砂岩1



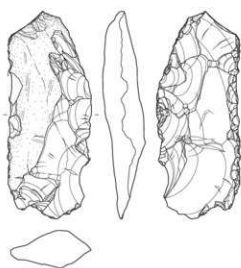
第 91 図 6047SI・6049SI・6051SI・6052SI 出土石器



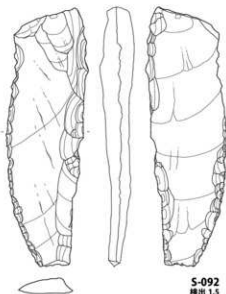
第 92 図 土坑内出土石器



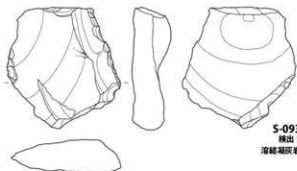
第 93 図 検出時など出土石器 1



S-091
検出 1
溶結凝灰岩



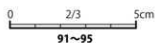
S-092
検出 1.5
安山岩 B



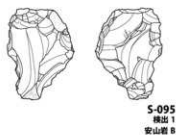
S-093
検出 1
溶結凝灰岩



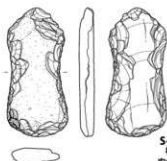
S-094
検出 1
黒曜石



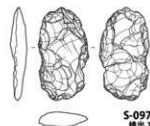
91~95



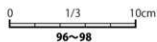
S-095
検出 1
安山岩 B



S-096
検出 1
安山岩 E

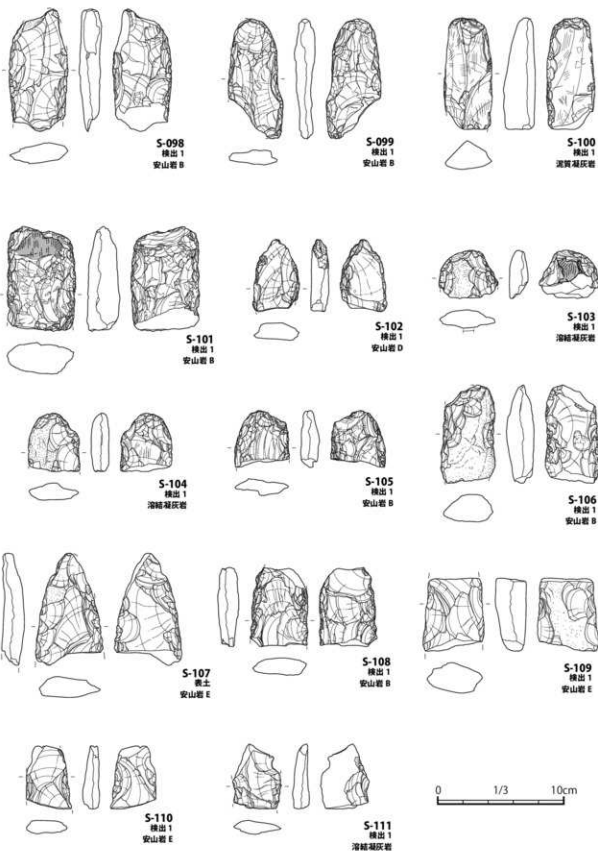


S-097
検出 1
安山岩 D

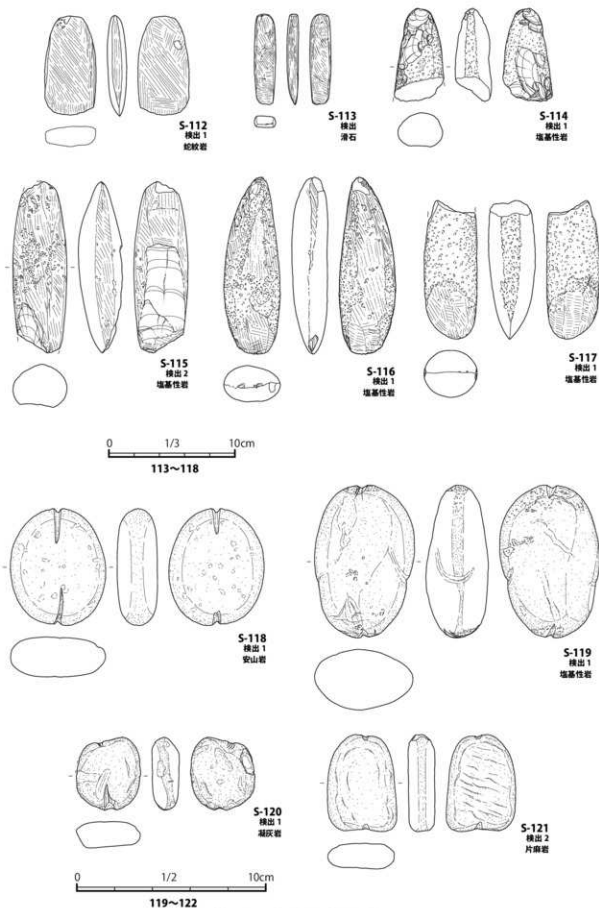


96~98

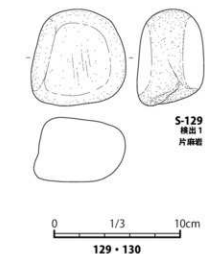
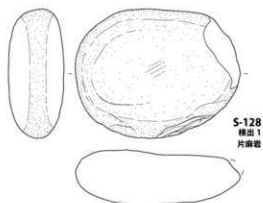
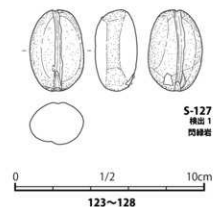
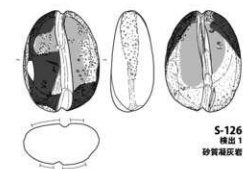
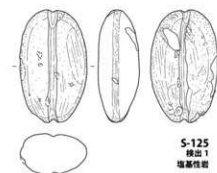
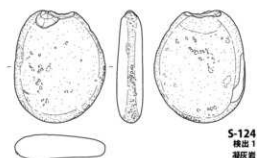
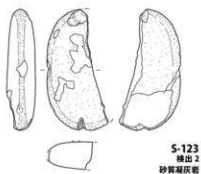
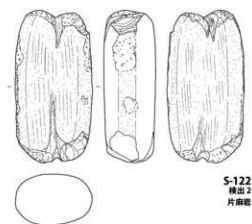
第 94 図 検出時など出土石器 2



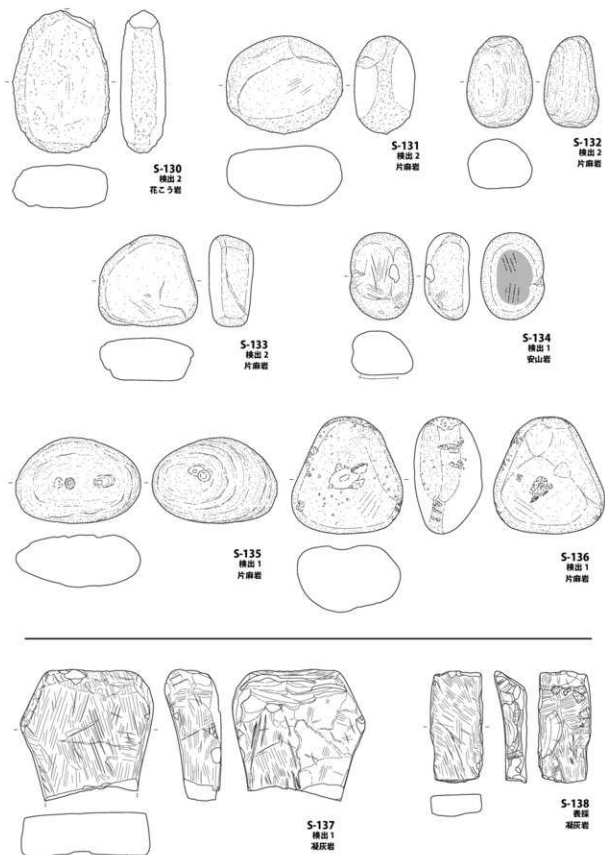
第 95 図 検出時など出土石器 3



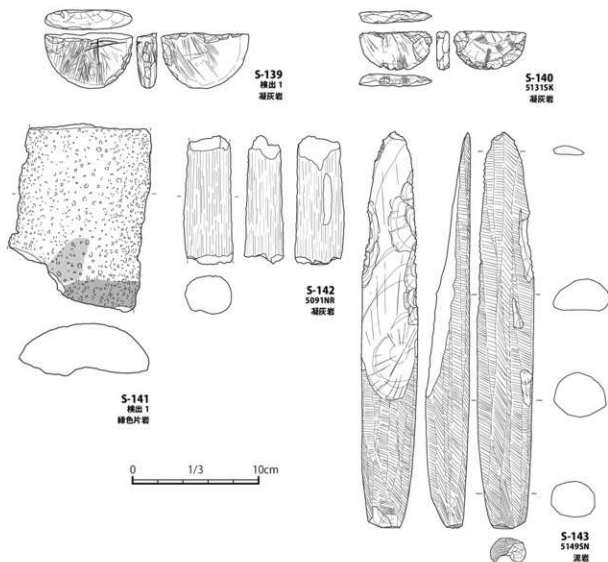
第 96 図 検出時など出土石器 4



第 97 図 検出時など出土石器 5



第 98 図 検出時など出土石器 6



第99図 石製品

点、閃緑岩3点、片麻岩69点(30、51、129、130、132、133、134)、花崗岩16点(14、15、39、131)、アブライト14点(49)である。

(15) 砥石【総計数17】

17、138、139は砥石である。石材は安山岩1点、泥質凝灰岩2点、砂質凝灰岩3点、凝灰岩5点(138、139)、凝灰質泥岩1点、17は片麻岩5点(17)、である。

(16) 石皿台石類【総計数63】

石材は安山岩3点、砂質凝灰岩1点、砂岩1点、片麻岩43点、花崗岩10点、アブライト5点

2 石製品

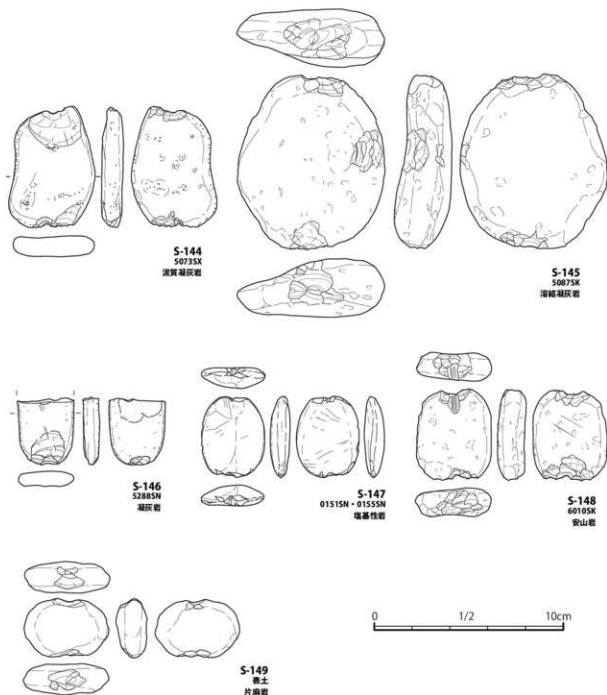
(1) 岩偶・岩版類【総計数11】

140、141は岩偶・岩版類である。素材はどちらも扁平な円礫を用いる。137は表裏面に線刻が施される。上部は折損している。138表面に線刻が見られる。上半分は折損しており、裏面は剥落している。

石材は泥質凝灰岩1点、砂質凝灰岩3点、凝灰岩7点(137、138)、である。

(2) 石棒【総計数3】

142、143、144は石棒である。石材は凝灰岩1点(143)、141は泥岩1点(144)、緑色片岩1点(142)である。(社本有弥)

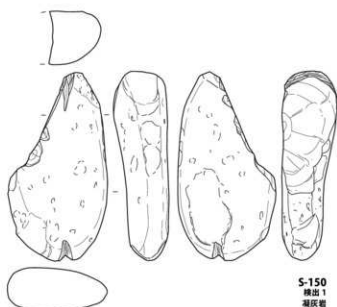


第 100 図 石器図面補遺 1

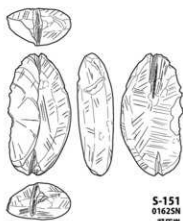
第 100 図は打欠石鍾、第 101 図は切目石鍾および有溝石鍾とされるものを追加で図示した。打欠石鍾に対して、切目石鍾および有溝石鍾では、使用素材および製作時に研磨調整が認められるなど、両者では明らかに資料の性質が大きく異なることが窺える。特に、155 は長軸方向に加えて短軸方向も溝が施されるなど、石製品の様相を呈

すると考えられる。

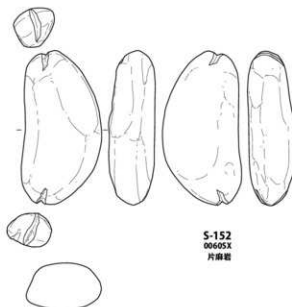
なお、S-138 および 139 は、古代以降の資料と考えられることを追記しておく。(川添和暁)



S-150
標出 1
凝灰岩



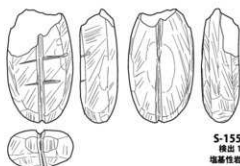
S-151
01625N
凝灰岩



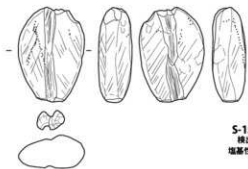
S-152
00605X
片麻岩



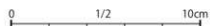
S-153
60135X
凝灰質泥岩



S-155
標出 1
塩基性岩



S-154
標出 1
塩基性岩



第 101 図 石器図面補遺 2

第4節 古代～近世の土器・陶磁器類

概要 本節では、大崎遺跡出土の古代・中世・近世に属する土器・陶磁器類を提示する。本遺跡における古代以降の出土遺物による時期区分は、まず灰軸陶器（K-90 号窯式期・O-53 号窯式期・H-72 号窯式期・百代寺窯式期）と土師器（三河型甕・清郷型鍋）が古代で、暦年代は9～11世紀である。次に、山茶碗（山茶碗尾張型第3型式～第11型式）と瀬戸・美濃窯産陶器（古瀬戸期・大窯段階）、中国大陸産の青磁・白磁と土師器（伊勢型鍋・内耳鍋）が中世に該当し、暦年代は12～16世紀である。また登壇期の瀬戸・美濃窯産陶器が近世（17～19世紀）に対応する。当該期の土器・陶磁器の総量は27リットルコンテナ（271入）で3箱に収まる量であり、縄文時代・弥生時代の土器に比べて圧倒的に少ない。また全398点のほとんどが小片であり、完形や接合により形状が復元できたものは数点に過ぎない。

古代で最も多いのは灰軸陶器で、破片点数は65点である（うち実測点数28点）。最古段階に位置付けられるのはK-90号窯式期新段階（2044など）で9世紀後葉である。これに対して9世紀の土師器は三河型甕（2053）1点のみで、それ以外の4点は全て10世紀後半～11世紀の清郷型鍋である。ただしその口縁形態はさまざまで、これらを時期差とみれば一時期あたりの数量は少なくなる。

中世は山茶碗が主体的となる一方、土師器鍋は前半の伊勢型鍋と同後半の内耳鍋に分かれる。前者は伊勢地域（特に南勢地域）に系譜をもつ胴部器壁の薄い（0.3cm以下）鍋形土器である。胴部外面に顕著なハケ調整痕跡がみえる一方で内面は指ナデ調整痕跡とハケ調整痕跡の両者がみられ

る。胴部上半でくびれその上で大きく外反する口縁部となるが、その上端は内面側に折り曲げて肥厚させるとともに内湾させる。ただし器壁が極めて薄く残存は口縁部などに限られる。後者は、口縁部内面に吊り下げ用の穴（内耳）が付き、主に15世紀後半～16世紀に生産・流通したものである。尾張・三河地域では形態から数種に分類され、当該遺跡では主に東三河～遠江地域で分布する「くの字形」の型式が出土している。なお上記以外には輸入磁器（青磁・白磁）や常滑窯産壺・甕、古瀬戸（瓶類・平碗など）がある。

近世の遺物はごくわずかで、瀬戸・美濃窯産染付碗などが数点みられるのみである。しかも時期は幕末から近代にかけてのものである。

【21A区遺構】

21A区0325P 2001は灰軸陶器碗の小片で直線的な体部で口縁がわずかに玉縁状となる。内外面に施軸されていることからK-90号窯式期で9世紀後半代となる。

21A区0129SK 2002は山茶碗で、厚みのある体部と丸みのある高台が特徴で渥美窯・幸田窯系とみられる。底部内面は使用で摩耗している。時期は12世紀代である。

21A区0138SN・0139SN間畦畔 2003はロクロ土師器の小皿である。底部からの立ち上がりか明瞭で古代の杯に近い形態である。器面に雲母が多く認められる。南設楽郡域（新城市域）でみられるタイプと同一である。12世紀～13世紀前半に位置づけられる。

21A区0145SD 2004は山茶碗の底部である。渥美・幸田窯系とみられる。底部内面は使用で摩耗している。

21A 区 5033SK 2005 は山茶碗類の底部で高台は貼り付け部分で剥がれている。底部内面は使用で摩耗している。

21A 区 5140SP 2006 は土師器伊勢型鍋である。水田畦畔に掘られた小ビットから破砕された状態で出土したが、底部を除く全形の約 60% が残存していることから埋納されたものと考えられる。外傾する口縁部は若干肥厚して内側に折り返す。胴部外面と口縁部内面はハケ調整、胴部内面と口縁部外面は指ナデ調整である。やや長めの頸部が特徴で、時期は 13 世紀後葉～14 世紀中葉とみられる。

21A 区 5176SN 2007 は山茶碗の底部である。渥美・幸田窯系とみられる。底部内面は使用で摩耗しているだけでなく煤が付着している。

【21B 区遺構】

21B 区 5233SN 2008 は山茶碗の口縁部である。渥美・幸田窯系と考えられる。

21B 区 5234SN 2009 は山茶碗の底部小片である。高台は三角形で小さい。尾張型に分類される。

21B 区 5255SN 2010 は灰釉陶器の段皿である。内面は灰釉がハケ塗りされている。K-90 号窯式期に位置づけられる。

21B 区 5380SN 2011 は灰釉陶器碗の口縁部内面に 1 条の凹線が巡っている。体部の立ち上がりは若干外反しつつ直線的で K-90 号窯式期である。2012 は山茶碗の口縁部である。器形は直線的で器壁は 0.5cm 以下と薄い。これらの特徴から東濃系で丸石 3 号窯式期（12 世紀末～13 世紀初頭）と考えられる。

21B 区 5288SN 2013 は灰釉陶器の碗である。体部は直線的で口縁部内面に凹線が 1 条廻り、K-90 号窯式期と考えられる。

21B 区 5398SN 2014 は瀬戸・美濃窯産陶器の鉄釉徳利である。上半部はクロロ目が目立つ。欠損する頸部から上方以外は残存している。時期は近代とみられる。

【22A 区遺構】

22A 区 1001SL 2015 は山茶碗類の陶丸である。直径 2.1cm の球形をしている。表面には花崗岩の小片が 1 か所埋め込まれている。

22A 区 1006SD 2016 は羽釜で、主に中世前半につくられた鍋の一形態である。内外面に煤が付着しており、遺跡内で使用された可能性が高い。

22A 区 1013SN 2017 灰釉陶器の碗である。全体に内湾した体部で O-53 号窯式期であろう。内外面に施釉。

22A 区 1025SN 2018 は土師器内耳鍋の口縁部小片で、屈曲部から外反する口縁部であることから「くの字形」に分類される。煤や焦げが付着している。

22A 区 1027SN 2019 は灰釉陶器の碗で、内外面無釉である。O-53 号窯式期に相当する。

22A 区 1028SN 2020 は青磁碗で蓮弁文碗である可能性がある。体部外面の立ち上がりに施文がある。

22A 区 1039SN 2021 は山茶碗の小皿である。口縁部内面の全面に降灰釉が掛かっていることから重ね焼きの最上部に置かれていたと考えられる。降灰釉は使用により若干剥がれている。2022 は山茶碗類の無台小皿である。焼成や形態から尾張型に分類される。

22A 区 1043SN 2023 は土師器清郷型鍋である。口縁端部は粘土の貼り付けにより断面が逆三角形に肥厚している。

22A 区 1046SN E-2024 は灰釉陶器碗の底部である。ハの字形に広がる高い高台が特徴で

O-53号窯式期に位置づけられる。底部内面は使用により摩耗している。2025は常滑産陶器の瓶類口縁部である。頸部上端外面に三角形の粘土帯を貼り付け垂下させて口縁部としている。口縁部内外面に降灰軸が掛かり、内面に軸着がある。

22A区 10655N 2026は青磁の鎗蓮弁文碗である。全体に内湾気味である。

22A区 10675N 2027は渥美産陶器の甕または壺である。無軸で肩部に平行タタキ痕がみられる。

22A区 10715N 2028は古瀬戸の楕鉢である。胴部片のため口縁部形状は不明であるが、やや内湾する形態と考えられる。

22A区 10745N 2029は灰軸陶器の碗で体部はやや直線的である。内外面施軸。

22A区 10755N 2030は土師器伊勢型鍋で口縁部の小片である。内面側に折り曲げた口縁の肥厚が顕著となっている。

22A区 10765N 2031は山茶碗の口縁部小片である。内面は使用により摩耗している。

22A区 10825N 2032は青磁の鎗蓮弁文碗口縁部である。器形は2150に似るが蓮弁文の形状が異なる。E-2033は土師器伊勢型鍋の胴部上半の小片である。

22A区 10905N 2034は灰軸陶器碗の口縁部小片である。端部は玉縁となっている。O-53号窯式期に位置づけられる。

22A区 10925N 2035は渥美産陶器の壺とみられる。口縁部小片である。

22A区 10945N 2036は土師器清郷型鍋である。口縁端部は粘土の貼り付けにより断面逆三角形に肥厚させている。2037は山茶碗類であるが器壁が厚くやや大型の鉢の可能性があり。無軸で外面は摩耗が進んでいる。2038は古瀬戸の灰

軸平碗である。直線的な体部から口縁部は上方へ向いている。後期様式I段階に相当する。

22A区 11045X 2039は白磁の碗である。緩く内湾する体部から口縁部へ外反する。口縁から下へ約2.0cmのところで1条の凹線が巡っている。外面には擦れや傷が目立つ。

22A区 12225X 2040は土師器清郷型鍋の口縁部で、口縁端部は横方向に張り出して羽釜状となる。

22A区 12305I 2041は古瀬戸壺類の胴部下半である。

22A区 13685P 2042は山茶碗の底部小片である。高台は小さく潰れたようになっている。使用により摩耗している。渥美窯系に分類される。

22A区 13785K 2043は灰軸陶器の碗口縁部小片である。若干外反している。百代寺窯式と考えられる。

22A区 100105S 2044は灰軸陶器碗の底部で、長めの三日月高台であることからK-90号窯式期新段階～O-53号窯式期であろう。2045は灰軸陶器の皿底部である。底部外縁に短い三日月高台が貼り付けられており、K-90号窯式期とみられる。灰軸は内面のみ掛かっている。2046は古瀬戸の楕鉢である。約10点の破片となっていたが接合によって約40%が残存が確認された。底部に回転糸切り痕があり、胴部下端には焼成前にへら工具の擦れた痕がみられる。胴部は全体的に内湾気味である。擦り目は上から見て左方向にカーブしている。いずれも7条の溝からなっており、ハケ状工具で施している。2047は古瀬戸の楕鉢口縁部小片である。残存部に摺り目はみえない。2048は古瀬戸瓶類の胴部下半である。2049は常滑産陶器の甕である。実測図掲載破片のほかにも胴部片もある。底部外面は横方向の指

ナデ、同内面の胴部立ち上がりには強めの指ナデが施されている。また内面は大半に降灰軸が掛かっている。色調は暗灰色～暗赤褐色をしている。

【22B 区遺構】

22B 区 6068SZ 2050 は灰軸陶器の椀である。内外面施軸。時期は K-90 号窯式期である。

【21A 区検 1】

2051 は灰軸陶器の椀でほぼ完存状態であった。高い高台で椀部の高さも 6.1cm あることから深椀に分類される。時期は O-53 号窯式期で 10 世紀前半である。2052 灰軸陶器椀の底部小片である。内外面ともに無軸で、高台は底部の縁辺に貼り付けられている。その特徴から H-72 号窯式期に位置づけられる。2053 は土師器甕でほぼ直角に屈曲する口縁部は外反し長さは 2～3cm である。約 0.5cm の器壁内外面は横方向の指ナデが施されている。これらの特徴から三河型に分類され 9 世紀前半代に位置づけられる。なお口縁部の大きさなどから推定口径は 15～20cm と推定され、カマド固定用ではない移動可能な小型甕と考えられる。2054 は山茶碗で口縁部はわずかに外反する。渥美・幸田窯系と考えられる。2055 は山茶碗の口縁部で外面の一部に成形時の擦痕がある。渥美産とみられる。2056 は山茶碗の口縁部で、直線的な器形や焼成から尾張型に分類される。2057 山茶碗の口縁部小片である。2058 は山茶碗の椀で、口縁部は緩く外反しその端部は丸い。その形状から渥美・幸田系と考えられる。2059 は山茶碗の底部で潰れ気味の高台に初殻痕がある。2060 は山茶碗の底部小片である。高台は幅のある逆台形を呈する。渥美窯系である。2061 は山茶碗の底部小片である。高台は小さく潰れている。底部内面は使用により摩耗している。2062 は古瀬戸類の灰軸小皿である。

2063 は古瀬戸播鉢の体部であるが、残存部に擦り目はみられない。内外面が無軸である。2064 は土師器伊勢型鍋で口縁部の小片である。口縁部の厚さは 0.5cm 以下と薄い。2065 は土師器伊勢型鍋の胴部上半の破片である。外面は煤が付着する一方内面にそれはない。2066 は近世の瀬戸・美濃窯産陶器である。灰軸の端反碗で江戸時代後期であろう。

【21B 区検出】

2067 は山茶碗類の鉢で胴部の小片である。2068 は山茶碗の底部で潰れ気味の高台であることから渥美産の可能性があり。時期は 12 世紀とみられる。2069 は山茶碗であるが、無台で推定底径が 4.0cm であることから小皿とみられる。2070 は色調が暗赤褐色で、無軸・硬質の焼成である。これらの点は常滑窯産陶器に類似しているが産地不明である。ハの字形にひらく高めの高台で小碗に分類されるであろう。底部内面は使用により摩耗している。2071 は古瀬戸の播鉢である。底部に回転糸切り痕、内面は使用によって擦り目の摩耗と鉄軸の剥落が進んでいる。2072 は古瀬戸の播鉢である。胴部小片で外面・内面ともに露胎した状態である。

【22A 区検 1】

2073 は灰軸陶器の椀で内外面に施軸がなされている。丸みのある体部から口縁下部が若干窪んで僅かに外反する。2074 山茶碗類の小皿である。尾張型第 5～6 型式（12 世紀後半～13 世紀前半）に位置づけられる。2075 は手捏ね土師器の小皿である。全体に指頭圧痕が認められる。器面に雲母が多くみられる。胎土に赤褐色粒が含まれる。2076 は青磁椀で口縁部の小片であるが施文は認められない。2077 は伊勢型鍋の上半部である。胴部器壁は厚さ 0.2cm ときわめて薄い口

緑部はここから内外面ともに肥厚させている。ただしその内湾の度合いは小さく外反したようになっている。外面の調整痕は不明瞭である。2078は土師器伊勢型鍋の胴部半ばの破片であ、内外面ともにハケ調整痕跡がみられ、器壁は他の破片に比べてやや厚くなっている。外面は煤・焦げが付着している。2079は土師器伊勢型鍋の口縁部小片である。口縁部内面側に折り返しは他と同じであるが、口縁部の内湾と屈曲に加えて器壁が極端に薄くなっている(0.2～0.3cm)点が特徴である。その形態からみて時期は15世紀末～16世紀に比定される。2080は土師器伊勢型鍋の口縁部小片である。口縁部の内湾は小さめで器壁の厚さは約0.5cmある。頸部外面に1条の凹線が巡っている。もとの色調は黄褐色だが外面は被熱により赤色化している。2081は15世紀以降の土師器内耳鍋の口縁小片である。形状からすると「くの字形」に分類される。遠江～東三河地域を中心に分布するタイプである。2082は古瀬戸の揃鉢口縁部である。残存部で擦目確認できない。2083は古瀬戸の灰軸平碗である。体部は内湾し口縁部は斜め上方へ向いている。内面に焼成時の滓が付着している。

【22A 区検 1.5】

2084は灰軸陶器碗の底部で内面は使用により摩耗している。高いハの字高台でO-53号窯式期である。2085は灰軸陶器の段皿である。全体に厚みがあり高台は短い三日月形をしている。内外面に施釉がなされK-90号窯式期とみられる。2086は灰軸陶器碗の底部である。高台は小さい三角形を呈する。2087は青磁の鎗蓮弁文碗である。2088は青磁とみられる磁器碗である。灰白色を呈する。外面は全面が剥落しており、内面に緑灰色の釉が残るのみである。2089は青磁合子

の身である。体部外面に縦位の鎗文が全周する。その上は蓋を受ける構造になっている。なお蓋は出土していない。2090は土師器伊勢型鍋の口縁部小片である。口縁端部から外面に焦げや煤の付着がみられる。2091古瀬戸の揃鉢口縁部である。2092は瀬戸・美濃産陶器の鍋である。口縁部の小片のみであるが後円部外面に煤状の黒色物が付着しており使用痕と認められる。2093は戦国時代の土師器内耳鍋の口縁部小片で、「くの字形」に分類される。口縁上端はさらに外面側に折り返して指ナデでつまみ上げている。

【22A 区検 2】

2094は灰軸陶器碗で口縁から下方へ全体的に内湾する器形であることからO-53号窯式期とみられる。2095は灰軸陶器の碗である。内外面に施釉されており、高さ約1.0cmの高台が特徴である。それらの特徴からO-53号窯式期に位置づけられる。2096は灰軸陶器の碗で厚みもある最末期のものであろう。内外面に施釉がなされている。2097は土師器清郷型鍋である。5mm以上の厚みがある胴部上端に羽根状の粘土を貼り付けて羽釜に近い口縁部としている。その端部は蓋受けか吹きこぼれ防止のためか若干上方につまみ上げられている。内外面に煤などの付着はない。2098は中世陶器の無台碗とみられるが産地は不明である。底面は回転系切り痕がある。2099は土師器伊勢型鍋の口縁部小片である。その屈曲は小さく斜め上方に伸びており、器壁も比較的全体に厚い。

【22B 区検 1】

2100は渥美産陶器壺の胴部上部(肩部)である。凹線があるほか縦位の線刻が1条ある。上部は降灰釉が掛かる。

【21A・B区調査区その他】

21A 区 T0005 2101 は山茶碗で約 60% 残存している。産地は渥美・幸田窯系統と推測され、渥美窯の I-2a・b 期（12 世紀後葉～13 世紀前葉）に相当する。内面は使用による摩耗が進んでいる。

21A 区 T0017 2102 は土師器伊勢型鍋の口縁部小片である。端部を内面側に折り曲げて内湾させているがその曲げ幅は小さく、折り曲げ端部の痕跡が段となっている。なおその厚さは 0.5cm 以下と薄い。時期は 15 世紀末～16 世紀と推測される。

21A 区壁面整形 2103 は灰釉陶器碗の底部である。断面でみると高台はハの字形にひろく。内面は使用で摩耗している。

21A 区調査区北壁 2104 は土師器伊勢型鍋の口縁部小片である。端部を内面側へ折り曲げて内湾させている。その厚さは 0.5cm 以下と薄い。煤・焦げの付着はみられない。

21A 区切株清掃 2105 は灰釉陶器の口縁部で内外面の釉薬がはがれている。O-53 号窯式期とみられる。

21A 区表採 2106 は灰釉陶器の碗底部である。ハの字形に開く高台でその形態から O-53 号窯式期に位置づけられる。底部内面に降灰釉が厚く釉着している。2107 は山茶碗の底部小片である。高台は貼り付け面で剥がれている。底部内面は使用により摩耗している。2108 は古瀬戸類の灰釉丸碗である。2109 は中国大陸産の青磁碗である。

21A 区攪乱 2110 山茶碗の底部であるが高台が貼り付け部分で剥がれている。渥美系と考えられる。底部内面は使用で摩耗している。2111 は山茶碗の底部小片である。丸みのある高台は平らにつぶれている。底部内面は使用で摩耗している。渥美・幸田窯系に分類される。

21 区表採 2112 は灰釉陶器の碗底部である。ハの字形に開く高台でその形態から O-53 号窯式期に位置づけられる。底部内面に降灰釉が厚く釉着しておりあまり摩耗していない。2113 は山茶碗類の口縁部で、体部の形状が直線的であることから 13 世紀以降とみられる。

【22A・B 区調査区その他】

22A 区 TT01 2114 は古瀬戸の灰釉平碗の口縁部である。直線的な器形で口縁部近くで若干角度が急になる。

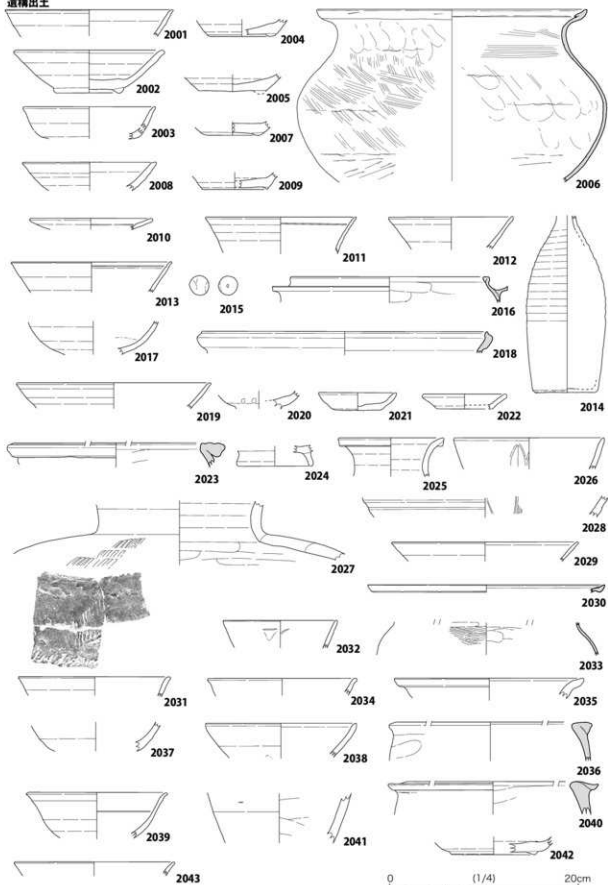
22A 区南北トレンチ 2115 は古瀬戸の灰釉平碗である。口縁部付近で角度が変化する。後期様式第Ⅱ段階に相当する。

22A 区調査区東壁表採 2116 は灰釉陶器であるが、器種は口径 10.8cm で小碗にあたる。口縁の外反は小さい。

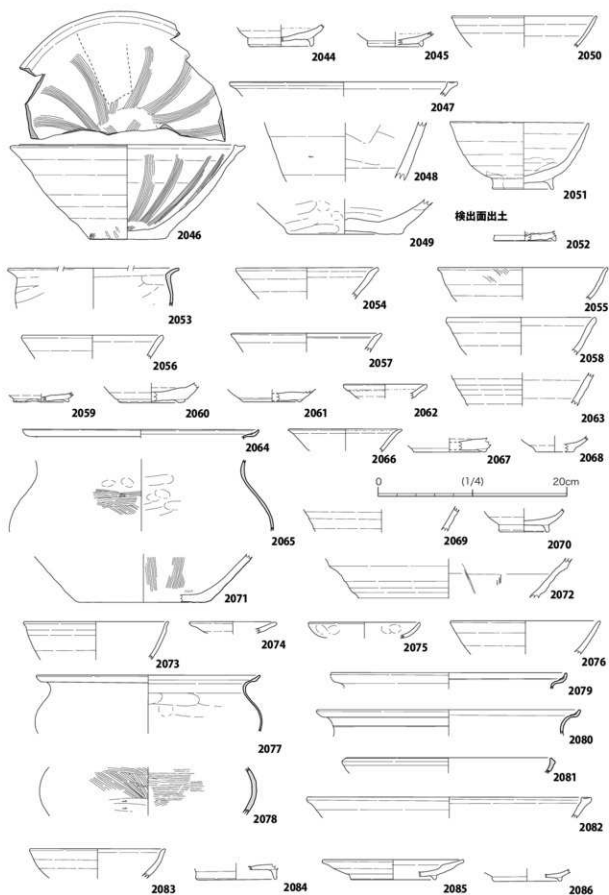
22A 区表土 2117 は灰釉陶器碗で、全体に丸みのある形状で口縁部の肥厚は比較的少ない。灰釉はハケ塗りであることから K-90 号窯式期の新段階とみられる。2118 は青磁の鎗蓮弁文碗の小片である。2119 は青磁鎗蓮弁文碗である。2120 は常滑産陶器の甕である。断面 N 字形口縁で、常滑第 11 型式（14 世紀）に相当するとみられる。色調は暗赤褐色で上端には降灰釉が掛かる。2121 は古瀬戸の罌鉢口縁部である。内面側にかえしがついている。擦り目については不明である。

22A 区排土 E-2122 は灰釉陶器段皿である。口縁部から約 2cm の範囲で肥厚し段をつくっている。E-2123 は常滑産陶器の甕である。平らな底部から胴部は大きく外反しながら立ち上がる。成形痕跡は指頭圧痕と指ナデがみえる。底径は 20.6cm と推定されるので中型甕と推測される。

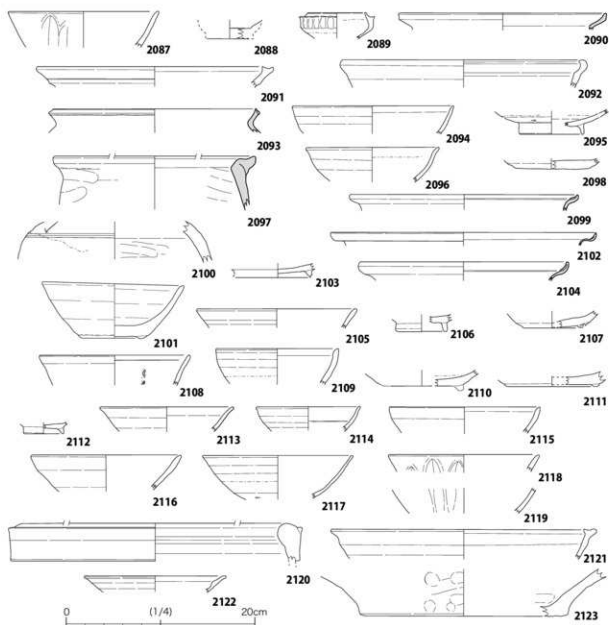
遺構出土



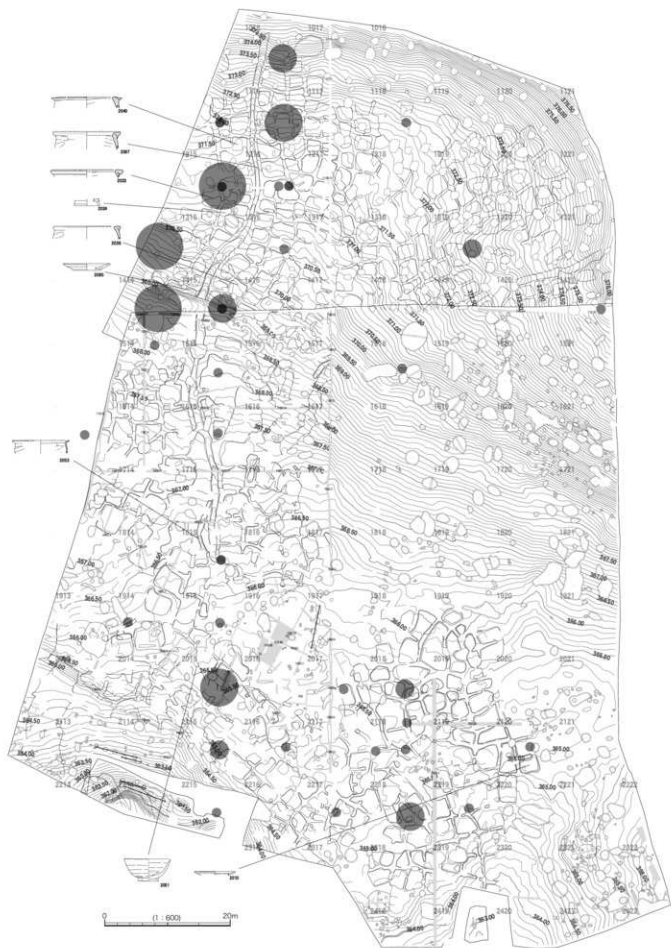
第 102 図 古代～近世の遺物実測図 1



第 103 図 古代～近世の遺物実測図 2



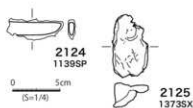
第104図 古代～近世の遺物実測図3



第 105 図 遺物出土分布傾向【古代】

第5節 金属関連遺物

金属関連遺物としては、鉄製品と鉄滓がある。
2124 は 1139SP から出土した鉄製品である。
細長い扁平な形状で一部が欠損しており、残存
長は 6.0cm を測る。形状から刀子とみられる。
2125 は 1373SX から出土した 2 分の 1 分割桃
型鉄滓である。最大長 6.8cm、最大厚 2.6cm で、
気泡は少なく上端面は比較的平滑である。鍛
錬鍛冶に伴うものと思われる。



第 107 図 金属関連遺物